はじめに

梅田地区の信仰について、気付いた点ひとつふたつに触れてみたい。梅田地区の信仰について、気付いた点ひとつふたつに触れてみたい。 とを繙かれたい。

、こうご。 る。もう信仰というより、生活の知恵の交換、会議、娯楽の場となってお。もう信仰というより、生活の知恵の交換、会議、娯楽の場となってる。もう信仰というより、生活の知恵中の例(石鴨)すら 報告 さ れてい 二、講、特に庚申講が盛んであった。各組々の庚申の掛け軸や箱膳を二、講、特に庚申講が盛んであった。各組々の庚申の掛け軸や箱膳を

いる。桐生に隣接している土地柄から、機神様が他の土地より強く意識されて桐生に隣接している土地柄から、機神様が他の土地より強く意識されて三、山岳丘陵地帯という面から山の神祭祀は盛んであったし、織物の

年八月甲戌の条に「上野国山田郡賀茂神美和神那波郡火雷竝為三官社」在、桐生市宮本町鎮座)について、日本後紀巻五、桓武天皇 延 暦 十 五四、式内社の賀茂神社(現在、桐生市広沢町鎮座)と 美 和 神 社(現

戊寅の条に"位階勲等』昇進の記事がある。とあり、さらに三代実録、巻第三十七の陽成天皇元慶四年五月二十五日とあり、さらに三代実録、巻第三十七の陽成天皇元慶四年五月二十五日

決して無縁ではあるまい。 県民俗調査報告書第五集―・「板倉町の民俗」―同前第三集―参照)と 順民俗調査報告書第五集―・「板倉町の民俗」―同前第三集―参照)と での雷神祭司の集団が古く、上野に住んでいたことは、現在、境町、

になっているのなどは何の問題も無いのである。もこのような背景の上に考えねばならない で あろ う。祭神が日本武尊電電様の信仰が東上州に色濃いのも決して梅田の鳴神山の雷神岳神社

なければならぬ点も多いのである。近く稿を改め詳説したい。漸」(「文化以前」所収)などとも決して無縁ではなく、これから解明しこの賀茂神・三輪神の問題は高崎正秀先生のいわれる「出雲文化の東

民俗とも通ずる面があるのである。ぜひ、ともどもお読み頂きたいと思くすでに調査した梅田から尾根一つ越えた勢多郡東村の民俗や松井田の以上簡単に述べて来たが、一、二、三などの特徴は梅田地区だけでな

筆者は編集に際しては、採集者の個性と話者の話しぶりを尊重して、

字句を改めることをしなかった。そのため表記法などにいくぶん不統 の点があるのをお断りしておく。(佐藤 清

神社 信 仰

石 祠。 氏神などを含む

幡

通称忠綱明神様 旧無格社

特殊神事 り)四〇〇年のものありしが、昭和二七年許可をうけて伐採す。 田原又太郎足利 田原又太郎忠綱公霊 従来は珠数引きという夏の被行事が行なわれていたという。 (藤原) 忠綱自刃の地なり。神木として杉 (二丈まわ

、古平の伝説 羽毛を玩具にすることを禁秘とす。怪我をするといって忌みきらら風 入産間郷の鎮守と崇むと。付記 の死骸を土民この地に埋葬す。後義兼朝臣の命によりその霊を祀りて 犬に見出されて敵将某のために山鳥の征矢を以って射られ自害す。そ (忠綱公は)建久五年今の飛駒村字皆沢にて自害すと伝う。 忠綱公戦敗して明神山の大木の下に隠れしを、 今も皆沢にては白犬を飼わず山鳥の 敵の白

忠綱明神

習がある。(「栃木県神社誌」より抄録)

がある。(猿石) 旧菱村の塩釜神社に忠綱公の首を祀るという。松には血の池などの名所 栃木県足利市 (旧三輪村) 松田から逃げて皆沢に来たものといわれ、

まで持って行き、 忠綱公が討手に殺されたので、胴を皆沢に祀り、 塩ノ瀬の八幡宮に祀った。今の塩の瀬神社である。 首は塩で清めて上菱

> 忠綱明神の神体 正一位八幡宮に祀られる忠綱明神の神体は木像で、 裏に天文十二年と

(皆沢)

う。安置した箱の 墨書してあるとい



神 宮 0 -天文12年作という 関口正巳) (撮影

裏には「寛政三年

州か。 亥八月卅日大工大 明神が追われてき 列金蔵」と墨書し てある。大列は大 白い犬 (皆沢)

忠綱明神 た時に、かくれて

忠綱

神様への忠義のために白い犬は飼わない。一ノ瀬本家で前に飼っていた の白い犬が見付けてほえたために、ついに殺された。そこで皆沢では明 もとは四月と十月の十五日におまつりをしたが、今 はっと めの関係 山でこの春に刈場していた時にいなくなってしまった。(皆沢) むかし藤生紀伊守が戦争に背負って歩いたものという伝承で、 四月の第三日曜日におまつりしている。(皆沢) 天神さまの御神体 石鴨の天満宮のわきの小祠は御神体の木像がある。菅原道真の木像

5

上

大杉様の祭り

を通したあとのようなのがある。

石鴨

ひも

で、

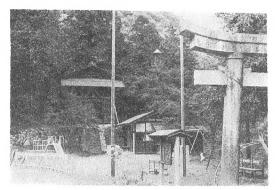
わった。(馬立) 七月二十三日に、 たいこみこしをかついで、村内を巡る。 お獅子もま

寄日の尾根にあったのが、 ある洪水の時、松の根にショイマクラレて

いたところを追手



享保4年 (撮影 関 口 正 巳)



関 П 正巳)



(皆沢) 八幡宮の祝詞 享保4年 (撮影

ように。おみこしは現在二渡会館に保管してある。

世話役は青年の親方連(三十才ぐらい)。 中学生が 出 るので



大杉 神社神楽殿 (後沢)

し天王様をまわすようなことはしない。(萩平)

八坂神社の祭りは七月二十五日には赤飯をたいて祭る。

しか

もとは七月十五、六日の農休みに祭ったが、その後二十三日

わからなくなったのを、探して下にもって来たが、それも危険

のち寄日沢の山の神に合祀してしまった。

当時祭日は八十八夜で、各戸から銭二銭ずつの祭り、茶、

菓

酒など買って組内だけで祭った。(萩平)

に作って飾りつけた。四年前までは御輿を担いだ。(猿石) になり、今は八月五、六日の桐生祭りに祭る。仮宮を会館の前

二渡神社

関口正巳)

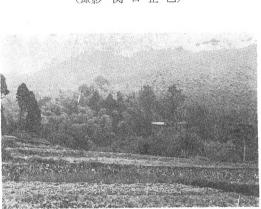
かわる。上からまわった場合には、翌年は下からまわるという 青年と子ども(学校へ行っているもの)、夏のおまつ りのとき 秋まつりは上の原にある八坂神社のおまつりが八月五日である ので、これを秋まつりの代りにすることにしている。(二渡) である。 に出した。このコースはきまっていた。 二渡神社の氏子の範囲をまわった。一年ごとにまわる順序が 天王さま→猿石→忍山→二渡→長泉寺境 天王さまのおみこしが、四年ほど前まで出た。 もとは猿田彦神社といった。猿石にあり、四丁目全体の氏神 祭日はもとは四月の十日、現在は四月の第一日曜日。 かついだのは

の寄付があった。 学校の先生が二人ついた。 費用は各戸からの寄付(二百円) によった。 このほか酒など

行くと近所の人が出ておさんせんをあげた。 おみこしは各家へはまわらず、道路を通っただけ。まわって



(八坂神社) (猿石) (撮影 関 口正巳)



関 正 (撮影 口 巳)

前は世話役の家で、最近は社務所とか二渡会館でおそなえ をつ くっ

それを組長から各戸にくばった。お札は神主がつくったのをくばっ

おみこしは厄病よけとして出したものである。 (中居・猿石

昔は女人禁制であったかも知れない。

鳴神山には女道というのがあり、それは奥の院に通じていない。

もとの神主さんはシンゾウ院といって修験の人であった。

式年祭に参列してくれなどと通知がある。

四月八日であった。

神楽もやった。

氏子は鍋足、

高沢の人達。

元日に登拝するほか、祭日は、

五月の第

日曜である。

鳴神山にあり、普通タケ神社と

いってい

る。

雷神岳神社

豊受姫、タクハタチヂ姫。

ザンマ(残馬)様(二渡神社に合祀)

して合祀した。二渡神社に合祀したわけである。 忍山 (オッシャマ) の奥にある山の名で、天王様 (八坂神社) におろ

様が離れたら「痛い、痛い。」と狂っていたので、 手をかじりながら大門まで出て来たが、痛いのがわからかった。ザンマ 返しをさせられて、 だからと泊った。炭がまの前で火をおこして寝ていたら、ザンマ様に枕 に山へ行った竹さんは仲間が下ったのに、ひとりで明日は炭の入れ替え 炭焼きの人は初午には必ず仕事を休めという。明治の初め頃、 火の方に頭が行って大やけどをした。そして自分の 組元の人 が 草刈り籠

に入れてかついで来た。手んばになってしまった。

大神宮さま

在は鳥谷戸組で、 大久保山の出口にあり、 春おまつりしている。 もとは森下一家でまつっていた。 (猿石) 現

山王さま

(木をつくった) 忍山の蕪丁にある。下の病に霊験があるという。 おまつりの日は特にない。 をあげるからなおしてくださいという。 お願をかける とき に は、男根

塩

最近の神社は板がはがされてもされたりして、

荒れ果ててい

宝暦四年とほられた手水鉢がある。

下の賀茂神社から、

三人は、菱村、 川向うの菱にある塩釜神社は小島一家の神社であるという。 小島一家の先祖は奥州からの落人であった。兄弟三人で落ちてきた。 浅部村 (現在の二丁目)、上久方村(現在の一丁目)に

昔は



について文書が残っている。

ころまで行った。

結果は一般の人から迫害を受ける破目になった。それ 小島一家の署名と血判がある。

大さわぎをした。

問題は郡代のと

我々は一致

そのお宮の門や屋根に家紋をつ

今でも

家でなければ赤飯は炊かせない。 村人と争いがあった。

山王の猿 (居館 日枝神社) 拝殿の神に美事な猿の彫物が ある。猿は日吉の神使 (撮影 今井善一郎)



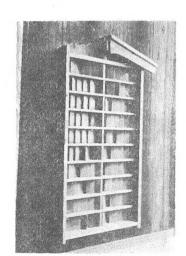
金沢の大黒天 (撮影 阿部 (金沢) 孝)



(屋敷稲荷) (最影 関口正巳) (皆沢) (撮影



枝 神 社 (居館) (撮影 阿部 孝)



参拝札 (居館 日枝神社) (撮影 阿部孝)

う。村社である。

もとの一区、 を氏神と

丁目が二つに分かれたその一

山王様

(日枝神社)

幡様が氏神であった。 氏 森沢の八幡様、

> 一家氏神 (大門

峯岸一家(上久方)これは昔 八 書である。

っており、 附近の人は神社をシオノミヤと お産の神である。

谷刑部の守本尊といわれている。

根本山神社

(通称根本山大正院 旧無格社

主祭神 大山祗命

配

薬師大神 一月一日(元旦祈願祭、七草講中代参ありたり。)

○月五日(土地の奉讃会により村祭りを行なう。)

たりの 四月一日(四月二一日、二日、三日と祈願、養蚕講二四日代参あり

神木または神跡 根本山を神体とす。

崇敬者 一二0人

特殊神事並びに神賑行事

いう。 者、さらに昔日には十二山は原っぱであるのでバクチが行なわれたと 中は現在、大正院藤倉家は休講。昔事はつぐみの焼鳥を賞美する登山 右の祭神外に土地のもの、十日夜の山神祭を行ない登山参拝する。

由来沿革

一、下野国誌に曰く。 るべし。近年参詣するもの多しと。 根本山神安蘇郡彦間村の山奥にあり。大山祗神な

近の輩群参霊場となるべしといえり。 けた。後弘法大師飛錫の時登山してこれを神霊擁護の地なり、 旧記を按ずるに往昔役の行者富士山に登り東北を臨みしに瑞雲天にタ に荊棘途を埋めて怪岩地に崎つの奇峯あり。 ナビく小山あり。 当社は天正元年四月一日の創立で世襲の神地霊場である。 その山を指して至れば雲方に古木蓊蔚として青苔滑 故にこれを根本山と名付 後世遠

果せる哉。 て相承の秘法を修し、嫡々相伝すること三百年。(「栃木県神社誌より 幾星霜を経て中興の法師良西法印桐生川の流れに随い登山

という本には、 あったが、江戸時代末には広く信仰されて い た。「根本山ひとり案内」 戦争中に供出してなくなってしまい、里宮にはこもり堂などの宿泊所も いるという。 石鴨の天神さんから一里で、奥の院は石宮で、神社にあった釣鐘は、 江戸からの道筋や、里程、宿泊などがこまかく記されて

で殺され、そのために開張もとり止めになり経費だおれになっ てしま い、その後信仰もおとろえた。 出開張で江戸に出かけたとき、江戸に着く手前で井伊掃部守が桜田門外 井伊掃部守の領地になり、特に深く信仰していろいろ援助してくれ、

が信者に多く、水に対する感謝からとみられるように多額の寄進をして いるという。(清水) 根本山は、この地の水源なので、下流の水車の製米業者や、 製粉業者

峰ヶ原の方がよく見える。ここが分水嶺になっていて、ここから流れ出 頂上にも石宮があるのでおどろくが、根本山の頂上からは、男体山や古 した水が桐生川になる。 山まわりでまわる山には、よくここまで上げたと思われるような山 (清水

根本山大正院の信徒

切 二七戸 一二言

落合·今倉 (前原ガイトを含む) (閉籠里、 御所平、 原 四戸

五芦 九戸

馬立 後沢

(筑原、 (清水、

東上 葛平を含む

八戸

年中諸祭礼

日待定日扣

月

十十八七二元 日日日日日 日日日日日

十四日

十六日

愛宕山

廿四日 馬立

水神祭 下手

平、清水、当実平

廿 十 二 日 熊野祭 御所平、星落沢

梵天納 月 村中

梵天納 雷電祭 二渡 萩平

十十十十四四四朔九八五四 小影祭 雷電祭 院内神事

山神祭 風神祭 太神宮 馬立 村中 下手 原

山神祭

平

日 山神祭 リノ上

十十五二日日 廿四 風祭 愛宕山 馬立

十五 十三日

稲荷日待 馬立前原一

赤城祭 寄日

摩利支天 馬立前原一家中

日 日

馬立

廿四 日 愛宕祭 馬立 天王祭 萩平、 馬立

萩平半治郎殿江御札十八枚持参 同処弥文治殿江御札十八枚持参 風

の祈禱□□□□、右当日天祭当番宿ニ御札持参ニ而法楽ニ参ル

同 馬立、

廿四四

日梵天納

日 萩平、馬立 (原文七月欠)

日 馬立、閉籠入

月

廿 八

日 鎮守祭 稲荷日 待 馬立 清水

朔

皆沢江行

八日 不動 筑原

馬立、 馬立 平、下手

初朔

ŋ 忍山

七日

日泊巳日

忍山大川

馬立前原

山神祭礼 一家中 家中

廿七日 十二日朝 廿四日 十五日 高戸山神之祭先方ゟ案内有之候事 十三日 十一日泊り 愛宕祭 百 馬立 馬立 馬立 下手 忍山 馬立 一家中

三日夜泊 葛平二日夜泊 萬原 第 日 金七五三泊り 馬立

十二月

八日朝一 忍山七日昼泊り一 忍山

四日昼

寄日

毎年二月天祭、六月土用以前ニ風祭御札外ニ金七五三之儀者別帳ニ有之候 十三日夜ぷ十四日朝 下手

扣

 三 枚
 高竹
 拾八枚
 山地二

 五 枚
 葛平
 拾八枚
 萩平

 卅 枚
 馬立
 十七枚
 筑原

三拾八枚石鴨 拾三枚 中組 渡迄

右之通矢念無之(以下破捐)外御札儀茂札数百四十枚

わかるであろう。(都丸十九一)ていたことがわかるし、こうした祭りが、修験の影響下にあったことが明であるが、この地域の邑邑のさまざまな祭りに、この大正院が関与し以上は根本山大正院に保存されている巻物によって抄写する。年代不

根本山略縁記

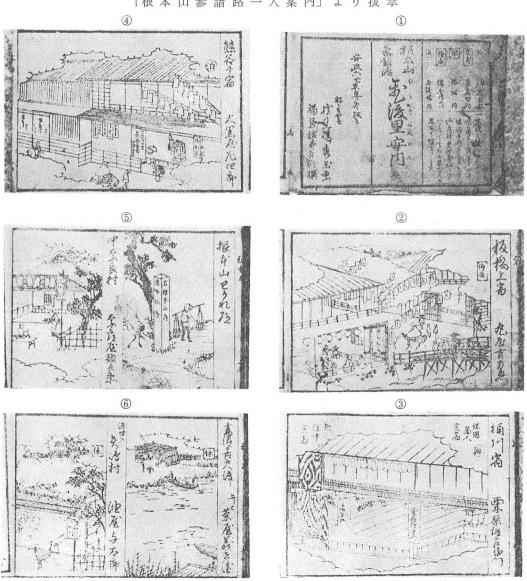
ずりて其大概を記す而已 儀いちしるし別て火難を消除し盗難を避け如意満足ならしむる事眼前世 芸愛敬福禄倍盛寿命長延工商利潤心願成就せずといふことなく罰利の二 **輩登山参詣無難にかへりぬ今においても汚穢不浄のもの登山すれば山荒** 児孫に至る迄的々相承の秘法なり其後信心の輩伝へ聞路を尋参詣せんと 覚るがごとく天晴夜も明ぬれば神徳を仰き拝謝し幣を納め下りぬ是則吾 此地に跡をたるること年久し汝が至誠に感じて如斯曰うとおもひ忽夢の 汝が為に秘法を授く身心清浄にして間断なく信仰し衆生を救助すべし我 苔滑かに古木森々として奇岩霊峰清滝異草実に神霊の地也則石苔に端坐 先師中興了西師役君の霊夢に依て桐生川の流にしたがひ根本山に至れば 仰し時々登山して幣を納めしと。しかれども年暦の久しき其旧記を失ふ の輩登山の霊場となるべしとて別れをなし男体山え赴給ふ吾租教を受信 休らひたまひ吾祖に告て曰当山は神霊擁護の地也後世に至り山開門遠近 時吾先祖拝請して加持を乞ひ教を受夫より根本山にかかられ暫く石上に爰に下野国安蘇郡入彦間村根本山神の濫觴は往古弘法大師東国下り給ふ 不思議数多あり身心清浄にして参詣すれば病難劒難水難諸難を消除し諸 水に浴し不動定に入丹誠修法怠慢なし然る故に哉願満の当日より信心の 満足せん事を欲し即千日の大願を発起し日々艱難辛苦して晨旦ごとに河 変大菩薩の流を汲旦先師の遺教を継ぎ霊境を開遠近の諸人登山して心願 するに山鳴雲覆ひ登山すること能ざる事凡二百有余年に及べり予賤も神 し持念する時山中霹靂鳴動し空中より告て曰く汝霊夢に依て来るならん 人の知る所也誠に神徳の霊顕鏡の影をうつすがことし委くは本記にゆ — 79 —

山 大 正 院

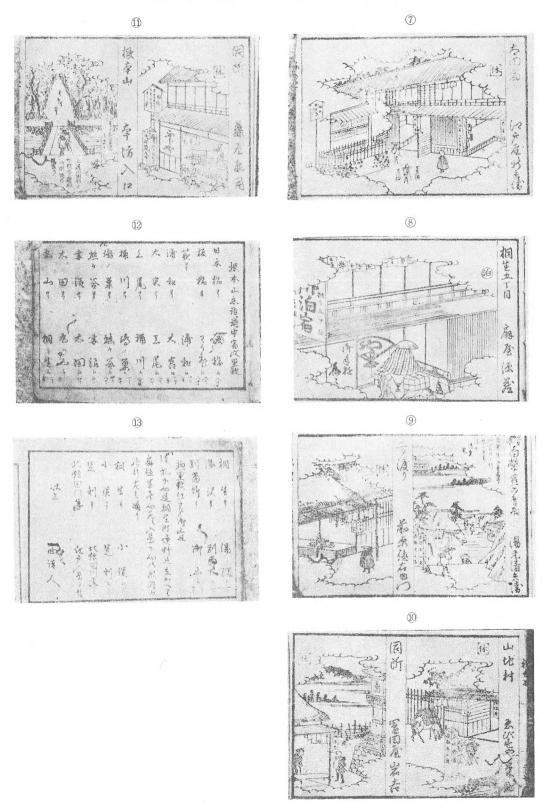
根本



案 ょ 抜 萃 「根本山参詣 路 内」 ŋ



「根本山参詣路一人案内」より抜萃





根本山への里程標 居館の民家の庭にある。 この27丁は桐生からの距離(撮影 今井善一郎)



道しるべ (石鴨) (撮影 上野 勇)



根本山の燈籠 梅田一丁目 大門にある (撮影 清水義男)



根本山神社里宮 (今倉)



根本山神社里宮の手洗い

金 上尾宿 上尾宿 一次守伊之时 天保二卯年 下保二卯年

Ш の神と機神様

神

Щ

をやる人がお祝いをした。 の神はジュウニサマという。十二日はジュウニサマの日なので、 Ш

戦争中のこと、バカが火をつけて焼いてしまった。 奥のジュウニサマは二階づくりのいいかげんでかい社殿があっ たが、

他は男女平等に飲食する。(芦田谷) 作った。宿は順番。 ない年四回だった。 三月十六日、十一月十六日の年二回、昔は十二月、一月の十六日も行 山仕事する家の女が、昼間から集まってご馳走を 夕方になると子供も集る。大人は夜酒を飲む。 その

祀して、毎年四月の第一日曜にお祭りをすることにした。(萩平) お祭りをしていたが、それがなくなったので、赤城様もこの山の神に合 昭和四十年から始まった。その前赤城様 (別項)と天王様 (別項) 0

寄ってバンダイ餅をつく。泊り山でふつうのウルチ米をふかして、手ョ く。今でも農家の風呂たきなどのマキを作る山仕事をやる人がいる。 んで祭る。山の神は火早いので、山火事にならないように祭る。仲間が 山の神の石宮が一つの沢に一つぐらいはある。初午に炭焼きの人が休 (斧)の背で伐り株の上などでついた。今 は 家 で 臼を使って餅をつ

(かぐら)をした所と伝えられる。桐生・足利の騒音が 反 射 するため 神楽 山の神が喜ぶといわれる。 (かぐら場) 境の山頂に八畳ほどの平 地 山宮があり祭りには商ない店も出た。 があ り、 山の神が神楽

山仕事が無事に終りそうになり、 ひとくぎりつくと、 沢に入っている

> 集まって山の神を祭った。 い。最近までやっていた。 ミソを付けて火で焼く。これをバンダイ餅といい、匂いがよくてうま 泥に埋めて米を入れ、 ウルチ米を水を少なくしてたき、 木びき、炭焼き、地車引き、馬方など、グループの者が適当な時に全部 棒で突く。つけたらヘラで握って串にさし、妙糖 元じめから酒が出て、米を各自が持ち出す。 ふいたら火を止めて、しょい樽の底を

けない。)を供える。バンダイ餅はクシにさし、ミソをつけてやく。バ ンダイ餅は山小屋でやったし、山生事をしている人の家でもやった。 日はきまっていない。バンダイ餅 (ウルチの餅で、ウスでついては

(鍋足)

並べて向き合って坐り丁半をしていた。丁半はサイコロを三つ使って 変賑やかであった。近くに大福餅や煎餅などの店が出た。ゴザを四枚位 ていた。お祭りは定期で、三月と十月にあり、いつも丁半があって、大 れた。この地方(湯沢の奥)にも二つ石宮があり、 梅田地方は山働きがかつては主生産であったから、 白黒の争というのもあった。 中に幣東が納められ 山の神はよく

一般には赤飯をたいて子供にやり、大人は酒を呑んだ。 山の神は女だという。山の神の好きなものはバンダイ餅である。 家でやる時は それを一度つ

くつくから粒はなくなる。 と味噌をまぜたのをつけてやく。一人が五合から一升位たべられる。 の串にさし、炭一俵位をくべて火をおこしたまわりにさしてやく。 臼の中でやる。よく木の切株の上で丸くのばし、厚さ七分位のものを木 き(ヨキの背中などでつく)それを又ふかしてつき返す。 はウルチ(白米)をふかして一つが一合位の玉をつくり、 オカズは漬物位をもってゆく。

りする。これは山仕事する人の神様で、 クがよく上っている。 岡平の奥に祀ってある。 山神様の祭りは組合が六つあって順番にお祭 御神酒などよく上る。底抜ビシ



馬立後沢の山の神 都丸十九一) (撮影



山の神に供えられたオタル (撮影 都丸十九一)

祀る。宿は入飛駒のオフクさんの生家でやる。群馬 県 側 か らも一緒に 五人で、年一~二回都合のよい日に集まって話合う。参加者は米を各戸 なってやる。(芦田谷 一升出し合い、すしを作ったり餅をついてたべる。 一戸一人と限らず機織をする人、娘、妻に限らず参加する。一〇~一 神棚に幣束を立てて

る。

台所には米を積んだ上に俵がみさまがかまどには荒神さまがまつってあ

西のすみに東向きに歳神さまがまつってある。

お勝手にはおかまさま、

つってある。茶の間の棚には、えびす・大黒さまが南のすみに北向きに、

奥座敷に神棚があり、そこには大神宮さまがま

家の中には、

村中(四丁目)集まって直会(なおらい)を した。また 七夕(たなば お参りした。朝飯前に機を織っただけで、 た)には機屋が集まって神官も呼んで商売繁盛を祝った。もとは朝飯前 に水を洗びて身を清めてからお参りした。女衆は朝早く川で髪を洗って 二渡神社の祭といっしょに四月第二日曜に機神様を祭り、 あとは一日仕事を休んだ。 神官が拝み

機が織れない 機神社へ どうぞこの手の 上るよに

星様の出ない中) の朝お百度をふめばいい絹ができるなどといった。 様をおがむのである、 をかいて桐生川へもってゆき、裸身になって水を浴びる、それから機神 七夕の朝四時起して、二渡にある機神様 から夜はおそく(三星様の沈む)迄織った。 その頃はチンカリンとヒを投げて手で織った。そ へ御願をかける。 夜のあけない中 ネブタの枝

青木タケ氏七六才談)(湯沢) の家では十六位になると大体一人前の機織りに なった。(金沢 几

一反

(三丈物)を一日半で織れば並の腕である。

暗い処で織った。

賃バタの方が多かった。中以下

お燈明を一

本芯にして、

・屋敷の神

屋敷内にまつってある神は屋敷稲荷と井戸神さま。 ある。 さまや庚申さまをまつっている例も (大門 家によっては十二



トボー口にはられた神札 (撮影 都丸十九一) (蛇留淵

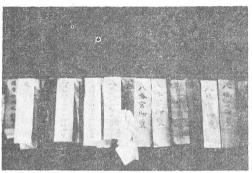
←三峯神社のお札 (撮影 (清水)



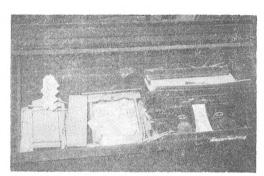
神 棚 (皆沢) (撮影 関口正巳)



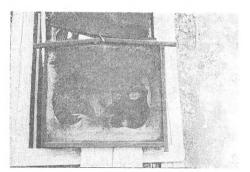
神 棚 (萩平) (撮影 都丸十九一)



同 上



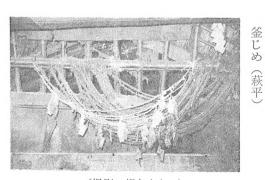
同 上



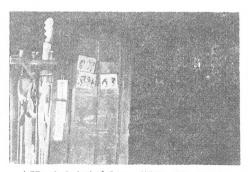
カラス天狗の絵馬



薗田豊司氏宅。大杉神社に関係があると考えられる



(撮影 都丸十九一)



土間にうまや跡が残る。(撮影 関口正巳)

うまやの神(皆沢)

村 内 0 講

庚申講 (末尾に庚申縁起二冊を付す。)

てやった。その日はみんな水をあびて身をきよめて拝んだ。 なってしまったが、さかんだった。 .鴨には古くは七組ぐらいあり、 村庚申の日は村中の庚申さまを集め その後は五つぐらい、現在は三つに

し合いでやったという。 晩とか七晩やり直しをやったとかで、 ころまた地震が来たので、 が途中で地震がしたのでやり直しをしなければというので翌晩やったと 外して納めてしまえといった。桑原というところで庚申をやったところ 庚申の日は、うどんを食った後、あずきがゆを食べることになってい 地震がするとやり直しをすることになっているので、 あしたの晩、 しまいにはみんなで一合とかを出 あしたの晩というので結局は五 掛軸を早く

く人だけが食べないくらいだ。 昔は庚申の日には、家中がナマグサを食わなかったが、 (清水) 今は拝みに行

戦時中の食料不足になっても絶えなかった。

食った。戦時中は麦を入れたが、正味五合ずつ持って行って続けた。 オタクラを上げてから、 久原では一月おくれにやる。 昔は、秋には家中こぞって行って、大ぶくろに入れてうどんをぶって 最近は衛生上よくないからというので考えて、一升のんでからやるよ あずきのおけえをつくって夜食を食った。 さんざ食っていろいろな世間話などをして 津

じ神さまのことで、猿田彦は五穀豊穣の神で、い い ことの欲ふか、 い意味の欲ばり)で、はたらきもんだ。女には余り手を出すな、 庚申さんは、生きてるときは猿田彦で、死んでから庚申になった。同 六本の

> 手があるように勤労意欲旺盛で、 にわとりの声とともに早く起きてはたらけ はたらくにはうんと食えというので庚申には う どんをうん (清水・生形豊二郎) 見まい聞くまい話すまいでよくはたら (チャボが三度鳴けば夜

する。 ある。 だったわけで、 月の講の宿をすることになったら、そのときはお祝いとしてもちつきを 庚申の講は、講員がくじ引きで宿をきめるが、くじをひいて三年間 米のとれないところで庚申のもちつきをするのだから大変なこと (清水) 何回かそうした家があり、ときには町でついてきたのも

ウチへ行けねえのでこりたものだった。 なったが、さっき食ってるので入りゃあしない。 いって少しずつしか食わねえ、そのうちにオサメだというので食う段に 茶わんを出しちゃあ食っていたところが、ほかの人はもうたくさんとか まったのもいる。若い頃、庚申に行って来いというので行ってふつうに 後で最後にもう一度、二つとか三つあけさせられた。小若衆で泣いてし 庚申の晩は、オサメをもらわなければいけない。ふつうに一度食べた (清水) これが食えなけりゃあ

ら手が早いのだといい、作神になった。 仕事の早い人を庚申さまのようだという。庚申さまは手が六本あるか

ので、 だといい、アマンジャクヤロウという。 アマンジャク 庚申さまが足で踏んでいるのはアマンジャクというも あっちこっちとうまいことをいう人のことをアマンジャクなよう

てチョナチョナしていちゃあならない。本気ではたらけということだろ 庚申さまの日には女は髪の毛を洗うなという。庚申さまのオスガタに 女が髪の毛をもってつるされているからそういう。 頭なんぞを洗っ

でもやっている。年六回のうち、 はやらないので、年五回する。 今でも行なわれている。寄日に二組、 寒申は拝むものでないといって寒庚申 いずれも五軒五軒である。

う。死人があってもかまわないが、 残してわるいといってみんな食べる。 くする。 前に地震がくるとやりなおしをする、ということで、 は女には手をふれさせるなといって男だけでしたが、今は女にしてもら その夜の男女の交わりは悪いという。 魚、肉、ねぎなどは食べない。これ等の料理は、 庚申様は大食の神様だかといって、椀に盛ったものは お産があるときは宿をかえる。夜食 赤飯、 酒もみんなで一升ぐらい出 その夜の食事は早 むかし

それで戌の日には麦をまくな、といわれる。 来た。途中犬にほえられて、麦の種は爪にかくして、 庚申様は作神だ。庚申様が天から下るときに麦種を持って牛に乗って 犬の目を逃れた。

長い話は庚申様の晩にしろ、という。(萩平)

にてんぷらをだした。組によっては庚申講の膳椀をもっている。 た。夕食時にまつった。 の日曜日にしている。庚申さまの軸があってそれをかざっておまつりし 以前は三、六、九、十一月のあたり日に庚申待をした。現在ではその月 講は中居(細谷戸・中居)、 食事は酒をだすのでうどんである。酒のさかな に二組、猿石に四組ある。細谷戸では、

した。さかながないと不景気だといわれた。 升出した。 棋をさしたりして一晩中おまつりをした。はじめて組に入る人は、酒一 があると、 かった。庚申さまは血ブクをきらった。猿石では、庚申待にさしみをだ 猿石では、 宿にあたった場合に、子どもがうまれると宿をかえない といけな みよりのものがなくなった場合には、庚申待に参加しなかっ まつりなおしをしなければならなかった。庚申待の晩には将 以前は小豆がゆをして食べた。それを食べないうちに地震

一申待に参加する場合には費用は各自負担であった。

庚申待は三月彼岸後九月の彼岸前にやるものだという。 庚申待の晩に食えば食うほど農作物がとれるといわれた。 十二月の暮前にやるものだとしている。 細

> 皆沢では、講でまつるのと、皆沢中でまつる場合とある。 庚申さまは百姓の神さまである。作神さまである。

そうは、イモ、ゴボウ、ニンジン、 れの組で宿をきめて順にまつった。庚申講は十月のうちにやった。宿で ぶらげなど七色のものをあげた。 は床の間に庚申さまの掛軸をかざって、 庚中講は森下・森島・籾山組の三組あった。今はしていない、それぞ ダイコン、ミョウガ、キュウリ、あ お膳にごちそうを供えた。ごち

たが、黒い方は仏なのでだめだといった。 軸をおまつりしている組はお神であるのでさかなを食べてもいいといっ 庚申さまの掛軸には、赤い色をしたのと、黒いのとあった。 赤い方の

をのばした。この場合、十月になるまでに四十九日すぎればいいとされ た。お産の場合にはかまわなかった。 宿をする家で親戚などに死人が出たとき(ブクをきたとき)には、 宿

みちびいてくれるという。そのために、庚申さまは三本辻にまつってあ るという。 お庚申さまをすると(庚申まち)世間をひろく人間をつれて歩いて、 — 87 —

のを示すと次の通りである。 まつってある。ここには、十五基ばかりの庚申塔がある。 皆沢全体でまつっている庚申さまは、 神社のうらの三本辻のところに 年号のあるも

〇 庚 〇百庚申供養 申 元文五庚申歳八月吉旦 天明七丁未年十月二十六日 皆沢村中

음 庚 寛政二年戌八月吉日 入飛駒

〇 庚 〇庚 申 文政十丁亥年八月吉日 寛政三辛亥年三月吉祥

〇 庚 万延元庚申十月吉日

〇千庚 公百 庚 争 万延元(不明)十月吉 二年己已十月 (不明) 願主当村中

明治八年八月吉旦

村中

さまにおみきをあげてまつった。(皆沢)り)をしている。この日庚申ささまのところも掃除した。そのあと庚申皆沢では、毎年八月一日に村中の各戸から人足がでて道普請(みちが

ぎや碁などをする。(猿石) 合ぐらい出すように変った。夜遅くまでしゃべって遊んでいた。しょう拝む。坊さんが来てお経をあげる。もとは酒を出さなかったが、今は一年四回もする所がある。庚申様の掛軸や膳一組があり、うどんを供えて組合で寄って庚申様を祭るが、三組合ぐらい寄ってにぎやかにやる。

を買った。(高沢)月にやった。三つの組があった。宿は籤引きできめ、一番が当たると酒月にやった。三つの組があった。宿は籤引きできめ、一番が当たると酒年二回やった。寒庚申はいけないというので、寒が明けての二月と十

夫婦のいとなみをしてはいけない。(鍋足)る。ナマグサを食べると、庚申様にふんづけられるという。庚申の晩にを洗ってはいけない。洗りと大病みをするとか、死ぬ と か い われてい一杯食べて、その後また食べる。庚申様のお渡りの日には、女の人は髪年六回、組合で順まわり。ウドンを食べる。ナマグサは使わない。腹

四方山話をした。

余程以前、梅原で行なっていた。講は六人一組で「カノエサル」の日庚申の夜の夫婦関係はよくない。片輪の子ができるという。(浅部)庚申は五穀の神、百姓の神であるという。猿が御眷族である。

いと云った。魚の類は食べなかった。(大門)
作り直してたべた。非常に穢れをきらい、死ブクはいいが、血ブクは悪庚申待のお祭の終らない中に地震がすると、たとえ小豆のお粥でも、どんなどを御馳走した。煎餅でもあればいい方の程度であった。とんだ。子供が一つ一つのお膳に坐って「うんとたべな」など云って、うに祭ったから六十日目にした。掛軸をかけて大人がおがんだが子供もよ

蛇留淵の庚申の膳箱にかかれた銘

天保七丙申歲正月吉祥日

庚申様の掛軸 (皆沢) (撮影 関ロ正巳)



庚申様の軸 (今倉



庚申の掛軸 (蛇留淵) (撮影 都丸十九一)

大工前原丈四郎作。庚申御尽讚箱

(蛇留淵)



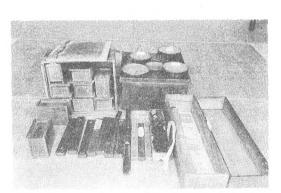
庚 申 塔 (寄日口)



庚申塔 刻字は何もみられない。この地域にはこの種の庚申塔が多い (今倉)



金沢の庚申供養塔 (享保8年) (撮影 阿部 孝)



庚申講の備品 膳、箸、箸箱、枕、庚申の掛軸等



庚申講当番帳 (今倉) (撮影 池田秀夫)



庚申の膳(清水)(撮影上野 勇)



庚申講の膳 (今倉)



庚申の箱膳 (蛇留淵) (撮影 都丸十九一)

と持ち寄りでやる。 りで煮て、 七日 0 干 拝んでから食べる。 庚申とは 厄 日 いまは川へ入ってヨ 別だが、この日 昔 0 \exists ゴ (石鴨) IJ É は各 い 0 ケ 組の しょに ゴリはしないが、米を持ち寄 カケジや庚申さんの箱膳ご して 申 うの が

起 全 (万室

○老子三尸経ニ見タリ ○当申ノ年マテ千十五年ニ成ル也
●侯○大宝元年ョリ正徳元年マテ千九年ニ成ル也
常児子悉入::窈冥之中:去:離我身:三反唱へ 又彭矯赤色彭侯子彭常子 夜半ノ 後南二向 ?テ再拝上尸又彭俗青色中尸 白

)庚申ノ縁起

○抑モ 是三条二 去ノ罪滅ス二条ノ功力ニ ーナスベシ 時大宝元年庚 組织 タル心ハ是三界ニテ是庚 申正月七日 八現世 庚 申 1 一ノ目 諸 E願叶三条ノ功力ニハ仏果ヲ得塔ヲ次申ヲ守可ュ待人ハ一条功力 ニ ハ過 申ノ時 摂っ 津 国 難波之天王寺ニ 台"二 也"民 界,年

サレバ人間 = 1 悪 事多

衆生是皆思事有帝釈天衆生愍給テ是ノ庚申念輩名三サイ書付燧魔王宮本品替物思イセザル人ハナシ富貴ノ人ハ家ノ宝ヲ子孫ベットリー切られば僧ハ我家ノ願ト思イ国王ハ民思イ天下ハ我一代吉願給エリ身代テ過去ニテイカョウノ罪ヲ以テカ今ノ物思イ次シ何ゾ不レ願人ハナシ是 ッノ罪ヲ以

> 上下至マデ唱待可と申ナリ子孫眷属マデ祈禱成ベシ禱ト成ル本尊ニハ南無三十三礼一切経ノ中ニ庚申ノ詩・メート・ 立香タキ 過去七仏暁ニ者阿弥陀如来六観音未来ノ七仏ヲ唱可」申皆是三ハ不動ヲ念ズベシ刀卯ノ時ハ摩利支天ヲ祈念申スベシ霄ニハ薬 五ガル、ヲ ノガル、 ノ苦ヲ逃二度待バ三途川苦ヲノがル、三度メニハ無間 六度メニハ修羅道ノ苦ヲ逃仏果ニ至ル事無、疑戌亥ノ時ハ三器、四度メニハ餓鬼道ノ苦ヲノガル、五度メニハ畜生道ノ苦ヲノ 備ヱ奉子丑 油ヲ燈シテ守申ベキ也念様ハ戌亥時ハ文殊ヲ念ズベシ子丑 |時ハ三器ニ円キ物ヲ備ヱ刀卯時ハ三 ノ中ニ庚申ノ御経ト申経ヲ貴賤ノ七仏ヲ唱可ゝ申皆是三世ノ祈 帯ニキメシ 薬師 ジラ備 ハ 三 器= 文殊 赤花

○庚申ノ経文日

我がシン (後にと

消の

○シャウキャラヤイザヤ子 子タルゾ子又ゾ子又ゾ子タル ザ ル 1 我 ガ 1

屋ノ間ニ 度 チハ (メヨリ ハ待ト ヾ ケ可ム申也三年ウチ能待届十八度也必一切ノ諸願成就スヨリ重ブク成トモイカヤウノ不浄成共ケガラシキヲキラワズ三年間ニ居ズ又五辛四足二足ヲ前方ヨリ不ム食随分清浄ニ シ テ待始二三返ヨメバ悪鬼恐ヲナシタチマチシ リ ゾク事無ム疑庚申ノ夜ハ下三返ヨメバ悪鬼ぷヲナシタチマチシ リ ゾク事無ム疑庚申ノ夜ハ下

ニ是文有千返モ百返モ 返 E

エタンナ ミ ヲ入待可ゝ申現世安穏就中サニ病ヲノガルナリ子孫繁昌親待申スナシ仏神モ此ノ庚申ヲ待給也是念ズル輩ハ貴賤トモニ供物ヲ備ニ日ノウチニ九月メニ当テ庚申日也皆是諸天三宝明王待給ナリ人間斗、天王諸天明王御祈合シタモフテ是ノ六法事アイタモフ也是ハ八セン十 可」中供物少シモ ヲ シム心アラバヤガテ火難来テヤキウシッ * 類眷属マテ三世ト ト唱申也又六八セントテ年々六度宛梵天ニ大法事有是ハ梵天帝釈 二十八度待申セバ万僧ヲ 叶ベン庚申ノ夜ハ少モ子ムラズシヤウ有ル者ハ必心中ニ諸願満足親 モニ成就スル何レ是ノ時ハヒ 、供養申タルヨリスグル也能々待人ハ三世ト ル 3 IJ 心 清 ノウ也三年 浄ニ待 七

ユカジコジタ、シハシラジマワラジ , サジヤヲキジ中ニサカラジ

迷故三界城 来無東西 何処有南北 悟故十方空

)是ノ本書者左野茶本村有

宝林寺

申呪多形信礼々々々米佗利

々々娑婆訶

· 電帝婆薬叉盤陀阿娑婆訶 ・ 清へ業業なタブッカカ 大青面金剛真言

全

○南無大慈大悲観世音菩薩

指1上色々供物菓子等1三十三度成1礼拝1信心僧俗現世安穏後生善処計1上色々供物菓子等1三十三度成1礼拝1信心僧俗現世安穏後生善処当1庚申日1徒4朝清1浄六根1其日申刻集り結1南棚1香華灯明或者奉と当1庚申日1徒4朝清1浄六根1其日申刻集り結1南棚1香華灯明或者奉と当1年有11六度1先受1人界生1者僧俗貴賤各々穐冬替事願無2人依と去者一年有11六度1先受1人界生1者僧俗除仏縁庚申由来日本可2弘教夫庚申者仏法弘通霊地然彼寺住僧依除仏縁庚申由来日本可2弘教夫庚申 御前有三金札鉄札 | 則此界善悪印札庚申信仰施主金札印不信心者鉄札印 無」疑一切衆生志聞,梵天,其時信心之輩仮名実名書集納:宝蔵:亦帝釈>ゥッタッス

庚申待夜僧供養カリソメニモ不」可三悪事相讃「偏唱」念仏」可」待是昔天 本一此? 時 ナ 1)

為『衆生ノ化度』現『庚申」給也依』之当』其夜」念『十方諸仏菩薩』庚申功寿菩薩御待始玉ナリ其庚申御本地大日阿弥陀観音勢至虚空蔵普賢菩薩

徳者出二六地獄苦・至・沮槃ノ彼岸・ 「無」疑依」去其日ハカリソメニモ不」可三悪事 一隠ト

九年依、之其日従、朝六根清浄有三信仰「輩 ハ 於三今生」除三口舌難,其上始内裏庚申待始玉亦長保元年一条院御時在家有庚申待年数 七 百 五 十字ぞり。 待始玉天智天皇之御時渡。大唐·元禄九年丙子迄千三十七年当天慶二年 二彼天王寺住僧依:過去善縁,聞:其名帝釈,庚申由来弘;日本,於,其寺, 盆 彼岸衆生成仏之要路ナリ末世愚迷衆生乗;縁起船;悪道峯 出 渡;煩 有亦不」可にサワルに能々可」有に信心に聞い縁起、人迄無、難、不に諸願 悩ノ大河「可」至ニ菩提「凡夫只依ニ一念悪心」阿鼻地獄ダザイセンシカル

依如件

子孫繁昌令、致御誓願

聞我名者断惑修善 我身者発菩提心 ○庚申偈日

智我心者昂身成仏 聴我說者得大智慧

○縁起作者智善

及えて不可 及す己都有 烈の过 京市

三身税法

役氏 宝林寺

戌亥時ハ三器五穀備ベシ 庚申待之備物分:

敬白

らは特にきまってなかったが相談して、 かった。 あったものが相談して、 しとか、 は天神様に集まって赤飯をたべ、酒をちょっと呑むていどある。 以前は小学校六年生ぐらい子どもが男女一緒に天神講をした。気持の むかしは部落ごとにやったが、その後は学校でやった程度。 山地の氏神天神様の祭りは四月二十五日と十月二十五日で、 宿をきめて、 かてめしなど。 料理は大人に手伝ってもらってつくった。ごちそ 三月の試験休みにやった。特にきまった日はな 好きなものをつくった。小豆め この日に (萩平)

ができるようにとおがんだ。(皆沢) 納天満宮と書いて、篠竹の先につけてもって行った。天神さまには、 天神さまへおまいりに行った。このときには、ごちそうと、色紙に奉 字

子丑時ハ三器円物ヲ備ベ シ

寅卯時ハ三器赤飯備べ

赤花立香タキ燈明上ケ

戌亥時ハ文殊念スベシ

子丑時ハ不動念スベシ

刀卯時ハ摩利支天念ベシ

宵八薬師文殊過去七仏唱曉二八阿弥陀如来

二十三夜講

嫁が二十三夜を行なった。 (萩平)

しあいできめた。 わかい人が主だが、男も女も二十三夜まちをした。宿は交代で、 はな

宿には、三夜さまがあがるまでいて、三夜さまがあがると、

おがんで

間ばなしをしたりしてまっていた。(皆沢) 解散した。三夜さまをおがむまではごちそうをつくって、たべたり、世 男衆が宿に米二合ずつ持ち寄って夜食とした。

ユをした。月が上がるまで待っている。腕相撲をやった。

たいがいアズキのオ (鍋足) カ 92

があったときは出ないが、ふつうのときはたとえ子 どもでも一人は出 近くの川の中で水ごりをとり、ごはんを食べた。この日は、一家に不幸 村庚申をするようになった。(石鴨 ない。戦時中の食料不足のとき、十七年ごろ止めて、現在は二十四日に た。昔は水ごりをとるときに唱え言もあったらしいが今は伝えられてい まに集まり、米を五合ずつ持ち寄ってごはんをたき、天神さまに上げて 七月の土用入りの前日がヨケゴリの日で、村中一戸一人が出て天神さ

他出 日の講

藁で作った人形をあげておいた。 銭別をもらって伊勢参りをする。 お仮屋を道の脇に作っ た。 お仮屋に

(鍋足) 伊勢から帰るとお仮屋に腰かけて休む。 お仮屋に火をつけてもす。

げたり、水浴びをする。 仲間がきておがむ。帰ってくると、仲間でおがんで、 御嶽参りをする。川に竹を四本立て、シメをはる。 行をする。 お参りに行かない 経をあ

投げた。その幣束が立った。 たか分らない。穀断ちといって、塩味を一切入れないソバカキだけで何 におがんだ。そして「五十年の修行終わり。」といって、幣東を神前に 日も過ごした。亡くなる三日前に、奥さんと娘さんにささえられて夜中 (鍋足)では、細淵作一さんが熱心であった。寒水を何度浴び

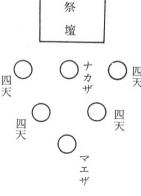
町三丁目の笹島さんで、 梅田地区全体が一つの講組織であった。 テンズイ院という。(鍋足 大元は桐生、

今、六十から八十位でまの人が盛んにやった。

「九字は許しても、 フッコミを許すな。フッコミを許しても御真法を

> ない。 許すな。」と厳重にいわれており、部外者に信仰の内容を話して はいけ

オウカガイをたてるとき、 次のように並ぶ。



被、

禊などがある。 となえ言には、六根清浄、大 ナカザ (前座)がたずねる。 (中座) が神がかりし

る。四方がためとは、 ダリヤシャ明王、 サンゼヤシャ明王、南方のグン 方がためをし、フッコミをす 普通、神がかりする前には四 西方のダイト 東方のゴ

シヤャ明王、中央のダイニチダイセイ(大日大正)不動明王に対して次 のようなとなえ言をする。 クシャ明王、 北方のコンゴウヤ

バタタランダ センダクマアガロシャタア 「ノウマクサラバタタ ギャアテイビャクサラバボウケイビャクサラ ソクタヤウンタラタカンマ

カイジンリツザイゼン 九万八千キョウマン コミの中の「リン フッコミというのは「ビャクウンバンコラウン を九字という。 ヒ コョウ トウ シャ カイ ボロウン」である。 ジンリツ リンヒョウトウシャ ザイ

ヘイソクが上ってしまう。 エザが九字と切ると、 ナカザに神がかりするが、 両手で持っている

寒行(寒中の水あびなど)をよくやったものである。

御嶽教の位階は次のようである。

中講義、権大講義、大講義、

ナカザになるための修行は一段ときびしく、ナマグサを一切たったり 権訓導、訓導、権小講義、 権小教正、小教正、

中教正、権大教正、大教正、管長。(高沢)

らった。 御嶽講は金沢の岩さんが入っていた。信仰をしている 人 は い くらも

ある。(易尺) 鳴神様(嶽サマ)で御嶽講の人がした。この人達は他所から来た人で

三峰講

いえと固くいわれていたという。少しも淋しくないもので、このときはショウとはいわず、ナミノハナとはできない。野宿するならよい。このときは三峰さまがついているから三峰さまは借りて来るので、ショウ(生)で借りて来るときは泊ることムジナッタカリがいたから、むかしは三峰の信仰が多かったようだ。ムジナッタカリがいたから、むかしは三峰の信仰が多かったようだ。

、(清水) いまでも三峰さんの社にお参りに行くときは塩一升、米 一 升 を 上げ

三峰代参講

った。いまもごせん米と塩を上げるのをやっている。(石鴨) はめ、古峰ヶ原などと一緒になり、代参は都合の良い日に行くようにながサを食べないことがきつかった。終戦前の十七、八年ころ、食料難でもって行って三峰さんで入れかえてもらって来た。往復する間は、ナマが出かけておこもりをして来た。村の三峰さんに札 箱 が あ り、札箱をが出かけておこもりをして来た。村の三峰さんに札 箱 が あ り、札箱を

古峰ケ原代参講

鴨)まってお札をくばり、ごはんを上げてから食べることをして いる。(石まってお札をくばり、ごはんを上げてから食べることをして いる。(石たが、いまは車で一日で行って来る。お札をうけて来て、天神さまに集行って、昔はおこもりをしたものだったといい、足尾へぬけて行って来古峰ヶ原代参の講は、四月十五日 に なって いて、代参の者は前日に

今はしていない。(萩平)(よそへ出る講には、むかしはコブガハラ、古峰、三峰等があったが)

いない。 三峰、コブガハラ、古峰等の講があったが、今はほとんど行なわれて

講から帰ってくると、寄日の薬師堂の前で一〇〇人鍋で煮こみをつ

くって村中で食べた。(馬立)

富士講

浅間神社にお詣りをした。の御祖父さん、御祖母さんが熱心であった。講中は四、五人いて富士のの御祖父さん、御祖母さんが熱心であった。講中は四、五人いて富士の川島山田五郎(山田五郎が名であるが、通称ヤマゴロさんで ある。)

仕事をしながらよく唄をうたっていた。次にその内の幾つかを誌す。

不二道子守うた

気の世の勤めでくらしましょう。○親子兄弟夫婦をはじめ

(三、四句は繰り返す。以下同じ。)

○主人大事とおもうこれからは

○家業大事にまもらぬものは

○いつわりする気はまんざらないが天のめぐみがらすくなる。

○ばくちうつなら掟をそむく心のまがりが無理をする

○天に気に入る夫をもとめ○すがたかたちはどうでもよいが

つま子可愛とおや大いじ○女郎やばくちと大酒をやめりゃおやに孝行はげみたや

○悪と知ったらみなトリすてて

○しかと手をくみ考へみれば ○いきで助かるわけ知るならば ○自由自在にするがのふじの ふじのおしへはそむかれな 自心で助かるわけしりな やすく気の世の人となれ

○こんないやしきわが身のしんか 月日さまかと目に涙 どこがわが身の元じゃやら

○わたしゃしうとのうわさはいはぬ

○よめのきげんもようとりまする ○たとい上様下賤の身でも かはいい夫のおやじゃもの かはいいわが子のつまじゃもの

○ほれたよく目が気の世の教 あつくなるほどつとめたや

自心の一つがままならぬ

○きれたわらじもそまつにゃならぬ 元はお米のおやじゃもの

○三千世界気の世とかはる ○自心のご恩がわかってみれば あうんの教へじゃまにあはぬ はらはたたれぬたたせまい

○人の命かこうくらしんと なってたすからふじのみち 浦和県 土持孝心子守唄

○さても明治のご一新 諸国戦争おさまりて

> ○わが日の本のまつりごと ○浦和県のそのうらに 日々に正しきその中の 八足よせむおとりたて

○誠の道にみちびかれ

○曲れる心をとり直し 先非を悔いてその後は

○人なみなみの人になし 農業工商それぞれの

○お世話下さるお思召し ○産業さづけおしなべて 一家の基立つように

海より深く山よりも

○高きめぐみのほどぞかし ○国恩めうがのおんために そう伝へ聞く人々が 徒場ごふしんのお手伝い

〇申したしとの願いにて 明治三年初冬の

○閏十月十五日

○武州その外四ヶ国の 村数三百集りて 女はむりのその日より

○人数凡そ五千人 銘々精進けつさへし

○罪あるものをめしつかい 善をすすめて人間の

悪をこらしてたちまちに

— 95 —

○朝は霜をふみながら ○余たくにつみし米銭を そそつつみもたらして で老いも若きもうちつどい 凡そ三丁四方余の

○天のめぐみを頂いて○ごふし成就のその上は

○堤をほりおほり

はたらく情もむつまじく

○ご思は日々にあらたなり

いよいよ善に進むべし

住居の元を尋ぬれば
○さても尊とや天国の
・ 子もり唄

○月のうちほし日の照らす

○柱となしてたてまいし○いのちをとりて番匠の○いのちをとりて番匠の

貴人国司の人々も

人みなはだへをかくすなりあやくにしきとおりいだし糸おたまきにくりかへし

てふの形と身を現じ

この身まつりがなきならば

○戸障子かまどにいたるまで玉ねあげやねふきかべをぬり

○しのぐか元の父母の○つくりそろいて雨風やつゆ霜雪やあつさをもみな職人のみちにより

○具はるわざの働らきを○人々これをさとりいてめぐみくまなき恩ぞやと

館林 佐藤近太郎伝へる明治八乙亥念四月四日写之夜る昼ととめたまふべし

高沢村

二 道 こまり唄

蚕の和讃

庭のあかりにまゆつくり 一切女人の教へにて 一切女人の教へにて ではたけふなのおきふしや ではないのができるしゃ ではないのができるしゃ のののができるしゃ

元の二親のちづなにておいほど導き四つのとくかほど導き四つのとくがほどないやおのづからいださくやひめいがはこの花さくやひめい。

川島おきんどの

— 96 —

明治八乙亥年 土持孝心 常陸国河内郡推塚新田 末世にのこす教なり 蚕女郎のその徳を 月やく日やくのけがれなく 三月二十七日様 子守うた

光の如くあきらかに うつり行く世に澄みわたる 高き低きへだてなく 御代のまつりは月と日の 不二の教の開けきて ふるきむかしに立ちかへる

頃は明治の八年なる 国恩めらがをわきまえて 野末の里の人々も 土持孝心くわだつる 三月末の七月より

津々浦々に奥山の

よりつどひたる国々は 下蔵下野下総に 合の通路なをさんと 三日の間常総の

凡そ一千五百人 常陸合せてその数は かほどたつとき食行の

> むくいたまいや人々よ 師の高恩一筋に 難行ありし代々の 伝へんために身をせめて 食の教を万方へ

以上(高沢)

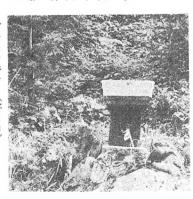
道 陸 神

る。道陸神さまには、石をあげて足がくたびれないようにとおがむ。 道陸神さまは道の神さまである。道のわるいところにおまつりしてあ



あり、わらじが供えられていることに注意。 (撮影 都丸十九一)

ワラジを供えている。 ドウロクジン 嘉永元十一月吉日 (寄日口



水神祭、元、共有の水車のあった頃はよく水神祭をした。(大門)道祖神は道の通りはたにあり、自然石に文字が刻んである。

七 その他の諸種の祭

わたごさま(愛宕さま)・わたご精進

い、悪い病気にかからない、と信じられた。にて食って、水ごりをして拝む。無病息災の信心で、特にカゼをひかな村中というのでなく、賛成した人たちが集まって、米五合ずつめしを

月の二十四日にやる。(石鴨)

長言、赤飯をつくり、おみきをもって山までおまいり に 行く。(中居・戸で、赤飯をつくり、おみきをもって山までおまいり に 行く。(中居・子どものほうそうがみである。四月三日のおまつりの日に、組合の各

分けてくれた。中居から二渡までの範囲でやった。(猿石)四月第一日曜に、愛宕山の頂上の石宮に赤飯を持ち寄り、子供たちに

*ক*ত

ある。いまはそのカケジは城山の方へ持って行ったり(上藤生)して他行くので、昔は十銭くらいだったか、子どものころ行ったのでおぼえがけで、肴が出たのだから仏ではなかった。その日に行くとき金を包んでを上げ、手をはたいて拝んだ。仏に関してれば酒は出ても肴が出ないわテントサンのカケジをもち、まわり番でやった。エサンをかけてオミキ村中ではなく、組々でやったので、五軒とか七軒の組でエサン――オ

はなくなっちゃった。(石鴨)

来ない。この時のお札をしのの先にはさんで畑にさしておいた。今はらえてもらってこれをくばる。むかしは神主が宿に来てくれたが、今は合ごとにした。酒一升。宿はまわり番で、根本山の神主からお札をこし毎年二月十二日、三月三日などに行なった。特定の神社でなく、各組

作神様の祭りである。(萩平)

る。(鍋足)

「別子」とぎ、米の粉を練ってゆでないもの)を供えて、そこの床の間に、おしとぎ、米の粉を練ってゆでないもの)を供えて、そこの床の間に、おしとぎ、米の粉を練ってゆでないもの。宿があっ一三月の第一日曜にやり、部落の懇親会みたいなものである。(猿石)ち寄り飲み食いする。天道様に感謝して一年間の天気を祈る農作祈願のち寄り飲み食いする。天道様に感謝して一年間の天気を祈る農作祈願のち寄り飲み食いする。天道様に感謝して一年間の天気を祈る農作祈願のち寄り飲み食いする。

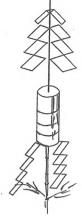
食べきらなければ帰れない。(浅部) で、まったウドンを腹さんざ食べて、余ったら膳のはじに盛りつけて、それを 19をとったり、川で魚を釣ったりして、それらを肴にして一杯やった。作 78三月第一日曜にやる。朝早く当番の家に集まり、鉄砲ぶちにいって兎

せる分をオシイブンという。い食べる規準の外に食べさせる。食べきるまで帰さない。最後に食べさおき、他の組の者はお客扱いとし、むりに沢山食べさせる。普通十二はおき、他の組の者はお客扱いとし、むりに沢山食べさせる。普通十二は三月三日に二組が一緒になってお祭をする。一方の組の者がうどん粉三月三日に二組が一緒になってお祭をする。一方の組の者がうどん粉

十年に一回位行った。(大門)である。終ったあとで雨乞に榛名、赤城神社に代参に行く人を決めた。食べられない時はすもうなどをしてまでも強いられる。人数は三十人

梵天祭(天祭り)

(四十八枚)今の紙で大判十二枚で梵天一本できる。もっとも戦前まで平・大州・皆沢等各地区の分を根本山の藤倉氏がつくる。桐生紙で一帖また幣東納め と も い う。現在では四月三日。馬立・筑原・台・当実



藤倉氏は拝むだけだっ り、これを持って来て り、これを持って来て

入れて梵天のところに供える。などに立てる。そして酒となる。またおミキの方はオタルという竹筒になどに立てる。そして酒となる。またおミキの方はオタルという竹筒にしきなどでしょってゆき、さらに村人一同で山頂に持って行って木の上しきなどでしょってゆき、さらに村人一同で山頂に持って行って木の上

今では女子でもかまわないが、以前は女はいけなかった。(今倉)天災をよけるためで、雹雷除けともいう。これに出るのは一戸一人、

居 多り

鎌を結びつけて立てる。 風の又三郎を祭る。風害よけ、馬立の山上に高い高い竿の先に草刈り

終る。(今倉)中をまわり、最後は落合の川の岩の中島に行ってオフクラを川に流して中をまわり、最後は落合の川の岩の中島に行ってオフクラを川に流して旗をしのの棒につけて持った村人が、列をつくって太鼓を叩きながら村落合では、オフクラ(お仮屋)をつくってこれを担ぎ、五色の色紙で

星祭り

で拝んでもらう。とくに厄年の人がよくやった。(今倉)十日夜の夜行なう。エトの上からその年に生れた人が藤倉さんを頼ん

ルスンギョウ祭り

た。かま神様は別に祭らない。(橋詰)様は年寄りで行けないので、神様の留守にえびす様を祭ること を いっ様て食べることをいう。もとは神無月に神々が出雲に集まる時、えびすえて食べることをいう。もとは神無月に神々が出雲に集まる時、えびす旦那さまのいない留守に、近所の女衆が寄って何かごちそうをこしら

総谷戸の感謝祭

うのをしている。係のものが中心になって世話をし、費用は各自負担。十年ほど前から十一年二十三日に細谷戸だけ(十七軒)で感謝祭とい

うは、前は赤飯であったが、現在ではうどん。(細谷戸) 掛軸をかざって、とり入れ感謝のおまつりをしている。この日のごちそ宿は広い家にたのむが、くじびきできめる。二十三日の夜、庚申さまの

お日は

である。(今倉) 一軒一軒で、御先祖さまや皇太神宮を始め八百万の神々をまつる行事

いそくを切ってくれた。お日待は家内安全のために行なう。(萩平)春夏秋冬の四季に、法印様が来て拝んでくれた。暮のお日待には、へ

八 仏教関係

白雲山碧雲寺

正院の女衆の檀那寺でもある。(今倉)現在大州・台・当実平・落合・皆沢・穴切等に檀家にもつ。根本山大

滝沢山長泉寺

の分かされで蛇の子がいっぱいいるといわれる。(橋詰)が、足にはける大きさだったという。この大蛇を見た人はいないが、その山号になった。寺のわら屋根を替える時に大蛇のぬけがら が あっ た寺の後の山には蛇がたくさんいる の で、「竜の沢山」といい、竜沢山

高園寺

のような文書がある。 大境内の宝経印塔を延享二年に建立している。鐘撞堂も作っている。次た境内の宝経印塔を延享二年に建立している。鐘撞堂も作っている。次十七世 石橋梁和尚に東沢寺本尊縁起という文書がある。この人はま

- 一、大鐘助力鐘ニ記石橋発願以来七年後成就
- 一、鐘楼 寛延二年己秋石橋建立

に下に石櫃仕入たり。 金五両川島甚五兵衛手伝後来ふきかへの労をはぶかんため



西方寺の六地蔵(左) (撮影 阿部 孝)



西方寺の六地蔵(右) (撮影 阿部 孝)

ある。 いって礼に行 お願をかけるので いつと日をきって した。ここはいつ る日限り地蔵の縁 が桐生の今泉にあ で、よくお参り 毎月の二十四日 願はたしと お願がかな

天照皇大神を祭る。石祠に糸井という姓がほられてある。年号は分らな 十八世の大蓮仙和尚の建立した万霊塔が境 内に ある。宝暦 掘り返してみたが何もでてこ 寺の裏山に石祠がある。 これはむかし高園寺

の尼寺であった福寿庵のあとといわれている。

寺の附近にフクジンという所がある。

むかし寺の世話役に糸井という人がいたと聞いている。(高沢)

なかった。

昭和三十八年に、鐘楼を新しくした折、

西方寺の六地蔵 (撮影 阿部

安観音 前にチガヤで作ったショウリ ウゴモにキャクボトケに供 えたものを盆送りで送り出し ている。



でやったが今は希望の人だけが祀っている。元は賑やかであった。 い人が願かけして絵馬が沢山上っていたが今はない。 桐生館の跡にある。 寄日沢の入り口に薬師様がある。祭日は、 各戸から団子、 寒いからとて繰り上げて九月九日にする。 にしめなどをお堂に持ち寄って飲食した。(萩平) 今は広沢の神主前原寛臣氏が来る。昔は部落全体 むかしは九月十九日だった この日をオクンチとい



子

(寄日

入彦間 山地 為諸亡霊供養 普門品供養 天明七丁未年 両村講中 左側

正月二十五日

頭

いる人たちがおまいりに来た。(猿石) があつまっておまつりをした。村内のものが主であったが、馬をもって 細谷戸に馬頭観音がある。毎年八月十六日に、馬をもっている人たち

日はほぼ決っていた。皆沢では盆の十七日にやっている。 厄病神がはやる時には寺から珠数を持ち出して百万遍をやった。夏で

とが争って、さいごはひきおろしてお茶にした。 を唱え、その後台所へひきおろそうとする者と、そうさせまいとする者 むかしは各戸をみんなまわった。座敷で珠数をくってナムアミダブツ

いまでは辻だけにだしてそこで辻念仏をするだ け になっている。 9

行なう。 ので」といって頼む。もとはカネ、音頭取りが二~三人(今は鈴)いて 念仏を進めた。(芦田谷) 村中一戸一人、春秋の彼岸や不幸の生じたとき、その夜或は翌日の夜 念仏が終ると主人がご馳走する。 「何某がなく なって何年たつ

館の跡の薬師堂にしまってある。(大門) て坐り、中央に音頭とりがいて、ナンマイダ、ナン マイ ダと鉦をたた 梅原には土用念仏というのがあった。でかい珠数があり、皆丸くなっ まわりの人は一斉に念仏をとなえながら珠数をまわした。今は桐生

をした事がある。 病人の生きるか死ぬかの時に、よくたのまれて、このナンマイダブツ しかし大概の病人は死んだ。(大門)

も大悲の光かがやく。(萩平) 天正山西善寺十一面観世音御詠歌 春ばるとのぼりて見ば萩だいら坂

霊魂の行方

女の場合は勝手へ行くという。ガタンとか、バサッとか音がする。又障 死者の霊魂は寺へゆくと考えられている。一般に男の場合は本堂へ、

子をあけるような音のする事もある。

ら、それは男であった。次の日、居館の男の人が死んだ。 ある時お勝手(西方寺の)で大きな音がしたので女のしらせと思った

式があった。(高木ソメ氏談) がした。その時は起きて茶を飲んでいたら威勢のいい音がしたが翌日葬 今の和尚さん(西方寺さん)の来ない前、 寺にいたら、障子のあく者

清水のGチャンのなくなった時にガラス障子に顔が見えた。 トボグチ

寄日不動堂前の石碑について

の外からのぞきこんだ。(大門)

次頁写真 ①の銘文

(向って右側面)

左側面

普門品供養 天明七丁未年

正月二十七日

為諸亡霊供養

入彦間 両村講中

山地

次頁写真 ②の銘文

(向って右)

①と同じ

全

入彦間 山地 両村講中

の伝承のあることとも関連があろう。(都丸十九一) 右は天明の飢饉年後の供養ではなかったかと思われる。



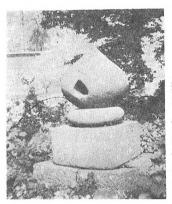
寄日薬師堂前の石碑の①側面 (撮影 都丸十九一)



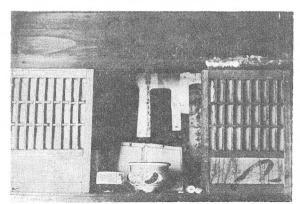
寄日不動堂前の石碑② (撮影 都丸十九一)



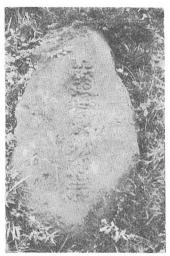
寄日薬師堂前の石碑① (撮影 都丸十九一)



弁天信仰の対象物 弁天信仰の対象物



仏 壇 (皆沢) (撮影 関口正巳)



念仏石 梅田一丁目梅原館趾後 これは倒れている。この文字から みると特殊の念仏者(徳本の系統) が入って来ているらしい。 (撮影 今井善一郎)

九 湯沢のキリス

のキリスト教を会社の社員の信仰としていたので沢山の信者があった。 湯沢には明治の頃盛愛社という染織の会社があり、これがニコライ系 その会社が解散すると自らキリスト教信仰もうすれ、 木氏もこれから離れていっ 社主の青

てやった。

亡していった為次第にその数 年月の経過と共に信仰者が死 伝統をつたえていた。しかし 烈な信仰をひそかに保持する 同一カ所に集まり、今では唯 れていた聖像の類も、甲から を減じ、これに従い、昔教会に 人がいて、小人数乍らもその 乙へと次第に移されながらも 結局信者の数の減ずると共に 人の信者蛭間タマ氏(六十 しかし旧社員の中には熱 又個人の家で大切にさ



クリスチャカネ - ムの墓 (湯沢) 今井善一郎) (撮影 ト正教のもの 紋章ハリス

そこには明治以来の貴重な絵画の聖像数点が大切に保存されている。

方へ集まってしまった。

Ł (金 行 屋 あ 阿部 (撮影 孝)

さずたべた。 たいに煮たのを一回 食べ物は大きな鍋でお粥み П 残 - 103 -

才)は酒屋をしていたの わしで行者の人達がのん れてやると、それを飲みま で、法螺の貝に酒を一杯入 話者(向田又蔵氏 七五

沢)

剛童子、ボンゼン帝釈、 ゲサンゲ六根清浄。 といった。 これはコウチの行事であ オシメハハツダイ、 ンゲサンゲ、六根清 +

行屋と精進屋

土用に大きなボンゼンをかついで歩いて村中を廻って歩いた。 行をした。白装飾で頭に白布を巻き、 夏負けした人や、 金沢にある。 ずっと以前の事だが二十才三十才位の人が堂に集まって カクランをしたという人を拝んだ。ボンデンで突い 大きな法螺の貝を鳴らした。

云って、人々殊に村の人が行って水をかけて貰った。 いようなものを持って行った。前が川で堰を作り、 りを持ち込んだものは捨てられない。 行へ入る事を行へオリルといった。大きな鍋があり、 皆煮て食べてしまう。捨てられな 懺悔々々六根清浄と 一週間御籠りをし 米なり、野菜な

行屋から十五町位上に権現山というのがあり、 そこが信仰の神様だっ

った。食物は精進で、肉はたべない。

わった。 大きな珠数があり、昼間若い者がよると、これで念仏し、行者も加

行屋には二体の不動神があったが後に盗まれてしまった。

んでも普通の人と同じに葬った。 行をやる人は云わば素人で、きまった行者ではなく、段々変った。死

戦争前の事だ。(以上向田氏談) んじゃない。大凡黒くしてから渡る。それでも普通じゃ渡れない。日露 た。この人は浅間様を信仰していた。火渡りといっても燃える中を渡る 引田の兵さんという人が(七十年位前)越後の入 り 口 で 火渡りをし

伝えているが、実際にやったことはない。(今倉) 淵の観音、石鴨の鹿島堂などである。男が一日集まってお精進をしたと 今倉では不動様にあるが、他には大杉様の堂、はしばの薬師堂、蛇留

神道裁許の書状

十一日、嘉永二年七月十四日と出たのが残っている。(皆沢) 森嶋伊勢守に対し神道裁許の状が享保十年十月二日と、同十一年三月

民 俗 知 識

は じめに

民俗知識の項目であつかった内容は次のとおりである。

しっけ

二、民間療法

三、卜占・まじない

象

Ŧ, 理

数

こにまとめられた資料そのものが、この地域の特性を示しているもので 内容・分量、あるいは地域的に不統一である。 時間的な関係等によって、このような結果になったものであり、こ 調査者の関心のもち

はない。 一人前の仕事については、農業関係、 これらの資料の中で、特にしつけと数理関係の資料がすくなかった。 山林関係とも報告が二ヵ所だけで

ようか。このほかに、 た。この中で、特にこの地域の特色を示すものはみられないが、マムシ を大まかであるが呪的療法とその他のまじないとに分 けて ま とめてみ (ヘビ)に関する資料がやや多くみられたのは、 比較的多く資科が得られたのは、まじない関係の資科であった。これ 皆沢の百万遍念仏供養や、 橋詰の長泉寺境内にあ 山村生活の反映といえ

る六三大師に対する信仰が注目される。

定の神仏に対する信仰とは別の、霊異現象とか、日常生活の中での禁忌 ように、畑作地帯としての特色を示しているといえよう。 資料についてみると、 に関する事柄を主にしたものを一括しておいた。その中で、禁忌関係の ことわりしておきたい。 いてはわずかで、特に目立った資料はえられなかった。 なお、他項目とその内容上ダブっているものもあることを付記してお 俗信については、信仰の項目に入れないで、ここにまとめてみた。特 農業に関するものは、イヌの日の禁忌にみられる (井田安雄

子どものしつけ

ふとんのあげさげぐらいであった。 風呂をたてたり、戸のあけたてをさせたりした。数え七つ八つのころは ら、家の手伝いをした。いそがしい家では、小学校一年生のころから、 までは、学校へ行くだけが大仕事だった。大体、小学校四年生のころか 洗い、そのあとご先祖さまをおがんでから両親にあいさつをする。 ここ(皆沢)は学校まで行くのが大変だったので、小学校三、四年生 むかしの子どもの教育は、父親が中心であった。朝おきるとまず顔を

されたものもあった。どもの数が七、八人というのがふつうであったので、早くから奉公に出どもの数が七、八人というのがふつうであったので、早くから奉公に出い人は、小学校六年で学校をやめて奉公にだされた。むかしは、子

一人前の仕事は高等小学校をやめてからとされた。

であった。(皆沢) 子どもの名前は、出世した人とかあたまのいい人の名をつけるのが例子どもの名前は、出世した人とかあたまのいい人の名をつけるのが例お客のお土産はまずご先祖様にそなえてから食べるようにしていた。

と)だった。 世はずい分子供に無理な事もさせた。兄弟の多い家では大事(おおご)

らせられた。り、くだまき、男の子は地車を曳いて山へもや、炭などの運搬に毎日やり、くだまき、男の子は地車を曳いて山へもや、炭などの運搬に毎日や除があり、石油の入れかえがあった。買物の使、 女 は 御 飯たき、糸く痛除、庭、台所、掃く、ふく等、昔はランプであったから毎日その掃

つけてからたべた。
父への尊敬は絶対で、返し言はしていけないと云われ、食べ物は父に

親の起きない中に起きる。

目上の人には必ず挨拶する。

は富貴をうらやむなという事である。出すぎぬ様にする。「亀の子は甲羅を見て荷を背負え」という。これ

れた。(大門) 道具、百姓の場合は農具を大切にしてよごしておいてはならぬといわ

一民間療法

() 民間薬

薬用植物

ヤマカブラ 家伝薬として使らが利尿剤となる。

ジャクロ(ざくろ) 実の皮を煎じて飲ませると、センブリ 腹痛などのいためどめによい。

子どもの

ヒキツ

オトギリソウー女のくすりケ、ムシのくすりとなる。

ゲンノショウコ 下り腹に効くもので、医者の薬よりよい。(清水

民間薬

カクラン 蓼、胡瓜の種を足のひらにはる。 気絶の時 ヒルダマをのませる。又雪の下の葉を飲ませる。

腫れもの ドクダミをむしてはる。

毒ぬき、蕪の根をつから。

ジー 大腸カタル 赤痢草(ゲンノショウコ)やセンブリをのませる。(大大腸カタル 赤痢草(ゲンノショウコ)やセンブリをのませる。(大

た。(猿石) こぐそ(蚕糞)のうち、二・三眠のころのものは高 血

(二) 咒的療法

みみだれ

におそなえした。(皆沢) 道陸神さまにおねがいした。なおれば、石に穴をあけて、道陸神さま

めかいご

した。(皆沢)るという。皆沢には井戸がないので川へもっていって、このまじないをるという。皆沢には井戸がないので川へもっていって、このまじないをめかいごになったときには、箕を半分井戸にみせ、なおれば全部みせ

メカゴのマジナイ

があって、そこでやった。ればみんな見せる」というマジナイをする。高竹のところに小さな井戸ればみんな見せる」というマジナイをする。高竹のところに小さな井戸メカゴをなおすには、ミをもってきて井戸に半分見 せ、「直してくれ

また、新しいカゴをかぶるとメカゴができる、ともいった。(石鴨)

圧の薬になっ



井 田 安

雄)

(撮影

クモイズを巻けばなおる。

キュウリでこすって、アマダレギワの見えない土の中へいけておくと

が、その人は顔中エボだらけになったという。(大門) してあげるとエボがなおる。昔、エボ地蔵に小便をかけたものがあった 鳳仙寺にエボ地蔵という実際は薬師の石像がある。山芋の粒を珠数に

とおちる。(清水) へビのぬけがらで、 人の見ていないところで、エボ(イボ)をこする

ね小 便

馬という字を書いてさかさにしてねている子のねどこの下に入れる。

こうで

障子のめどから手を出して、白と黒のぬい糸で、その家の相続人にし

似をしてもやす。(大門) 藁のミノを呪文を唱えなが 目カイゴの前で結える真

るとなおるという。(大門) マムシの生き目を針かなに 西方寺の六地蔵の水をつけ

の病いにいいといわれ眼病の のわるいのにいい。(清水) かでほじくりだして飲むと目 人はここへおまいりをした。 中居に薬師さまがある。目

とできる。これはキヌグモの イボタガエルに小便かける

ばってもらう。なおれば、同じように障子のめどから手を出して、あり がとうといって、糸をほどいてもらう。(皆沢)

しびれたときには、ひたいに三回つばをつければなおるという。

やけどの治療

沢

じやがいもをすりおろしてつけるのもよい。 ウメズとウドン粉をこねてつける。ウメズだけぬってもよい。 イボガエルの卵をびんに入れておいてくさらせ、とけたのをつけると

ムカゼ(むかで)の油もよくきく。

火もどし

直る。

どあとを吹いてくれるが、こうしてもらうと熱いのが熱くなくなってく 他人には教えない。何か小さな声で口の中で唱えごとをいいながらやけ る。いたみがとれた。そこへ何か薬をぬってくれた。(清水) 村にやけどをしたとき火もどしをしてくれる人がいるが、唱えごとは — 107 —

カクラン

ので大声でやって家へ帰ったら本当に直っちゃった。 道ろく神さんにオガンショをかける。デッケエ声でやれば直るという

直るとズキンをつくってかえす。(石鴨)

菅笠をかぶせて水をかける。(大門)

を着せて、ひしゃくで頭から水をかける。本当のあつけなら、すげ笠が 水を通すという。それでもなおらなければカクランで は な い という。 アツケ(カクラン)にかかったときは、すげ笠を病人にかぶせ、みの

バヒフにかからないためのまじないは色紙に馬と いう 字 を三つ書い バヒフ(ジフテリア)のまじないには馬馬と書いてさかさにはる。

子のねどとの下に入れる。(皆沢)て、さかさにしてとぶ口のところにはる。あるいは、その紙をねているて、さかさにしてとぶ口のところにはる。あるいは、その紙をねている

とバヒフがうつらない。(今倉) バヒフはジフテリヤのことで、紙に馬と書いて、門口や道に 張出

風邪

る。その時うしろを向くと風邪がついて来るという。(大門)貰って来て、豆を半紙に包んで三本 辻 ヘ サ ン俵の上にのせておいてく風邪の時は、荒神様のお秡を天神町三丁目の前原重夫さ ん の 家 から

をひくという。(皆沢)が体をなぜてから三本辻へおいておく。それを拾った人が、あとの風邪が体をなぜてから三本辻へおいておく。それを拾った人が、あとの風邪をいくつぶでもいって、それを紙につつんでおひねりにして、家のものかぜの神さまをはらい出すといって、三文(むかしで三銭)と、大豆かぜの神さまをはらい出すといって、三文(むかしで三銭)と、大豆

流行りカゼ

名をカゼノカミオクリという。(石鴨)行く道が分れるところまで行っておいた。だからその土地はいまもよびをうちながら歩き、上藤生の奥の方の人家から離れたところの勢多東へをうちながら歩き、上藤生の奥の方の人家から離れたところの勢多東へすがした。シモの村境からかついで練り歩き、鉄砲のある家では空鉄砲りをした。シモのだがカゼが流行したとき、ミコシをかついでカゼノカミ送大正のことだがカゼが流行したとき、ミコシをかついでカゼノカミ送

(鍋足) 送り盆の時辻の道端に供えたダンゴを食べると、風 邪 を ひ かない。

かぜの神送り

言、を入れて、三本辻におく。豆を入れないで、銭だけのこともある。(居を入れて、三本辻におく。豆を入れないで、銭だけのこともある。(居を越の晩に年令だけ豆を白紙に包み、一、二銭(今は一、二円)の銭

疱瘡おくり

へおく。(居館) 植え疱瘡の時に、赤い幣束とごちそうをサン俵の上にのせて、三本辻

オカマサマ

けたときには、このハナでなぜてやるとよい。(清水)を片づけてもここだけはとらずにおき、子どもが魚の骨をのどにひっか今年の方が大きい方がカカア天下という。オカマサマのハナは他のもの年々小さくなってゆき、毎年のものをとっておき、重ねてゆくもので、年を小さくなってゆき、毎年のものをとっておき、重ねてゆくもので、お正月さまの松かざりをつくるときにオカマサマをつくる。これはつお正月さまの松かざりをつくるときにオカマサマをつくる。これはつ

うるしかせ

妊娠中の人

うるしかぶれた時は、油物で顔をこすり、馬にくわせる。 (居館

妊娠中の人が、火事を見たときに体をなぜると、そこに赤いあざがで

くとよいという。(皆沢)をふせぐためには、他人に知られないように、ふところに鏡を入れておきるという。また、死人をみたときには青いあざができるという。これ

1

こうして、十五分後には必ずうまれるという。(皆沢)い、おねがいします。」と五回、 心の中でご先祖さんにおねがいする。がら、「ご先祖さんすみません、どうぞ達者にこの世に出し て もらいたしに気づかれないようにする。どうした難儀か、もんでやるぞといいな先祖の位はいをくるんできて、さんしの背中をなぜる。これは、さん

あとばらがやめるとき

うに、さんしの寝床の下にものさしを入れるといいという。(皆沢)お産のあと、はらが病めるときには、さんし(産婦)が気づかないよ

弘法の水

ようになるという。(皆沢)皆沢の弘法の池から水をくんできてのめば、お乳の出ない人も、出る。

三ト占、まじない

(-)うらない

夢はサカサにかえるという。 マクラユメ 苦労して神経を使っているときみる夢。 マサユメ、考えてもいないことを夢にみる。

クサユメ 疲れたときにみる夢。(石鴨

とぶ夢はいいという。 大水とか水におぼれる夢はわるい。

火のもえあがる夢はいい。

金をひろった夢はわるい。 きられた夢をみると、金が入るという。

死んだ父親の夢は、病気のしらせという。

夜あけの夢はマサユメという。

夢は人にはなすなという。 悪い夢をみたときは、十時前に人にはなせ、夢がきれるという。いい

ヘビの夢

ヘビの夢はいい夢だ(清水)

春へビの夢をみると、その年にふた月たたないうちに金もうけができ

るという。(皆沢)

朝茶をのむとその日の難をのがれるという。(皆沢)

茶柱がたつと縁起がいいという(皆沢

杯茶

一杯ものはイヌでものまぬといって、お茶は二杯のむものという。

ところであるが、年によって多少のちがいがあったが、多い年というの は気象が伝染病によい条件があるからだったかも知れない。(石鴨) ホタルの多い年は伝染病が多いのでいやがる。この辺はホタルの多い

半夏むし

虫でさえこれだから(体を上にして休んでいるのだから)まきものをし 半夏むしというのがいる。その虫は半夏になると足を上にしてはう。

半夏こしてまくんじや、のうくるけえってねてろといった。これは、

まきしんをおくれたことをいったごとば。(皆沢)

からすなき

のをシニガラスといって、人の死ぬ前兆だという。 カア、カア、カア、カアとないてひと休みしてカア、 カアと二回なく

るという。(皆沢) あっはっはっはとなくときは、わらいがらすといって、いいことがあ うるさくなく場合は、なにかがおこる前兆だという。

くものうらない

るいぬすっとぐもだからとて、殺してしまえという。 朝ぐもは縁起がよいといって、ふところに入れる。夜ぐもは縁起がわ

左から右へ横ぎると先方へ行っても用事がたりないという。(皆沢) ヘビが右から左へ横ぎると、先へ行って目上の人に叱られるという。

なものをはいていけという。(皆沢) れるという。だから、よそへ出かけるときには、はなおのきれない丈夫 出かけにはなおがきれると、嫁に来て一、二年の若い嫁は夫にきらわ

オ ク ロ

目の下にあるのは泣きぼくろ。ホッペタにあるのはホッペタダイジンという。首にある人は着るものに困らない。

口のところにあるのは食いしんぼうのしるし。

れたという。(清水)て、それがホクロになって生まれた人についたと、見てもらう人にいわて、それがホクロになって生まれた人についたと、見てもらう人にいわ上藤生のおばあさんは、何かが灯明の油をなめていて 油 が 焼 きつい

金がたまる話

ちゃあいけないのだという。 マムシが玉になったのを見るとウンがつき。金がたまる。それをとっ

がからまり合い、その後金がたまった。上に上ってみたら、その木の足元にも何匹か見えて十匹くらいのマムシのマムシがたかっていて、はねるようにしていたと思って遠くから石の藤生勇さんは、山の杉の下刈りに行き、一本の杉の木の枝の葉に一匹

という。(清水)れを見てからシンショウがでかくなり、近いうちに今度家を建てかえるれを見てからシンショウがでかくなり、近いうちに今度家を建てかえるそれがみんな頭をもちゃげていて、まるで宝珠のように見えていた。こある人は、魚つりに行ったところ川の石の上にマムシが玉になって、

蚕作のうらない

日数によって桑の高い安いをうらなうことばがあった。 この地の養蚕は、シェの方から桑を買ってやった人も多いので初午の

いった。(石鴨) であると柔が少なく蚕が多いから柔のねだん が 高 く なるとが十日すぎになると柔が少なく蚕が多いから柔のねだん が 高 く なるとは蚕一匹に相当するので柔が安いといい、正月の午が早くて二月の初午たり、正月十二日ころだなるが、正月の一日は桑の葉一枚ずつにあ正月の初午が十二日ころになるが、正月の一日は桑の葉一枚ずつにあ

(二 まじない

お札様のもののまん中に虫という字を書いた物をくれる。くと和尚さんが本堂の真中に坐らせておがんでくれると、なおる。何かをしてくれた。子供の夜泣きや、いじいじしている時、子供をつれてゆ北小学校の西、岡公園の下に寂光院というのがあって、虫封じの呪い

おき、虫が起きると釘をしめるとなおる。様におがんで、血脈位の包をくれる。それを家の中心の柱に打ちつけて川内の小倉に東禅寺というお寺があり、そこでも虫封じを出す。本尊

て来る。目にみえる。(居館)と書き咒文を唱える。その手の乾き際に、白い虫が爪の先の毛穴から出を書き咒文を唱える。その手の乾き際に、白い虫が爪の先の毛穴から出居館の小島みつさんは虫の子供が来ると、その手を洗い、虫という字

やくびょうよけ

味からであった。(中居・猿石)じをつるした。やくびょうがみがたまげてちかよれないようにという意戦争前は、春と秋のおまつりのときに、村境にしめなわをはり、わら

悪病神送り

悪病がはやると、村中で出て、ワニグチのような鐘をたたいて、村境



安産のお守にあす楠 (撮影

清 夏の初め 八丁注連

夏の初めに流 注を作り、村の 連を作り、村の

ている。その葉が安産の呪になるという。(大門) 一丁目の日枝神社に大きな楠が数本ある。楠の北限(?)など云われ

念仏をする時

葬式の出た後やる。 昔は年会の前の晩にやった。

七日ざらし

家の背後の人目につかぬ所にかけておく。これは願はたしの意ともいう。 病人の着ていた物を、七日間醬油の空樽などに入れて水につけた後、

不浄送り

灰と、団子たいた時のシャモジと、御幣東を立てて三本 辻 へ出す。(居 出して、其の後枕団子を作るが、その灰をとっておいて、 三本辻にはいろいろの物を送り出す。死者のあった時、 家の中を掃き サン俵の上に

百万遍念仏

くって、 屋のたたみをあげて板の間としておいた。家の中を掃除して、ごちそう の日は、盆がらで、各家から主人が一人ずつ出ておこなった。 (すいか、につけ、菓子などをちやぶだいの上にわにしておいた)をつ 昭和十九年ごろまでは、各家をまわっていた。この日各家では、一部 皆沢では、毎年八月十七日に、百万遍念仏供養をおこなっている。 お茶の用意をしておいた。 ح

とった。家の中に入ると、まずお茶をごちそうになり、そのあと、 けてかねと太鼓をたたいた。一軒の家に大体三十分ぐらいはいた。 むあみだんぶつ」と唱えながら珠数をまわし、「そら」とかけごえをか たく人一人がいて、太鼓をたたくもの(だれでもかまわない)が音頭を はおとなしく、しまいはあばれたという。 大きな珠数があって、それをもつ人、太鼓をたたく人二人、かねをた はじ かな

ごろから夜の七時ごろまで、 まわる順序は、 村のかみのはずれから、しものはずれまで。 日いっぱいはしていた。 朝の七時

> の場所で念仏をやっている。 て、そのあとは辻念仏の形をとるようになった。村の中を三分して、次 番)をきめて、その家で念仏をする形にした。この形で三年か四年やっ 上・中・中っかわと三つに分けて、それぞれの組の中に 当番 いえごみまわるのは、いそがしいし、不経済だというので、 村の中を (お茶当

○かみぐみのはじ(木戸場)

○なかっかわ(おくのはずれ)

○庚申さまのわかされ(三本辻)

ようにというのでやっている。 百万遍念仏は、盆がらにしていて、魔よけ、はやり病気がはやらない あつまって来た子どもたちに、お菓子をやっておしまいにしている。

数には一つのふさがついていて、これがくるくるまわる場合には、病人 のところへくるとひっかかってまわりにくくなるといわれている。 は丈夫になるといい、たすからない病人の場合には、ふさが身内ののも 百万遍念仏を申しきると同時に息をひきとったものもあったという。珠 のや、近所のものもあつまって、そのまわりで百万遍念仏をとなえた。 人がいる場合には、その病人を座敷の真中にねかしておいて、 むかしは、飲まず食わずの大病人、よくもならず、死なずという大病 珠数は、むかしはがんどうぐ小屋においたが、今は神社におさめてあ

お百度まいり

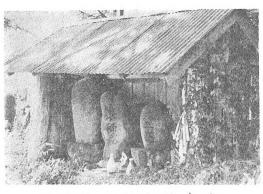
る。

(皆沢

ともあった。右まわりである。(皆沢) 昼間でも、夜でも出た。場合によっては、 て、お百度をふんだ。べつにたのまれなくとも、これは大変という時に 人たちが出て、神社の鳥居から拝殿までの間を百回、行ったり来たりし 病人が医者にもみはなされて、あぶないという時に、親戚とか近所の 社のまわりを百回まわったこ

六三大師

?在は長泉寺境内にまつられているが、もとは作網にあった。 現在地



三除けに酒を供え (橋詰) る 影 関 口 Œ 巳)

札を出す。 医者にみはなされたよ



寺の六 けに酒を供える (橋詰) (撮影 関口正巳)

六三除けの霊験があるとて、この近在からおまいりにくる。 くれれば酒をあげますと かけるものは、 なおして お願生を

でもなおしてやると遺言してなくなったという。

酒の好きな和尚さんがいて、

酒をかけてくれればどんな難病

にうつした年代は不詳。

むかし、

げたりする。 もってきたり、 たしに竹筒に酒を入れて いっておがみ、 三月二十一日が、ご縁 お願生は 絵馬をあ

る人には、木版ずりのお 祈禱をする。 和尚さんが、般若経のご 日、本堂の前で長泉寺の 六三よけをたのみにく

うな場合におまいりにくる。

作網の六三さまは、 作網のコーチの人十一軒でおまつ りして いる。

祈禱師が種

々の病気をな

四丁目の長泉寺の境内に六算除大師があり、

様は酒好きであるといって、竹筒一対を紅白の水引きでゆわ え て 供 え オガンショをかけ、 六三様は長泉寺の境内の小さいお堂にある。昔はさかったものである。 いったという。(大門) おした。古い和尚が、わしが死んだ後、 六三は「一、三足、 なおると線香とお酒を持ってお礼参りに行く。六三 四腹、 六胸、 五、 七が肩、 酒をあげればなおしてやると 九デッペン」という。

る。 (浅部 庚

すると病気がなおる。 浅部の二丁目のお宮の前に庚申塔がある。 米一升、 水一升供えて祈願

近衛前久に関する古い伝えがあり、 地頭も乗馬とがめをされ る。 大

ガンカ

である。 まにゆくと、ひしゃくの底をぬいて上げる。軽くできたお礼というわけ でハダシ参りをした人がいる。桐生の光明寺にもあるが、 ここの人だが、奥さんの産が重かったのでここから荒砥の産泰さまま 荒砥の産泰さ

がいないときにオガンショをかけたという。 初子のときは不安なのでやることが多く、 主人が兵隊に行って頼る人 (清水)

火 んよけ

し入れてあがって、ぐしへ水をまいた。一年中の火難よけのためであっ 大正のはじめごろまでは、正月一日に、屋根の上へ手おけに水をすこ

近所に火事があるとき、 お稲荷さまを焼かないようにと、 お稲荷さま

に水をかける。(中居・猿石)

ねずみたいじ

だん家の中に入ってくる。(清水)ないので、殺せねえ、追えねえからだんだん図々しくなってきて、だん姿を見せるという。だから借りて来たときは、ヘビは殺すわけにはいかねずみたいじにはカモサマのヘビを借りてくる。 借りてくるとヘビが

蜂をとるまじない

る。その時の呪文 右手の親指と薬指と小指の先を押さえ、人さし 指と 中 指とで蜂をと

わしてつかまえる。(居館)手をプッと吹きつけながら顔の前を三回まわす。また、吹かずに三回まチをプッと吹きつけながら顔の前を三回まわす。また、吹かずに三回まなえ、右イチンパイパイ、イチンパイパイ、イチンパイパイ

蛙の卵

らむという。
蛙の卵は、これを乾かして、風上の方からふらせると、相手の目がく

、シとはいわない。(清水) 卵から生えたオタマジャクシのことはカエロンゴといい、オタマジャ

カワバタガミサマ

タガミサマゴメンナサイ」といってやると平気だった。ミミズにションベンかけるとオチンコがはれる。ところが、「カワバ

ばならず「カワバタガミサマゴメンナサイ」といってやった。(石鴨)なければならず、そのときはいそがしいから小便もたれながしでやらねむかしは杉の苗木を川へひやしておいたので、水が増してくると上げ

. .

んだ地蔵さんがいまもあるという。いので、ヘビ地蔵をつくり、墓地に上げたら出なくなった。ヘビがから柔原竜太郎さんの家では、白いヘビがでてはカギ竹に上ってしかたな神社のまわりにいるヘビは、神のお使いだからとらない。

に鼠がいなくなる。 すれは家の主だといって捕らない。たし善青大将 青大将の尻つぽっ切れは家の主だといって捕らない。たし

しま蛇(しま蛇は一番強い蛇で、 ま むしを呑んでしまうという。 見えい

ヘビのマジナイ

話

てから埋めると、さっぱりしてタタラナイという。(石鴨)バケルトカジヤノムスコニタノンデ、ナタトカマデブッキルゾ」といっへビを殺したとき、何もしないでただ埋けるとタタルので、「バンゲ

まむしにあわないまじない

家を出るときの唱えごと

と前をふいて行けばいいという)。と)に「おうて語らん」あぶらおんけんそわか(三べんとなえてふっと)に「おうて語らん」あぶらおんけんそわか(三べんとなえてふっと)がいくさきに「にしきまだらの虫あらば」やまとひめ(大蛇のこ

(皆尺) 出へ行くとき、先祖さまへ二本ずつ線香をあげて行 く も の もいる。

(皆沢)

ヘビをよけるには線香をたてる。(居館

カチクルミ

あった。(石鴨) 勝ちて来る身、すなわち無事の帰還をねがう気持に結びつ いた もので勝ちて来る身、すなわち無事の帰還をねがう気持に結びつ いた もので具体の名のとおり 勝ち栗であり、クルミは、来る身(帰る身)で、兵隊にゆくときは、カチグリとクルミをお守りにもってゆく。カチグ

シオダチ、五穀ダチ

きので、より熱心にやったのだという。(津久原) をにどれかとらなかったという。日清戦争のときには、もし主人が帰っとにどれかとらなかったという。日清戦争のときには、もし主人が帰っとにどれかとらなかったという。日清戦争のときには、もし主人が帰って来ないときは、籍も入っていないので追い出されるかも知れないといきので、シオダチ、五穀断ちをしたという。(津久原)

はずかしがりや

る。(中居・猿石) よそへ行ってはずかしがりやの子どもは、ぞうきんで顔をふくとなお

うなされること

胸に手をあてていてうなされる時は、手をとってやるとなおる。これ 指の先はヘビのあたま、 胸がカエルであると考えられているから。

合は、天王さまと仏さまにあげる。(皆沢) 初もぎりした野菜・果物などは、仏さまにお供えする。キュウリの場 初ものをたべると七十五日生きのびるという。

失せもの

ねがいをする。(皆沢) いろりのかぎつるしをしばって、三日のうちにはみつけてほしいとお

は、真中がへっこむ。 ごはんをたいて、天気のときは真中がふっくらする。天気が悪いとき 天気のうらない (皆沢)

これを春南に秋北という。(皆沢) 春は南が晴れていれば上天気、秋は北が晴れていれば上天気という。

ぶれという。 月が赤くなっているときは晴、かさをかぶっているときは雨になる前

朝やけは降り、夕やけは晴。

天気のいい年はアブが多い。(石鴨

雨の前ぶれ

雨がえるがなくと雨になる。 北に雲が出ると雨になる。

> 東がくもれば雨、 西がくもれば風という。

家の土台石(ぢちょうの石)がしめると、翌日は雨という。(皆沢) ヘビが木にのぼったり、道のふちなどに出ると雨が降るという。

風の前ぶれ

なべずみがちかちかする(なべ火事という)と風になる。 足のあかぎれがいたむと風になるという。 いろりの中でつむじがまくと風になる。(皆沢)

あらしの前ぶれ

という)とあらしがくるという。 アリのすじがつながる(アリの行列の出来ること。これを先祖まいり

岩ツバメが沢山でてくると、あらしがくるという。 山へ行っている人が、ハチの巣が木の下の方についているとあらしが

くるといい、高いところにあれば大丈夫という。(皆沢)

かみなりよけ

雷をよけるのには、 「桑原、桑原、 桑原、 遠くの桑原」ととなえる。

る。また、仏壇に線香をあげる。 かみなりが鳴っているとき、「くわばら、くわばら」と唱えごとをす

ば、かみなりよけになるという。落雷のあった場合には下水をかけろと としとりの豆をとっておいて、初かみなりのときに家人に食べさせれ

側にあげる。魔除けの呪いである。(橋詰) 雷がひどく鳴る時には「遠くの桑原、遠くの桑原」と唱え、線香を縁

カマド神のお松を下げないでおく家もある。初雷の時に もや すとよ

かみなりのこと

入っていた。 かみなりの大きいのがなるときには、お線香をあげて、 カン やの中へ

かみなりの多い年は、豊作だという。

(キョペニン) 初雷のとき、としとりの豆を食べると、かみなりよけになるという。

余り降らない。(猿石)おない。うんまけるほど降る。日光からくるのはのろくて、音ばかりでわない。うんまけるほど降る。日光からくるのはのろくて、音ばかりであ城の方、石のくぼから来る雷は早くて、麦束三ばかつぐのに間に合

い。
方の中禅寺の方からくるのはおそく、ほとんどがそれてしまって降らな方の中禅寺の方からくるのはおそく、ほとんどがそれてしまって降らなべといい、麦を三把ほど束ねる間くらい早くやってくるもので、もう一この土地のかみなりは二ヵ所からくる。赤城からくるのはアカギサン

から心配ない。かみなりは山の木に落ちるので谷間の家には絶対に落ちることはないかみなりは山の木に落ちるので谷間の家には絶対に落ちることはない

オチルという。(津久原)ちょっと昔の人はオカンダチ、オカンダチサマといい、オカンダチが

風をきる

の時は家の南へ立てる。風をきるという。(大門) 大風が吹くと鎌を結えて風の向きによって、北風の時は家の北、南風

大風のとき

てておく。(皆穴) 鎌の刃を上にむけてさおの先にしばって、庭先の風の強いところに立

地震のときには、「万歳楽、万歳楽、万歳楽」という。(居館)

ひょうのとき

庭に出すと、ひょうが向うへよけてゆく。唱えごとはない。ひょうが降るときは、オカマサマのハナ、松に火をつけてトボウから

使う。オカマサマのものなら何でもいいのだろう。(石鴨)藤生イツケでは松がないのでハナを使うが、生形は両方あるから両方

二名が代参に行き、雹乱よけのお札を受けて来る。宿は伊香保の石坂恵赤城神社、榛名神社に、毎年八十八夜前に、三月三日天祭の時決めた

三円であった。(大門) るほどききめがあった。お札は大正三年頃赤城神社榛名神社ともに一枚保、榛名が普通であった。お札は、桑の木に結びつけるとその木が枯れ重郎氏の家と決まっていた。道すじは、大間々、みよ沢、赤城、伊香

地震のうらない

うこと。(皆沢) いうように、それぞれの時刻に地震があれば、雨とか、病気になるといいうように、それぞれの時刻に地震があると、その日のうちに雨になるとこれは、三つ四つ雨に、八つひでり、五七が雨に、九はやまい。

乞

「猿石上組の弁天さまは、上組のイクサバというところ、桐生川の岩の なという。(猿石)

かる雨ぐも、雨ふれどんどこどん」と寝ずにさわいだ。太鼓をたたいて、火をもやし雨雲を呼んだ。「あれかかる雨雲、これか大正十三年は一ヵ月もつづけて雨乞をした。天神様の境内に集り鐘と

いといわれていた。(居館)やめることになっていた。但し土用になってからは雨乞をするものでなやめることになっていた。但し土用になってからは雨乞をするものでな大正十五年には荒神山で行なったが三日目で降った。一粒でも降れば

(青水) 、ほどの大さわぎはないが、水を浴びてから 拝 む と いうことでやる。 総出で出かけるもので、大きく農業をしているわけでもないので、サク

三十年位前迄は天気がつづくと雨乞いをした。樽を太鼓にして叩いて

まわった。荒神山や雷電山へ行った。

アーレの雨雲 雨降れ

ドンドコドン ジヤンジヤカジヤン

なって居り、まつすぐ帰って来た。 昔の雨乞は赤城山から水を貰って来て途中で止っ て は な らない事に

ている。(皆沢)との中へ、石をなげこんだり、かきまわしたりすると雨がふるといわれたかになっている。これを弘法さまの池といい、ひでりがつづくときにな沢の森島弥佐市さんのはたけの中に湧水があり、一坪たらずの小さ

五 数 理

→ 人 前

一人前の基準

のは出さないようにしていた。 お仕事(道ぶしんとか道草刈りなど)については、十五歳以前のもた。村仕事(道ぶしんとか道草刈りなど)については、十五歳以前のもるものとした。終りの年令については、あまり きびしくはいわなかった。

女子の場合は、男子と同じ仕事ができるとはしていなかった。

らいが一人前。 杉のうえつけ―場所によってちがうが、一日二百本から二百五十本ぐ

山の下刈りは一日一反

はたけうないは、強い人で一日一反歩、ふつうは五畝ぐらい。

田植は一日五畝が一人前。

炭焼きは、木をきったり、焼いたりして四貫匁のものを一日に四俵焼麦ぶちは、一日でさなの高さまで実がつけば一人前とされた。

木をきる場合は、一日できった木をつみかさねて長さ六尺、ければ一人前。

高さ三尺

のたなができれば一人前。

は腕の強い人。はたおりは、三丈ものを二日でおれれば一人前。一日に二丈おれる人

五・六年たってから一人前の仕事ができるとされた。炭やきがひとりで炭やきの場合は、むかしは十三・四歳から山仕 事 を や らされたが、これだけの日数では不十分だということをあらわしている。(皆沢)半天半日ほとけさま。ひとえもの一日赤ん坊の産着という。これは、

できて、一人前といわれた。

一日に四俵やければうでの強い方とされた。(猿石)

口 単 位

なわは、両手を左右一杯にひらいた長さが一ひろ、二十 ひ ろ で 一ぼおや指と中指をひろげた長さを大体五寸とした。

は十二俵で一駄。
は十二俵で一駄、木ぐわは三十五貫で一駄とする。米俵は二俵、炭俵わは四十貫で一駄、木ぐわは三十五貫で一駄という。桑の場合、もぎぐまるいたものを一把とし、それを六把で一駄という。桑の場合、もぎぐ

かというのは、馬にびくを二つつけた場合にいう。堆肥などをつけ

はたけの広さ

きというのが大体一畝のこと。 たけの広さをあらわすのに、この辺では〇升まきといった。 (皆沢) 一升ま

俗 信

死への途中(死からの生還

聞えて来た。門をくぐろうとしたら鴉が一杯いた。 中歩いた。ようやく明るくなったら門があり、お経の声のようなものが の人が病気にかかり重くなった時、その人の話に、暗い処を長い道

気がついて眼がさめたら何時の間にか気を失っていた。(大門)

とかいってさわぎもあったが、その後はどうなったか知らない。墓の土 として生まれてきた。字は消そうとしても消えず、養子にやるとかどう 字を書いてやったら、それが二丁目の横町カキアゲの酒屋の孫に男の子 しょうさんが「今度はいいところへ生まれかえって来な」といって手に をとって来てこすると字が消えるという。昭和の初のこと だった。(清 桐生の六丁目のギオン寺のズベ(こじき)がやけどで死んだとき、 お

た。その子が書上へ生れかわった。 派な人間になって長命するようにと思って、子供の背中 に 文 字 を書い 亡くなった子供が白痴で、可愛想だという親心から、又次の世には立

小谷戸のMという家の子であった。(大門) しかし四国の金毘羅の祭とか、出 雲 大 社 のお祭りの日を知ってい |という馬鹿だが人には嫌われず、幾つだといえ ば い つ も十と答え

かでか)流して何もないと返事だったという。(大門) 城から来ていた人が、母が出て来て「死んでも何のしる しも ねえ」と いったので、手紙をやってみたら、 その家 で は位牌も何も(大水か何 女。箱を持って来て、それを前に飾っておいてうらなう。この口寄せ女 他所から定期的に来た。仏がのりうつって喋る。高木氏のイトコで茨

ていた。(萩平) いる人のことは青葉を用い、死んだ人のことはわらの穂を使って、答え いろいろ答えて、草葉の陰で迷っているなどといった。口寄女は生きて に、迷っているようなことをいろいろ聞く。死んだ人のことを聞くと、

赤い玉が六尺位の青い尾をひいていた。(小堀幸作氏談) 子供の頃人魂を見た。高木さんの墓(一丁目西方寺の近く)のそばで

岡平の〇さんの死んだ時は沢山の人が人魂を見た。(大門

カネダマ

らいてふところへ入れちやえば、運がいいという。イチマツサンがこれ たという。見ただけだったのが本当だそうだ。 きはジャンと音がしたというが、本当はおっかねえので胸はあけなかっ に出あったときは両手をあけたぐれえ大きかったといい、胸に入ったと ヒトダマに似ているが、赤い色で、前から向って来るときには胸を

の人が二十五、六歳の頃見た話で、一人や二人でなく沢山の人が見た。 二丁目に入道窪という処がある。そこは大入道の出た処で、今九十位

湯沢の元盛愛社のあった処に火柱の立った事があるという。(大門) 丁目青木清氏の持つ柿の処にあった。これはイタズラをすると崇る

といわれる仏様だった。

カンクロ稲荷

午の時に御参りがあった。(大門) 塚の上にあったが今は小さくなった。 カンちゃんが生れる前に稲荷様の夢を見たので建てたという。 紙の旗などが上げられていた。 昔は石 初

山の神のお神楽

明るくなったといっているのでみたところ、でっかいのがとんだので、 が、山の神がオカグラあげたのだといい、 何か来べえと思っていたところ太鼓を叩いたり笛を吹いたりしたという まんまを煮ていたところ、いっしよに行っていた子どもが明るくなった が、ムジナにだまされたのだろう。昔はムジナの方がりこうだった。 炭やきをしていて都合で夜やいたので、ちっちえなべをもって行って か げの声しか聞えないのだ

ツキモ

板に毛がついていた。これは、つかれた本人だけでなく、 をかけたらそれがきっかけでたちまちなおった。それと同時に縁の下の キツネツキになったときは、秩父の三峰からオイヌを借りて来て、 ムジナッタカリは、明治時代までの話ではよく出てくる。 オサキッキというのは話だけは聞いたことがある。 そのつれあい 願

の人も信じていた話である。(石鴨) 狐つきやムジチつきというのは昔あった。(大門

マイヌ

ものだという。 なったという。 るという。二匹いて、あっちへ行けあっちへ行けといっ たら 見えなく ヤイマヌはミツミネサマのお使いで、山でミツミネサマを見た人がい ミツミネサンは一たん目をはなすと見えなくなっちやら

ツミネサンは、オイヌサマだ。(清水) 兵隊じぶんお参りに行くと、塩だとか米を入れとく箱をかじっちゃっ 清水の下のサンバシのところの岩かげで見た人もいるが、ミ

見るが最近は見たことがない。(石鴨 ずに帰って来たという。いまいきをしたよといったら、オーッというの を借りに行ったという。そのときは肉も何も食わず、 でなるたけだったというが、そうしたら起きたという。 たまには名人の人がとって、えり巻をつくったようで、そういうのは ムジナがたかった、ムジナがたかったというので、秩父へオイヌサマ 途中どこにも寄ら

望の職工を引き取った。新しい工場へ家移りの晩 に 皆 臥 こんでしまっ 家に分れた。その時態太郎氏の家でも別の工場をやる事になり、 た。それは稲荷の神木を使ったので、 て一人でも欠ければこの家はつぶしてしまうといった。 た様になった。しかし主人は何ともならず、一週間ヒキ目をした。そし 青木一家は盛愛社という染織の会社をしていたが、それを解散して三 番頭も機織も一晩にキツネがつい

タケ氏談) えてやった。(一説に京都に織物の視察に行った途中とも云う)。 たという。流行病であったので、宿屋に迷惑かけたといって全部建てか その後熊太郎氏は名古屋の宿屋で死んだ。糸買いにいって病気になっ

てはいけない。 オコジョ オコジョやオサキはこの辺にはいない。 何か来るというが、 何が来るか不明。 (橋詰) 夜、茶椀をたたい

業関

れば、 がもとの方からおちて、しんばが三つになったらまけといった。こうす 麦まきの時期は、カズの木(これでむかしは桐生紙をつくった) イヌの日に麦をまくな。犬にちらかされて、生えないという。 ただまきっぱなしでも、十二日目にははえるといった。 の葉

イヌの日に麦をまくな。食わないものができる。(今倉)麦まきはイヌの日にはしない。この理由はわからない。(中居・猿石)

がある。 をきらう。これについては、次のようないいつたえ

てしまった。
てしまった。
でいきが、そのななき方をしたというのでおこって、そのイヌを殺したかぎって、そんななき方をしたとなるなさ方をしたことがない。今日た。その主人は、イヌが、今までそんななき方をしたことがない。今日た。その京をしらべた。ところが、どこをしらべてもあやしいことはなかったの大部をしらべた。ところが、どこをしらべてもあやしんで、のとき、その家のイヌがほえた。その家の主人が出て来てあやしんで、のとき、その家のイヌがほえた。その家の主人が出て来た。シナの方からあるとき、六部がわきぐにから麦のたねをもって来た。シナの方からてしまった。

ものが出るという。(皆沢)イヌの日には麦のたねまきをしないのだという。この日まくと食わない麦はそんなわけで日本にふえたが殺されたイヌの供養にというので、

タツの日には田植をしない。(中居・猿石)

たからだという。(皆沢)半夏の日に、半夏坊主が田のくろで倒れ半夏の日には田植をしない。半夏の日に、半夏坊主が田のくろで倒れ

ひこっさくをつくると、くわないものができるといってきら う。(中ないという。なにかわるいことがあるという。(皆沢) まきのこしのさくやひこっさく(途中できれたさく)はつくるもので

ロ・簑豆~ひこっさくをつくると、くわないものができるといってきら う。(中ひこっさくをつくると、くわないものができるといってきら う。(中

あわせになって、出世できないという。(皆沢) 北ざくはさくるものでない、子どもが北むきになって、友だちと背中

種まきをしない。(皆沢・中居・猿石)――三月牛ぼうは食べないものができるといって、旧の三月には牛ぼうの――三月

北ゴボウはつくるな、食わない人(死人)ができる。(今倉をできる)

禁忌作物

井戸谷戸の辺では、麻をつくってはならないという。たとえ自然に生

、「下で、

(橋註

る。(背尺) サガオをつくってはならないという。つくると魔がさす と い わ れていサガオをつくってはならないという。つくると魔がさす と い わ れてい皆沢には籾山姓の家が五軒あるが、籾山姓の家では、ホウセンカとア

ないといわれている。それには次のようないいつたえがある。皆沢の氏神さまは八幡さまである。そのために白い犬を飼ってはなら

八幡さまは足利忠綱という人である。あるとき、忠綱の主人が出陣することになった。主人は留守を忠綱にたのんで行った。その主人が帰ってみると奥方のおなかが大きくなっていた。これは、足利の織姫神社のてみると奥方のおなかが大きくなっていた。これは、足利の織姫神社の人からは忠綱を討てという命令が出され、追手がさしむけられた。一人からは忠綱を討てという命令が出され、追手がさしむけられた。一人からは忠綱を討てという命令が出され、追手がさしむけられた。一人からは忠綱をうちくびにしてはいけないというので、主人は家来をつかた。 忠綱をうちくびにしてはいけないというので、主人は家来をつかわした。しかし、その前に忠綱は岩田というところでうたれてしまった。忠綱が岩田の岩のかげにかくれていたところを、追手のつれてきたた。忠綱が岩田の岩のかげにかくれていたところを、追手のつれてきたた。忠綱が岩田の岩のかげにかくれていたところを、追手のつれてきたた。忠綱が岩田の岩のかげにかくれていたところを、追手のつれてきたた。忠綱が岩田の岩のかげにかくれていたところを、追手のつれてきたた。忠綱が岩田の岩のかげにかくれていたところを、追手のつれてきたた。忠綱が岩田の岩のかげにかくれていたところを、忠綱の主人が出陣す

こでくだ矢を放って忠綱をうちとったという。忠綱は、弓とりの名人であったのでふつうの矢ではだめであった。そ

のってきた馬が白い馬だったので)を飼わないという。皆沢ではそのために、忠綱に忠義だてして、白い犬と白い馬(追手

忠綱をまつったのが、皆沢の八幡さまである。(皆沢)

八幡さまに関係していることである。ない。その理由としては、つぎのようなはなしがある。これは、前記のない。その理由としては、つぎのようなはなしがある。これは、前記の情況の市之瀬家と籾山家(両家はイツケ)では、暮のせちもちをつか

暮でせちもちをついていたときに、八幡さま(忠綱)が主人に追われ

ないとて、それ以後両家では、せちもちをつか な い こ とになったといそのために忠綱は打ち首になってしまったというので、八幡さまに申訳ので、もっていたきねで、忠綱の逃げて行った方向をおしえてやった。とをきいた。ところが八幡さまからは口どめされていて口ではいえない話さないでくれといった。そのあと、追手がきて小判をくれて忠綱のこてきて同家に立ちより、金のつばをくれて、追手には自分の来たことを

いう。もらってたべるのはさしつかえないとのこと。(皆沢)年があければついていいといわれているが、十三日まではつかないと

養蚕の禁忌

油を使ってはいけない。使うときは外へ出て使え。ヨメゴといってネズミというな。

ダバコはいけない。(清水)

山仕事関係

しないように。まちがいができるとおおごとだから。(橋詰)汁かけ飯(山へ仕事に行く人は汗かけ飯を食べちゃいけない。けがを

初午の日

火にたたるという。(井戸谷戸) 炭をやく人などは、初午の日には火をあつかう仕事は休めといった、

る。(日鳴) その日でなくても、その人が火元になって火事を出した例もいくつかあとの日でなくても、その人が火元になって火事を出した例もいくつかあに炭やきをして火事になったのは、記憶にあるだけでも二、三回ある。

マドギ

なったり、分かれたのはしない。イタヤ、 カエ デ、 モミジができやすいい、こうなった木は切らない。しかしくっついてもその 先 が 一 つにのびていって出合ってくっつき、下が窓になったような木をマドギと

い

三又の木

の木の場合は絶対に切らない。(石鴨) こので切らない。特になら三本に分かれている木は、山の神さまの木なので切らない。特になら

いう。(皆沢)

愛宕様の木を伐ると病気になるといわれる。(萩平)今ではかまわない。石鴨では窓木を伐らない。

三またになっている木、山の神近くの木は、

むかしは伐らなかったが

日 その他の禁忌

仏滅

仏滅には仏のことのほかはやらない。(皆沢

うのできらう。戦争に行くときは、とらの日をえらんだ。(皆沢)友引の日と、とらの日はわるい。とらの日は死んだものがかえるとい葬 式 の 日

さるの日

ない。たとえば、よめ・むこのはなしはしない。(皆沢) さるの日はかっちらされるといって、大事なはなし、いいはなしはし

門松

前原家では門松を立てず、餅もつかない。(馬立)

祥

餅をもらい、お返しに正月十五日につく家もある。(馬立)は誕生餅の名でつくようになった。また正月にはつけないので近所からと、十二月二十八日に相続人の孫が生れ、誕生祝餅をついた。それから入飛駒字落合の大川家では、昔は餅がつけなかったが、明治初年のこ

櫛

くしをひろうと苦をひろうといってきらった。若いころのうたに、く

た。(皆沢)

火あぶり田

伝説の項に述べた火あぶり田はその持主にいろいろの不運を齎してい

ころ晴々とした生活はない。昔から雷で死んだ人が二人ある。(大門)だ。今は家ができているが、その家を建てた人が又運がわるい。今のと又運がわい。今の人は菱の人だが買って間もなくソリで怪我をして死んさんが急死したので返えされた。ソンナ馬鹿な事があるかと買った人が染屋の大将が買ったら、雷に押しつぶされた。お寺へ上げたら、和尚

て昔、日光の申ざまと赤城の呻さまとが戦争をしたことがあって仲がくなといわれる。昔から赤城へ行った年は男体に行くな。男体に行った年は赤城には行

赤城と男体山

まくないので、同じ年に両方の山へは行ってはいけ な い と い う。(石よくないので、同じ年に両方の山へは行ってはいけ な い と い う。(石大昔、日光の神さまと赤城の神さまとが戦争をしたことがあって仲が

イボタガエル

べたりする悪役といわれる。ひきがえるのことをイボガエル、イボタガエルの両方を使い、蚕を食

イボタガルに小便をかけられるとイボができるという。実さいにはで

きたことがない。(石鴨)

顔になった。おばんしは弘法大師からそのふきんをもらって顔をふいたいになるといって、顔をなぜた。すると、見ちがえるばかりにきれいななっていた。ところが弘法大師がきたなげなふきんで顔をなぜればきれみさんがおこった。弘法大師はほうそうを病んでいて、じゃひっつらによった。そこの家のおばんしが弘法大師にごはんをやった。するとおかあるとき、弘法大師とほうそう

う。(皆沢)たら、じゃひがうつって、おかみさんの顔はじゃひっつらになったといたら、じゃひがうつって、おかみさんの顔はじゃひっつらになったといいて、ふきんをおれげにもかしてくれろといって、かりて毎日顔をなぜところが、じゃひがなおってきれな顔になった。それをおかみさんが聞ところが、

その他の禁忌

猿石)

箒を座敷においてまたぐな。女の人はお産がおもいという。(中居

ごはんの茶椀をたたいてはいけない。子どもに注意をする。 (:

ぼってあるくと火事になるという。(中居・猿石) なべずみ・かまずみは、人通りにかきおとすもので は な い。 人にの

うさぎを食べるとみつくちの子どもがうまれるという。(皆沢)ぼってあるくと火事になるという。(中居・猿石)

嫁は子どもを里で生んだとき、三月がかりをきらう。(皆沢)旅へ出て、七日がえりはするなという。(皆沢)

一軒のうちに、み・とら・さるどしのものがいると、まがわるい。した。そこで昔から家を建てるとき煙出しをつけないという。(馬立)き、鬼の腕をとったのをとられたので、それを取りにヤグラから出入り煙出しのない家 入飛駒にある。この家は昔渡辺綱が鬼退治したと

たねまきをしてから四十九日目の日には田植をしない。(皆沢)

棚

用した大道具の襖一式や、下座 こっているだけであったが、思いがけないものとして、歌舞伎舞台に使 てみたところ、やはりその推定はあたっていた。わずかに太々神楽がの 地であるために、 なり郷土芸能がのこされているが、梅田地区は、 とんどなかったので、こんどの調査においてもそう大きな期待をもって たことが大きな収穫であったといえよう。 いなかったのが実情であった。一つ山脉を距てた渡良瀬川の谷に属する 郷土芸能は最初の予備調査からも、発表された文献や研究資料にもほ 古いものは少ないという推定はされた。実際に調査し 清水の人形、湧丸の人形、 (組立式)の一式、引幕などが発見でき 機場の桐生市街の後背 前田原の神楽など、か

できたのですべてそちらに譲ることにしたので、 民謡については、 従来一しょに含めてきたが、 本項では取扱わないこ 今回から別に調査者が

似ていてなかなかの名作である。永山熊蔵はよ ほ どの 名人だったらし されている前橋市下長磯町の操り式三番に使われる三番のカシラには、 操り人形の製作者がいたことでも明らかである。 生地方にも、 「安永九丑五月吉、 淡路の人形富(でことみ)とよばれた名人の作品によく つてはいろいろの郷土芸能が行われていたことは、 桐生下久方、細工人、永山熊蔵」とある。 県の重要文化財に指定

> きないのである。 れていたにちがいないと思われる。しかし、ほとんど現在みることはで う面師がいたのであるから、桐生一帯はかなり人形芝居や能の翁が行わ の翁の面は、一文字あごのものであるが実に立派な作品である。こうい 上、寛政五丑二月吉日」(白式尉)と刻銘朱入りで銘記されている。 式尉と黒式尉の面にも、 いま一つ前橋市下増田の北爪秀道氏が所蔵する能の「翁」に使り白 「上州桐生下久方、永山熊蔵作」(黒式 尉) 「進

対に必要である。 今後さらに、広沢地区、 川内地区と調査の手をのばしていくことが絶

浅部の歌舞伎舞台の襖

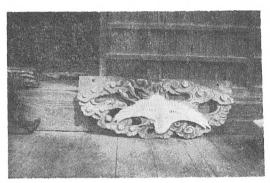
持に入る話はきいていない。舞台の背景や上・下に使用した襖は全部で いないだけにめずらしかった。屏風はよく長持に蔵われるが、襖絵が長 行したところ、まず右のような次第であった。襖の長持はあまりきいて かった。 話であったが、これを聴きのがしにしたら、これから記す発見はできな ょっと聴いた。現在もあるかどうかわからないという。甚だたよりない 居の舞台に使ったというフスマがいくつかあるそうだということを、ち とを知ったのは、浅部の村上家へゆき調査しているうちに、 て、その中に歌舞伎舞台の大道具の襖類が完全に保存されている。このこ 浅部の観音堂の増築したお勝手の場所に、大きな白木造りの箱があっ たとえ、 襖が一枚でもよいから見たいというこことで現場へ急 観音堂に芝



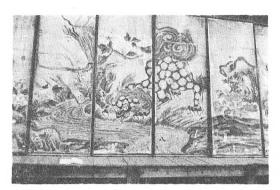
浅部の舞台用背景**襖** (三番叟の出しものに使う) (撮影 萩 原 進)



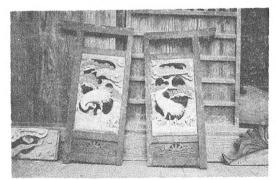
浅部の舞台用襖の部分(2) (牡丹に唐獅子) (撮影 萩 原 進)



浅部の舞台用下座の部分 (撮影 萩 原 進)



浅部の舞台用襖の部分(1) (牡丹に唐獅子) (撮影 萩 原 進)



浅部の舞台下座の部分 (撮影 萩 原 進)



浅部の舞台襖の裏側の図 (撮影 萩 原 進)

浅 部 0 台 0 格 (撮影 萩 原 進)



用 引 浅 部 0 舞 幕 台 (撮影 萩 原 進)

保十四年であるから、

伎舞台

きにあたる。県下にのこる資料からも、天保の改革で、

地方の歌舞 県内では

ことに歌舞伎などは最も先きに槍玉にあがったと

の改革が行われ、

上州地方もかなり深刻な様相を呈したあとに、 江戸時代の文化・文政の奢侈の時代 を経

て、

水野忠邦の天保

もしそう だとする

から或いはこのとき新調したのかも知れない。

三組ある。

子の

した豪華なものは見ていない。製作年代も全く不明であるが、長持の一 代の障壁画における狩野永徳の名作をほう ふつ とさせる「牡丹に唐獅 ものであろう。 に歌舞伎舞台に使用した大道具はのこされているが、 水を飲んでいるもの、 全部で十五枚に分解されており、これをつなぐと完全な図柄となるよ 獅子の姿態がそれぞれ違って配されている。 である。 「天保十五年甲辰七月吉日、奉納天満宮」と小さな字の墨書がある 地には金箔、 惜しいことに作者名がどこにも記されていない。県下各地 絵は唐獅子が何匹もおり、 おそらく、 金粉を散らしたみごとな絵である。 滝の上にうずくまるもの、 舞台の御殿の場などの奥の背景に使われた 牡丹に狂うもの、 豊富な緑青や岩絵具を 大地をのし歩くものな これほどぜいを尽 あたかも桃山時 池の水辺で

> の朱といった変化に乏しいものである。しかし、 は牡丹に唐獅子と全く趣を異にし、色の数も松の緑、 鶴図」であって、 とめられていて、 台があったことはまちがいないであろう。 表の牡丹に唐獅子図の裏がまた完成した絵になっている。 背景としては傑作の部類に入る。 松樹に群鶴を配したものでこれもみごとである。 全体の構成がうまくま おそらく時代物の館 鶴の翅の白、 これは 松松

波上旭 日 「の襖

景として演じられた歌舞伎の舞台はさぞかし立派であったろうと思う。

この襖は芸能史の資料としても立派なものである。

かつて、

この襖を背

「艶」と「朴」の対比をみせている。その点でも、 表 裏合わせた

の場などに使われたものであろう。表裏がいわば、「濃」と

(やかた)

これは、三枚で一組のセットになっている背景で、 図 は大きな朝

今後の保護

縦六尺、横二尺ほどであるから十五枚を組

少くも間口五間以上の舞

合わせると三十尺、

ちょうど五間になるから、

が望まれる。大きさは、

幸い保存がよいのでほとんど損傷していないので、

桐生織物に下絵師あたりではなかったろうかという推定もでき

おそらく永徳あたりのものを模したものと思える。

である。唐獅子の牡丹の図は、

沢なものを作ったとすれば、本県の芸能史上においても非常に貴重

狩野派の筆法そのままであることか

そして筆者

その翌年にもうこれだけの豪華なしかもぜい

相当数の舞台がこわされたようである。水野忠邦が失脚したのは天

(芝居小屋) が破却を命じられている。このとき、

重のところにこの背景を立てて三番叟を演じたものと考えられる。である。このときの舞台はおそらく、背景の奥には無地の幕を引き、二舞台に演じられる三番叟に用いられたものであろう。やはり二尺に六尺りの波頭であって雄渾な図である。おそらく、これは芝居の最も最初のが、今や大海原の上に躍り出ようとしている図である。波は葛飾北斎ば

自体が興味がもたれるが、それにしても、作者名のないのは惜しまれ庶民のなかに、こうしたすばらしい芸能への関心があったということ

二 浅部歌舞伎舞台の組立式下座

の建築の場合はその都度つくりつけるようになっている。固定しているが、おなじ定舞台でも観覧席が屋外につくられる舞台だけた中で太夫が義太夫を語るのであるが、定舞台(固定舞台)では下座はころが下座である。多くは一間四面の家型に出来ており、スダレを下げころが下座である。多くは一間四面の家型に出来ており、スダレを下げるとの右の袖のところに、義太夫語りとチョボが囃し方として座ると

に、浅部の下座の彫刻も立派な透し彫りである。ちゃんと彩色も遺されくは、神社建築の大工の手によって彫られた透し彫りの装飾が多いよう分が揃っているので、復元はやさしいと思う。県内のこうした下座の多に組立てて完成することはできなかったのは惜しいが、一式ほとんど部浅部の組立式下座は、人手が不足していたため、今回の調査ではつい

ることがわかる。 ることがわかる。 さことがわかる。 なことがわかる。 ないるの様戸四枚、勾欄の衝立は松に鶴の透し彫りで一対、破風 ないることがわかる。 ないるの様戸四枚、勾欄の衝立は松に鶴の透し彫りで一対、破風

一 浅部の歌舞伎舞台引幕

下座の収納箱の中に、舞台の引幕一張が遺されている。藍染のタテ縞のであのである。実はこの幕の図柄は歌舞伎では古い時代から用いられたものである。実はこの幕とおなじ模様を黒の代りに藍で紺色にたが、組合村のようになっていて、一緒に興行したか、そうした縁でこたが、組合村のようになっていて、一緒に興行したか、そうした縁でこたが、組合村のようになっていて、一緒に興行したか、そうした縁でこたが、組合村のようになっていて、一緒に興行したか、そうした縁でこたが、組合村のようになっていて、一緒に興行したか、そうした縁でこたが、組合村のようになっていて、一緒に興行したか、そうした縁でこたか、組合村のようになっていて、一緒に興行したか、そうした縁でこたが、組合村のようになっていて、一緒に興行したか、そうした縁でこたが、起合村のようになってあったものである。実はこの幕の図柄は歌舞伎では古い時代から用いられたものである。実はこの幕の図柄は歌舞伎では古い時代から用いられたものである。実はこの幕の図柄は歌舞伎では古い時代から用いられたものである。実はこの幕の図柄は歌舞伎では古い時代から用いられたものでその意味ではやはり注目される引幕である。

四 浅部の芝居

た。しかし、それが何時頃まであったかについては全く不明である。なって、浅部にも芝居の舞台があったそうだという話をきくことができ掛け舞台のことも、定舞台のことも伝承されていない。しかし、あとにこれほどの地方歌舞伎舞台付属の大道具一式が遺りながら、地元では

かったのである。 れ、常設の舞台があったのであろうか と い う 疑問をのこさざるを得なれ、常設の舞台があったのは惜しい。果して、浅部には地 芝 居 が行わすることができなかったのは惜しい。果して、浅部には地 芝 居 が行わ芝居」が来てやったのを覚えているというだけで、地芝居の痕跡は確認質芝居は大正から昭和のはじめ頃までの頃に、栃木県飛駒村の「飛駒

五 浅部の神楽

様式と単などであった。これではないが再現できそうである。 囃子がやれるし、舞の方も全部ではないが再現できそうである。 三氏であるが、踊れるものは岩森氏ぐらいとなり、ほとんど廃絶一歩手三氏であるが、踊れるものは岩森氏ぐらいとなり、ほとんど廃絶一歩手にのあるが、頭れるものは岩森氏でいるのは岩森仙太郎、大川武治、内田茂八の浅部にはまた神楽がのこされている。八月十九日夜、公民館で実演し

る。全部の曲目わったのが八十年位前だったというから明治二十年前後ということになでその先きの経路は全くわからないということである。荒神さまから教楽から教えられたものだというが、荒神さまの神楽が絶えてしまったの系統は里神楽である。伝えによると、桐生市賀茂神社の荒神さまの神

(鈴木正三氏 写真) きなかったのきなかったのに入るものであいたろものである。



天の岩戸の猿田彦の舞 (鈴木正三氏 写真)

(舞の曲目)

見られる。この曲目は普通の神楽には少ない。 翁の舞 芝居でも三番叟は翁の舞であるから、能や芝居などの影響が

四方舞 「四方差し」ともいう。 舞 台 を 清浄にする浄めの舞であ四方舞 「四方差し」ともいう。獅子舞などに多い 「四方固め」 とお

いう場面である。 山の職人信仰の神金山彦が、キツネを相手に剣をきたえると金山彦の舞 これは里神楽に共通している曲目の一つで、鍛治屋や鉱

る。これも里神楽に共通している。 夷の舞 「エビスさまの鯛釣り」と して一般に知られている曲目であ

天の岩戸舞 神話の天の岩戸を演じるもので、これも里神楽に多い。る。これも里神楽に共通している。

でおうか、不照大神、猿田彦、 天 の 鈿 女(うずめ)が出天手力男命、天照大神、猿田彦、 天 の 鈿 女(うずめ)が出る。

(は、た)と、これ一がつらった。 こうでは、これでは、これも、八岐の大蛇退治で知られる里神楽の曲目である。

やれたという。以上が最近までやれた曲目である。しかし、それ以前には次ぎの曲目も以上が最近までやれた曲目である。しかし、それ以前には次ぎの曲目も

を祝う曲目である。 棟上げ 匠(たくみ)の舞ともいい、工匠(大工)が家を建てること

玉取姫 竜宮伝説に出てくる玉取姫の曲目である。この曲目のあるの

以上が、浅部神楽の曲目であるが、実演は天岩戸の舞だけであったが弓の舞(剣に次ぐ武神の舞である。

舞にはさして特長は見られない。

である。 次ぎに、 囃子方の曲であるが、 いま伝わっているものは、 次ぎの諸曲

三つ拍子 出の曲 乱拍子

平舞(ひらまい)

道化舞 荒 舞

狐の舞

の曲名との二つの系統にわかれる。 夷の舞 以上の八曲だという。 囃子の曲を舞の曲名と一致させたものと、本来 おそらく便宜上このように分けたも

(前列中央が白式尉

(鈴木正三氏 写真)



大太鼓の囃子 (鈴木正三氏 写真)

のと思える。各地の里神楽に多い「岡崎」とか いることが注目される。 った名称は消えている。 乱拍子と三つ拍子が、 本来の囃子を表わして 「聖天」とか「鎌倉」と

古事記に出てくる歌をスサイオの命がいうだけである。 る。ほとんどパントマイム(無言劇)で、わずかに八岐の蛇で、 舞い方はかなり荒々しい鎮魂形式で、六方踏みなどはそのよい例であ 出雲八重垣、妻ごめに、八重垣つくる。その八重垣を」という、

る。 全部紐で結えつける形式である。作者銘などはない。 カシラと装束はよく保存されている。カシラはそう古くないようであ 一個だけ面の裏に横棒を入れてくわえるようになっているほかは、

較的保存がよく、 在使用している大胴はきわめてあたらしいことがわかる。 大胴の一つの胴部の内面に「昭和四年新調」とあることからみて、 トリカブトなども一式揃っている。 。装束の方も比とからみて、現

なった。 いたりしてよくやっていた、というが、最近はあまり見られ このほか、 皆沢には飛駒村の人が幾人か組んで「太々ブチ」 な K 步

八木節踊 1)

を進める方がたしかである。 江戸時代にあたらしい芸能として行われるよう に なっ た産物であ 円舞する盆踊りとは全く様相を一変してしまった。 夫改良を加えられてきたもので、 山地での調査に拠ると、 八木節踊りは、 明治時代などに流行した書生や芸人がバイオリンをひきながら 口説節は、文字どおり「口で物語を説く」もので、 いわゆる八木節が口説節の系統である痕 跡を よくのこしてい もとは盆踊りであったから、 八木節のことを「口説き」とよ 現在の八木節踊りはステー 高いやぐらを組んでそのまわりで 盆踊りとしての調査 説話文学が ジ向きに工 んで

ŋ 進)

踊

(手踊り)

(撮影 萩原



あったことがわかった。

る。要するに、伸び伸びとした踊りではなく、 小 さく 縮まった踊りで はほとんどなく、上はく部は体につけるようにして「くの字」型で踊

踊 ŋ 盆



(手拭い踊り)

ということがわかる。

れが木崎音頭になると、 両手を肩より上に上げないで、

古い盆踊りはこのように肩より下を基準の手踊りであったろう

両手を頭上高くあげる大振りの踊りである。

肩から下の位置で踊ることであった。こ

その肩から下の腕も真つ直ぐに伸ばすということ



(撮影 萩原

の二人に、娘時代に踊った盆踊りをやってもらったが、

をくりかえすものである。山地で薗田ヨネ

一に手踊りが主である。

両

手を振りなが

同 0

70

と佐瀬セン (77)

さん

大きな特長は、

進)

なるのである。

どは、古い時代の盆踊りである。

しかし、

その盆踊りがやがて八木節と

めずらしい社会のできごと、 心中とか、殺人事件とが発生すると、瓦版でニュースが流される 事件などをすぐ歌にしたのとよく似 てい かし、 万場町や勢多郡富士見村などにある石を拾っては投げるかつこうに似て

Щ

.地の踊り方は最も古いかというとそうではないらしい。

が、これを脚色して読み上げるように歌ったものが口説節であった。た

山地で語ってくれた「おしも福次」は、

埼玉県下に発生したお

ればさらに古いものである。

いる踊り方はもうここにはなかった。万場町の踊りなどは、

しもと福次の心中事件を内容としたものであった。この「物語」を音頭

それに合わせて踊り子

(参会者)

が輪になって踊り明か

から

野外からステージに上がってしまうにつれて変化した踊りの一つの原型

しかし、いずれにしても、

八木節踊りが、

ここからみ

のこっていたことはやはり注目してよいであろう。

のことである。こうした素朴な踊りはほとんど消えようとしている。 ロッパのタンゴなどで使われるタンバリンよろしくなってきたのは近頃 か「傘踊り」がはやり出した。 のテンポなど全く手踊りと同じである。 手拭いを利用してわずかに変化をつける踊り方である。 古い踊り方は、この二種類しかなく、そのあとから「スゲ笠踊り」 手踊りに次ぐのが「手拭い踊り」とよばれるもので、 スゲ笠が花笠となり、 花笠も、 腕の位置、 首に巻いて 南ヨー 踊り いる 2

がよくやられた。お祝いのときには、酒一升とか、銭とか「ハナ」 「くどき節」「八木節」ともよんでいた。 石鴨の盆おどりは、 大正十二・三年頃からやり出 「お吉清 「鈴木主水」 たも を出 など 別に

であろう。

したがって、

新田町木崎の木崎音頭、

佐波郡境町の赤椀節な

込源太という個人の流儀になり、

したのが盆踊りであっ

この盆踊りの歌曲の方が大きく変えられ、

堀

現在の八木節調が生まれたと見てよい

し」という。倍に書かないと本当のおかえしをしなければならない。 したが、「ハナ」は表示するとき倍に書くものとされ、 これを「お

そ 0 他

越後のゴゼ

夜その家に集まって、 ゴゼの泊まる家というのがあり、そこを定宿とした。 この地方には越後からたくさんのゴゼが入ってきた。 ゴゼからいろいろの歌などを教 わっ たものであ 好きなものは、 大ていの部落に

ある。万歳も宿が部落ごとにきまっていてそこを定宿とした。豆蔵小僧 かった。春駒もほとんど知らないという。万歳と豆蔵も毎年来たもので などいろいろあった。皆沢部落では正月の一枚暦(大小)は売りに来な がやってくると、 ゴゼのほかに村へ来た門付芸は「猿使い」「万才」「虚無僧」「祭文」

俵かますで呉れてやれ

アワの餅より米の餅 豆蔵小僧が来たときは、

と歌いはやしたものである。(大門)

民謡・わらべ唄

井 正 保

酒

追 分け節

梅田の芸能の多くが、新潟の影響を受けたものが多いように思われる 碓井追分けの類歌である。 特にこの追分け節は越後追分けの影響があると思ったが、 曲のわずかな部分に、 古く歌われた馬子 然々別

> ど三つに分けて考えられる。 唄の曲節がのぞいている程度で、 う。馬喰の唄、プロである駄貸付けの馬方のうた、農民の草刈馬子唄な 馬子唄(追分け節)の相違は歌う者の職業によって相違が判明できょ 駄賃付けに歌われた頃の唄では

時のものではなく、街道筋の宿駅の「出女」などによって 酒 宴 唄 とさ たものが梅田で歌われている。 れ、三味線などの伴奏を加えられ、流行うたに化し「追分け節」となっ 梅田の追分け節は駄貸付けの馬方の唄の系統である。もちろんその当

馬の背に、すみやまきなどを積んで運びながら歌ったもので、 して歌う唱法は前述した通り音程を 作っての「ゆれ」(メリスマ)であ 西洋音楽にみる、ビブラートとは違う。追分けの中に見られる音を伸ば が多くみられるが、昔からこれを「コブシ」などといっているが、これは を伸ばして歌っている唱法に、音程を越えてころがしながら伸ばす部分 口をとらえて、自然に囲まれてゆう大に歌ったものである。 を伴奏にしてなど歌ったものではないが、おぐら峠など越しながら馬の 楽は自由拍子の曲が多い。歌手が自分の気分によってゆったりと歌って る。これはめずらしい唱法であるが、こうした「ゆれ」の入っている音 曲は自由拍子でまったく自然に歌われている。その大きな特徴に、 しかし梅田でも追分け節を酒宴唄としてではなく、こ荷駄といって、

○よくよ染めたよ馬喰さんのゆかた、かたにやかげ馬 歌ったものの中からけん討して付けてみた)。 梅田の追分け節には、三味線や尺八の伴奏付きのものはかった。 いてある、千両欠くよじや白歯が過ごせない。 背中にや千両と

かしさが残されている。(楽符の中に拍子記号が入っているが、 も同じには歌えないのである、ここに追分け節の拍子記号をつけるむつ いるのである。だから今歌った追分けと同じ曲を次に同一の人が歌って

笑られる、百に三升の飼をくい、なにが不足でへをたれる。(楽譜1) ああ畜生めどことる、真中とりやがれ、やな田の宿だぞ、おじょろに

二木挽うた

でないそのうたの持つ附帯見的を失い変形されていく民謡は 各 地 に 多 民謡のもつ、しぶさと自然さを失い勝ちになる。 ず、素手でこうした労作業うたをうたうと自然にテンポもはやくなり、 とした、そして広々と自由にうたわれたものであろう。作業をともなわ 身をつかい重労働なのであるから、かつての木挽うたはもっとゆったり のと同じように、 入って広々とした谷間で生活するのでこれがうたの中にも特徴もってい たをうたうことは不可能なことである。特に木材をノコで切ることは全 きな鯛の形をした超大型のノコギリで、大木を製材しながら今の木挽ら とうたうのである。労作業うたとして考えられて来たが、実際にあの大 定着生活を営んでいるために特に同じような生活環境に あっ ても山に ある。現在は木挽はほとんどみられないがうたは残されている。 山にとり囲まれた梅田には、木挽うたは多い。しかも各谷津にそれが しかし、外国の遊牧民が広々とした原野で自由自在にうたっている 梅田の木挽うたも谷深く入り一人でえんりよなく広々 梅田の木挽うたばかり

それぞれ異っているのが興味深い。

それぞれ異っているのが興味深い。

それぞれ異っているのが興味深い。

ためや自分の考えや心をうたで表現したものと考えられる。木挽うたのためや自分の考えや心をうたで表現したものと考えられる。木挽うたのためや自分の考えられる。曲の終りにある相の手に「ズイコン、ズイコな意味からと考えられる。木挽うたのためや自分の考えや心をうたで表現したものと考えられる。木挽うたのためや自分の考えや心をうたで表現したものと考えられる。木挽うたのよりにあるが、この相の手が梅田の各地といったり、また、その仕事の体のようにあるが、この相の手が梅田の各地といったり、また、その仕事の体のようにある。

ジーコン

ジーコン

挽かんじやねずみと木挽は

木挽うた

ジイコンジイコン。

乞食する。小ばちたたいて小ばちたたいて

ズイコン ズイコン (馬立) おがらそなら おがらそなら ないしょ かいしょ かんしょ アイコン ボイコン (馬立) なん (馬立) おがら (馬立) なん (馬立) がった (馬立) (馬立) がった

オー足フンバリカーメンクラッテオーメンクラッテ

出てござるときどき坊さまがときどき坊さまが

(相の手右と同じ)

すいまくる くるみの花よ めでたいのは

(相の手右と同じ)(今倉)

織り女の生活を唄の素材として歌われているものが多い。 仕事に若い女子が働きながら、仕事の苦しみや、望郷の心や、恋など機いって家庭内で織るのと、製糸工場のようなシステムの所で集団でこの反織るのに一昼夜で織りあげる程の者が多かったよう で ある。賃機ととがうかがわれる。機織りに従事するものはほとんど婦女子である。一現在は機織りはみられなくなって来た、かつては相当盛んであったこ

としたテンポでうたわれている。
う。現在歌われている唄は仕事に合わせて歌うものではない、ゆったりう。現在歌われている唄は仕事に合わせて歌うものではない、ゆったりのは少々むづかしい。相当ハイテンポでかっては歌われていたのであろチャンカラと賃機を織るのに合せて、現在残されている機織り唄を歌う毎田の機織り唄も、労作唄の中に入れて考えられるが、チャンカラ、

物の芸術性がある。 機織りをするために、でなく現在うたわれている唄は、目的がなく本

れないでもないが、もっとその当時のそこに働く者の感情を唄で表現しれないでもないが、もっとその当時のそこに働く者の感情を唄で表現したのではないかと、さぐってみたが、その仕事をしたり、そこで働その律動に合わせて、さまざまな機織りの感情を歌ったが、機織唄でも、き」を歌ったり、当時流行の唄を歌ったことがわかったが、機織唄でも、き」を歌ったり、当時流行の唄を歌ったことがわかったが、機織唄でも、いるのではないかと、さぐってみたが、その仕事をしながら、「くどいるのではないが、もっとその当時のそこに働く者の感情を唄で表現して他からできないが、もっとその当時のそこに働く者の感情を唄で表現してものではないが、もっとその当時のそこに働く者の感情を唄で表現して者の疲労を関する。

たものと考えたい。

笑いなのであろう。ぼくなく心から笑える乾いた健康なもので表現している。庶民の本当のぼくなく心から笑える乾いた健康なもので表現し性につきものの笑いを湿っその感情を性にゆだねてユーモアに表現し性につきものの笑いを湿っ

ほとんどの唄が同じような曲想で歌われたようである。で、足ぶみの数によって歌のテンポの変化も少々あったようであるが、ぶみのリズムに合せて、チャンカラ、チャンカラと織りながら歌ったのり機械の足ぶみが二本の物と、数本もあるものもあったという。この足り機械の足ぶみが二本の物と、数本もあるものもあったという。この足り機械の足ぶみが二本の物と、数本もあるものもあれば、三日がかりで一賃機織りも苦しい仕事で、一日一反織る人もあれば、三日がかりで一

○機が織れない機神様よ

どうぞこの手があがるよにアアシャカトンシャカトン(楽譜な

かきたよど おさ

アアシヤカトンシヤカトン(五丁目) ○だれかきたよだ おさなの外に

○一丁目二丁目が川ならよかろ

○可愛主さんにた山がよい

おぐら峠がなけりやよい

(四丁目)

● 朝は別れて晩に合う 別は別れて晩に合う

○わしと主さんは羽織りのひもよ

チャカコーチャカコかたく結んで胸におく

○しまえ頃だよたんずみどこだ

○かわいあの子はにた山がよい

○田中はたやはご殿の桜

につとめはつらいものチャンカラコチャンカラコ。(大門)○かんま、ひこま(地名)のいもほりやろに、二朱や五百でだきねされちぼいち、じょろかいもと手をチャンカラコ、チャンカラコ。だまして金とれ、その金どうする、おかわい、おかわい、彼氏の長半、だまして金とれ、その金どうする、おかわい、油中のこけげなやろめを、〇チャン・チャン・チャンカラコ、山なか、山中のこけげなやろめを、

×

○主に太田は ○私はあなたに 〇五月節句にや ○何でそんなに ○産で死んだら 八月八日 火事場の馬れん振られ乍らも 疑ぐり深い 血の池地獄 ヨモギに菖蒲 (縁日) 今宵一夜は 返さぬ気 廻る客気(りんき)の車井戸 流れ灌頂立ててくれ。 私はあなたに のぼり竿 熱くなる

×

○私は太田の

金山育ち

外に気はない松ばかり(大門

来ては泣いたり 泣かせたり(大門) 逢はれないから来るなというに

)長い年期を 一枚紙に 封じ込められ この務め

早く日が暮れ 早や夜が明けて 早く年期があけりやよい

糸は千本切れてもつなぐ、あなたときれたらつなげない(馬立)○やだおかちやん畑のいもは、かぶり振り振り子が出来る。(居館)○おまえどこへゆく かげはちまきで もとの在所へ種まきに。○早く行きたい この山越えて 娘来たかと いわれたい(大門)

四 糸ひき唄

糸ひきをしながら歌われた唄に 野間がかかる、糸が上手にひけないと機織りの能率にも関係する。この手間がかかる、糸が上手にひけないと機織りの能率にも関係する。このら「ざくり」にからむ仕事である。 からみながら糸が 切 れるとら 「ざくり」にからむ仕事である。 まゆをに 機織りをするのに用いる糸をとる仕事に「糸ひき」がある。まゆをに

〇糸よ切れるなまいよく立ちな むらのないよに ひけるよに (馬立)

田 糸あげ唱

ーモアの感情がこの唄の中に表現されている。 来てひやかしたりする、重労働の作業であっても、若者のロマンと、ユる。夜なべ仕事として糸あげをしていると、近りんの若い衆が集まってあ。夜なべ仕事として糸あげをしていると、近りんの若い衆が集まってからんである糸巻きを、織る場に運んだり取りつけたりする 仕事 で あからんである糸巻きを、織る場に運んだり取りつけたりする 仕事 で あしまれどりをして、夜中に「糸あげ」をする。糸あげ仕事はざぐりに

○ヒヤカシヤたんときな

○かいこあがれば沼田の城下はなべしまえばだいてねる(馬立)

つれていくから、しんぼしな(馬

(対 まりつきうた) まりつきうた しんにしなく 思

貫という具合に借すのがどんどんふえる。
まりつきは、今のまりつきのように地面や床にまりをはづませてする
まないので座ってまりをつく、座りまりつき唄は、歌詞が比較的ながい。
まないので座ってまりをつく、座りまりでなり、
まないので座ってまりをつく、座りまりできって、
表で突くと一貫相手に借すことになる、
曲によっては一貫、二貫、三さ、
まなが方は数人の者が向い合ってまりをつき合う、
規定の歌詞が歌い終まないので座ってまりをつく、座りまりでき頃は、歌詞が比較的ながい。
まないので座ってまりをつく、座りまりでき頃は、歌詞が比較的ながい。
まないので座ってまりをつく、座りまりをつき合う、
規定の歌詞が歌い終まないう具合に借すのがどんどんふえる。

つきの歌は歌詞が短いようだ。かった、ゴムまりはよくはずむので立ってつくようになった、ゴムまりかった、ゴムまりが出はじめたという、 村で も 持つ人は少な明治のはじ頃、ゴムまりが出はじめたという、 村で も 持つ人は少な

○向ら山で白猫が、あしだとないて木のぼりだあしだとはいて木のぼりだ

お父さんの前でも手をついてお母さんの前でも手をついて一月、正月来たなれば

まずまず一貫かしましたながながおせわになりましたお父さんの前でも手をついてお母さんの前でも手をついて

エ十八ひろに また八ひろ 合せて三十六のひろ 今朝のあらしでみなちいけた

○天神様よ、天神様よこの手をあげて、 ででにいのちをとうられて そのへびはどこだと聞いたら からたちやまの青大将 からたちやまの青大将 本にからまれ やなぎにからまれ きちのぼたんにかあらまれ まずまず三貫 かしました。

下さるならば、一梅針ものを 五つとこ六とこ 長い長い 両国橋を おかごもいやじや お馬でこそか、おかごでこそか お馬も、おかごもいやじや 十七八年で手をかしよ

○向う山でわらび摘むのは.

そのさかづき、だれにくれよと しゆうと様のさかづき

お菊じょろしゆにくれよと

東街道にいるもの お菊じよろしゆは、 ここにいないもの

名主様におし込んだ(忍山 東街道じや、水がふえて

○天から落ちた五郎八っあん 茶がまで あんこついて しらじで、もちついて

おれにもくんねと

まずまず一貫かしました じやまするじやまする

つきました。(皆沢)

唄風船つきうた

りが、薬のサービスに紙風船をくれる、 者である。この風船つき唄は風船売りが広めた者ではない、越後の薬売 だ唄を各地に教え歩いた人々がいる。これがわらべうたの流行を広めた のこう能書きなどがしるしてある。 子どもの遊び用具を売り歩きながらそれを商売としその遊びにちなん 形は四角のものが多く各面に薬

つきはぐってしまう。風船が軽いためこの唄はゆっくりしたテンポの曲 すことになる。相手は借りを返すために熱心につき合う、お手玉のよう りつきのように、曲を最後まで歌い終るまで風船をつくと相手に一貫借 に空間に打ちあげた時重くないので少しの風向きによっても風船は流れ この風船つき唄は、薬売りが教えたものであろう、遊びの様式は、ま なおこの風船つき唄は県内でもめずらしいものと思われる。

○一の木 二の木

おひめとじょろと 桜のもとに

べにかねつけて どこえござる

お江戸へござる

お江戸のみちに

羽根の生えた鳥と

羽根生えねえとりと

ぎちぎち、ぱさぱさ

・ついちや一貫よ(皆沢)

梅田の子もり唄も各地にみるような、子どもをねむりにさそうための 子もりうた

唄と、子どもを遊ばせるためのものとある。

ねかせ唄の方のものは、江戸で宝暦、明和の頃歌われたものの「ねエ

ねんねのおもりはどこへいいた」の性格をもっ

たものが多い。 ェんねエんねんねこよ、

子もり唄

○ねんね山の白ねこが 足だをはいておりてくる

足だじやあぶないジョンジョがいい

赤いはなをでたててやれ ジョンジョのはなをが切れたなら

白いはなをでたててやれ

ねんねんねんころねんころり。(皆沢)(楽譜4)

あげられる。古くはこの唄は、 五年)に子もり唄とし出ている。梅田でもこの唄は、月をみながら子も われたようであるが、この唄も古書近松作 「賀古教信七墓廻」(元禄十 遊ばせ唄も諸々みられるが、代表的なものは、月をみて歌ったものが 手まり唄や、 ただ月を観賞する時にうた

りが子どもを遊ばせるために歌われているようだ。

(tr) 遊ばせ

お月さん幾つ十三・七つ

まだ年しや若いね

若子を生んで だれにだかしよ

おまんにだかしよおまんはどこ行つた

油かいに行つた

油屋の前で

すべつてころんで

油一升こぼした

その油どうした

次郎どんの犬と 太郎どんの犬と

みんななめてしまつた

悪口うた

ない、遊びの抑揚でもあり、 る、子どもの悪口は、相手に対して真に悪意をもって歌っているのでは 子どもの遊びの中で相手に向って悪口をいうのに そ れ を 歌で表現す 遊びの継続のアクセントのような性格をも

っているようである。 们通行人 に向って

○おじやんどこだい石鴨かい

どうりで顔が真黒だ(四丁目) 商売なんだい すみやきかい

(楽譜5)

○ジジ、ババねてる 何あけびの花で遊ぶ

次郎は起きて山へゆけ よめは起きて機織おれ

太郎は起きて草をかれ

の花を引用して、更に成人の生活(現実)を歌っているのである。 をしているところからこんな発想がなされると思われる。また、あけび 歌らのであるが、あけびの花の形が年寄りが、親しくねているような形 この唄は、 むらさきのあけびの花をとってそれをみながら、この唄を

〇ジジ ババねてろ

よめは起きて機織おれ

むこは起きてタメかつげ (四丁目

により曲も少々変っているものもある。 あっても、 このように同一の目的をもった歌であって、 歌詞の内容が変り、その詞 (ことば) のアクセントのちがい 同じ地区 (せまい) で

○野峰山から、 ()馬方に向って

ダンゾウが家みれば

ダンゾウの

かかあ

日なたで しらみとり(馬立て)

のに、この唄を歌った。 片ぱしから、しっこくからかった。子どもたちは、ダンゾウに対抗する 里にやってくる。ダンゾウはユーモラスな性格の人で、出合う子どもを この地区にダンゾウという馬方がいて、山からダンゾウが馬をつれて

り、子どもを追いかけたという。

ダンゾウは細心な人で、子どもがこの唄を歌うと、真けんになって怒

子どもたちは、これをおもしろがって、ダンゾウが見えるとこの唄を

ダンゾウにあびせかけ、常に子どもとダンゾウとの間に、 ユーモラスな

トラブルがあったとのことだ。

うにしてだれが創作したのかという近くまで考えられる よう な気がす 数人の者によって創作された唄であることが判明しているとき、どのよ この唄のように、附帯目的と附帯物が現実の身近にあり、その地域で

の伝統音楽を解明していく手がかりにもなる。 ではないかと考えられる。この唄も附帯目的は悪口唄ではあるが、日本 てきた、こうした日本の伝統音楽のあみ出された周辺の解明が出きるの 作されていくプロセスを調べていくことによって、過去に古から歌われ れ、あみ出されているが、このようなあみ出されていく現在の新しく、 現実に絵書き唄など、子どもの中に、次々と新しいわらべ唄が創作さ

うらないうた

ようにと予祝するうたである。 の年に豊作になるというのである。 いながら、ナタで水をかけた部分を切るのである。こうすると果実がそ 桃、栗、ゆずなどの果樹にその水をヒシャクでかけ、なる木ぜめの唄を歌 月十四日、まゆ玉をつくる。まゆ玉をゆでた水をバケッに入れ、柿、 新年に果実が、その年によく出きる

○なるか、なんねえか なんなけりや

ぶつきるぞ。(馬立)

動物のうた

近よってくる。ほたるが来ない時はこのうたを歌ったという。 う、ほたるかごの中に入れたほたるが光ると、飛び回っているほたるが しの、竹ぼうきなどで飛んで来るほたるをそっと打ち落してとったとい んできた程だったという。麦藁でほたる籠をあみ、うちわや、木の枝、 夏になると ほたる取りは盛んであった。山あいを流れる美しい水 新鮮な草木にかこまれて昔は、ほたるも多く、家の中にまで飛び込

> ○ほ やんぶしこい ほ、ほたるこい

飛んでこい

あんどの光で

あつちの水はにがいぞ

こつちの水は甘いぞ

ほ、ほたるこい。(四丁目)(楽譜7)

間の生活する近くに生息する、「墓のダンゴをカラスがたべる」とか、 残されている。 「カラスなきが悪いから、死人ができる」などのたとえは梅田にも多く 動物に向って歌う唄の中で、カラスに向ってのものは多い、カラスは人

向って、この唄をうたう。 地域のカラスが全部一か所に集団で集まり、それからねぐらに帰る一匹 でもカラスが集らないと帰らないという子どもは、これらのカラスに 夕暮になると、昼間里でえさをあさったカラスが、鳴神山などにその

カラスカラス

かんがらす

○からす、からす

おめえのうちがやけるぞ

早くけえつて

水かけろ

水がなけりや タメカケろ。(四丁目)(楽譜8)

からす、からす かんがらす

早くけえつて うちがやけるぞ しょうべんなけりや しようべんかけろ にしが(お前が)

○油かい、茶かい 歯 とんぼのうた

タメかけろ。(馬立)

油 一升かつてこう。(楽譜9)

ぼを捕えるのにこの外のやり方もある。草ぼうきなどでも捕える方法も 尻に小さな花をつけて飛ばしてやる、このときにうたう唄である。とん ばってきたのを木や、しのの先につけてとんぼをとる。とつたとんぼの とんぼをとるのに、鬼ぐもの巣をとりつばをつけてそれを練る。 ね

(盐) テツコバツコ(ありじごく)のうた

○テツコバツコ。

早く起きて水かけろ。(楽譜1) にしが山がやけるから

な土の所に小さいありじごくの巣がある。 納屋の乾いたやわらかい土のところや、山のくずれた乾いたやわらか

いた土を入れて、てっこばっこに巣を作らせたりする。 びんなどに入れて、てっこばっこ同しけんかをさせてたのしんだり、乾 わしていく。このときこの唄をうたう。捕えたてっこばっこは、小さい この中のあり地ごくを捕るのに指で少しずつ、てっこばっこの巣をこ

十日夜のうた

子どもたちは、 十一月十日、朝はうどんを作る家もある、夜はもちをついて食べる。 わらで藁鉄砲を作り家々の軒先や、近くの畑のあぜを藁

> 鉄砲の芯にやつがしらの葉柄(いもがら)を入れなわをまいて地面をた 鉄砲でこの唄を歌いながら打って歩く、藁鉄砲がよく鳴るようにと、藁

をモグラが持ちあげて麦を枯されないために) 蒔いた麦をモグラや野ねずみに荒されないために(特に蒔きつけた麦 藁鉄砲を打つのだとい

〇十日夜、十

藁鉄砲で

ひつぱたけ。 (楽譜11

だけで、その伴奏者である。樽も、笛も、鉦も出来る者はすでに消えて らないのが残念である。古老はかつて芝居も屋台も盛んであったといっ 伝えることなく永遠に消えてしまうことであろう。 いたことが、かえすがえすもなく残念なことである。 ないだろうか、また盆踊り唄にしても、歌い手だけが細々と残っている 音楽の代表である祭ばやしはかつてこの地でも競演など行われたのでは ているが、おはやしの姿がみられなかったのは誠に残念だ。日本の伝統 八木節の原流であったと思われる、梅田の盆踊り唄の歌い手も、それを 梅田の伝統音楽はすばらしい、しかし、祭ばやしや屋台が現在みあた あと数年したら、

りで例えば、十日夜唄なども実際に藁鉄砲を作ってはやらないが、古老 以上の成人の方々の心の中に細々と残されているだけで、この方々の次 の方々が思い出したように歌ってくれた。梅田の伝統音楽も、 歳事唄にしても、 方もまったく変り、遊びをともなった唄(わらべ唄)もぐんと少ない。 の世代の伝統音楽のことが、淋しく思われる。 子どもの遊び唄にしても、テレビ等の進出もあってか、子どもの遊び 歳事そのものが行なわれなかったり、また、変化した 今五十才

1.梅田追分





8.からすからす





0 生

は に

くもなく語る老婦の顔も、産後の食事については、そのきびしさをかみ みの観念は、 捨児などは、 くだくように語っている。 妊婦に対する予兆、 かなり濃くみられた。そして納戸での坐産を、何のくった 県内一般にみられるものであった。然しケガレに対する忌 呪術、 禁忌、安産祈願、 虚弱児や厄年子に対する

粛な意識があったようにみられる。 帯ときの祝いは、最近の七・五 ・三の観念とは違って、より厳

化し、目的をもった一種の学習集団となると、 生れた人は、夜遊びを楽しんでいた。大正期に入って、 古い形の若衆組の姿は既にみられない。然し若衆も明治の中頃までに 夜遊びもなくなってい 青年集団が近代

くなっている。 農者が増加し、 政区域は別々であっても、 て県を別にしても婚姻圏は同一であった。次で勢多郡東村との交流が濃 他の項目でも述べられているように、この地域は一部栃木県安蘇郡田 桐生とは意外に淡かった。然し戦後も社会、 (旧飛駒村)で、 桐生との交流が急激に増加した。 生活圏は同一地帯という関係にあった。従っ 近年桐生市に分村合併しており、古くから行 それに伴って婚姻も多 生活の変化によって離

恋愛ということも殆どなく、或は見合いさえなくて、若くして親同志

る「足入婚」としての意識はみられない。 日あらためて結婚式をあげたり、その形式は一定していないが、 アシイレしたあとそのまま婚家に止まったり、 のいつとはなしの話合いで結ばれていたものが、現代的な恋愛結婚に変 次にクチガタメとアシイレが同一化しているようにみられる。そして つつあり、 その際の親の立場も次第に弱まりつつあるようである。 一、二日で実家に帰り後 いわゆ

ŋ

る。 き、この習俗が注目され、 られた。本県北端の利根郡片品村で最初の総合民俗調査が実施されたと 葬制については、この地方にもコオリトリやお百度まいりの習俗 人間が生と死の境におかれたときのはげしい願いのあらわれであろ 爾来十二回、東端のこの地域でも同様であ がみ

に残っていることと共に注目される。 が終ってのキョメでいろりをきよめ、火を新たにする習俗がかなり丁寧 なっている。何れにしてもケガレを払い出す現実的な所作であり、 っているが、これが山地附近では、葬式の出たあと臼を転が すことに 清水部落で、 仏を棺に納めてからアクマッパライのマクリダシを行な (池田 秀夫)

誕 生

妊娠 出

腹带 一丈の布を五尺と七尺に切って、それをぬって、 五カ月に入っ

んでいる人がいねえかなどといったことがある。 葬式のときのハタでしめると安産する。葬式があったときなど、はらての初めてのイヌの日に、産婆が腹に巻いてくれる。安産祈願。(萩平)

とうちゃんの六尺ふんどしをしめると安産する。(清水)

妊娠予兆 双子の場合は四角張った腹になる。(萩平)

近帰の顔が特にやっれていると男子が生れる。(萩平)

の中で荒く動くと男・細かに動くと女だという。(萩平)妊婦の腹の右側で胎児が動くと男、左側で動くと女だという。また腹

長男或は長女が赤坊のとき、モモにクビレが二つあると次は女、一つ妊婦が右足で敷居をまたぐと女、左足でまたぐと男が生れるという。

する。(荻平) 妊娠呪術 お産が重い場合、水を神様にあげそれを下げて飲むと安産

だと次は男だという。

(萩平)

妊婦が鶏のヒョコの初卵を飲むと軽くなるという。(萩平)

'。 帯をしめたらゆるめないようにすると、 胎内で 小 さ く 育ちお産は軽

めると軽くなる。(萩平) 大胡の産泰様からユビワを受けてくる。産気づいてからこれを指には

高い所に手をあげてはいけない。(萩平) 妊娠禁忌 妊娠したら漬物石など重いものを持ってはいけない。また

ねばならないときは、両面鏡をふところに入れてみる。(萩平)仏様をみてはいけない。見ると黒いアザの子が出来る。どうしても見

と かまし ごじこう げんごとの こういうの (水平) 火事を見てはいけない。赤いアザの子ができる。或は火事をみたとき

手を触れた所にアザができるともいう。(萩平)

兎をたべるとミツクチの子が生れる。

産後一週間はイルリの火をいじってはいけない。火がたたるという。

きよめる。(萩平)一週間目におばあさんが赤坊を抱いてきて、イルリの四隅に塩をあげて

二十五日前には橋を渡らない。(居館) 二十一日とか三十一日以前に井戸へ行くと水が穢れるといった。又、い。ウラ(木の先端)から先にくべると逆さ児が生れる。(萩平)カマドに薪をくべるとき、薪のもとの方から 先 に く べるとお産が重産後二十一日或は一ヵ月、橋を渡ってはいけないという。(萩平)

壬辰中こと事をみると赤ハアボができる。(青水)妊娠中に死んだ人を見ると黒いアザができる。(清水)ニューディルギャジュージャージャージャー

やむを得ないときは、鏡を帯にはさんでいればよい。妊娠中に火事をみると赤いアザができる。(清水)

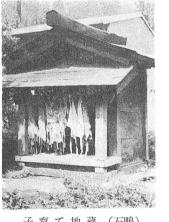
うさぎの肉を食うとミツクチになる。(清水)

妊婦が馬のカナグツをまたぐと、十二カ月胎内にいるという。産婦は宮参り前には橋を渡ってはいけない。(猿石)

ウマッコという。馬は一年胎内にいるからである。(萩平)

男のツワリ

どで、かまのふたなどをとればほんとにいいにおいがしてきて早く食べなくなってしまい、その反対に奥さんの方は腹がへってしかたがないほ亀ヤンという人は、奥さんが妊娠したりすると、ふしぎと食事が進ま



子 育 て 地 蔵 (石鴨) (撮影 阪本英一)

(石 一) 上菱の (清水)

安産祈願

た。(皆尺) お札を受けて、子取り お札を受けて、子取り

をして安産を祈った。から、よくお百度詣り山王様は産の神様だ

これを

(後沢) 池田秀夫)

乳の出ない時は

葉を貰って、

セ

百度

鳥居と拝殿の

他所の信仰産泰様から腹帯を借りて来た。これは勢多の荒砥 (居館 子安地蔵 (撮影 人でそこを百往復 間が百間ある。一 た。 しなければ価値な 詣りは裸足でやっ ンジてのむ、

早く片づく。 まというのは、赤ん坊が生ま お産のときにたちあう神さ

来て、

他に小俣の弘法の池、

まわりの人が神棚へ上げておがむ。その水を産婦に飲ませると、

岡平のお茶の水、理 趣 文の水等は貰って

(現在前

しという事になっていた。

ものがウスヌキサマだ。オガ ける。ジュウニの向う向きの スヌキさまにオガンショをか きの赤ん坊の無心の笑いは、 さまをいうのだろうから、ウ れたときにごはんを上げる神 のを全部上げてやるのがきす ンショバタシには、一升でも ウブスナサマが笑わせたとい ブスナサマだろう。小さいと 根本さまのところにあるウ ひとうすついたも

子安観音堂 (湯沢) (撮影 今井善一郎)

安



(寄日入口) 子育観音 池田秀夫) (撮影

人が下げていいこ

ても連れに行った で、ひとうす上げ りで、

このときは

一人でゆくも

が食べてもかまわ 食べるのはどちら とになっていて、

上げるも信心、

下げるも信心、 という。 (石鴨)

子

育観

ると、近所の赤ちゃんの生れる予定のある家では、 る。その為か下湯沢には難産の人はない。(湯沢) 団子を作り、翌日和尚さんが来ておがんでくれる。 下湯沢にある。毎年一度八月九日(十日がお祭り) 産気ついた時、 それをともすと、ローソクの終らぬ中に安産す その燃え残りをもっ ローソクが小さくな お米を出し合って

りてゆくと安産する。(大門) 湯沢の捿松寺の跡にある、赤ん坊を懐に入れている。 その赤ん坊を借

シュウトサンが弱いときなど、できればサトカタから母親が来て一週間 実家へ行って産むことはほとんどない。世話はシュウトサンがやる。 メにはたらくと安産する。 わとりのハッウミ(初産) をのませると安産する。 (清水)

現在は病院で産むのが多くなった。 トリアゲバアサンはいない。近所のきような人がやって くれ (清水)

た 50 ほど手伝ってくれたこともある。

二升でも、

- 144 -

てくれたので、その子どもたちの名を書いた帳面が残っているという。てくれたので、その子どもたちの名を書いた帳面が残っているという人が来全部袋に入れてもっていたといい、葬式のときには何十人という人が来で、あるおばあさんが死んだとき、トリアゲてお祝いにもらったものを

上げることもある。 第二子以後は産婆でない近所のオバアサンにたのむ。家の年寄りが取

(英子) お産は、神様の居ない部屋、ナンドでした。畳をはぎ、コモを敷いて、なって産婆がついていて産んだ。或は腰のすじがひきつれたので、立っ買ってそれにつかまって産んだ。或は腰のすじがひきつれたので、立っ買ってそれにつかまって産んだ。或は腰のすじがひきつれたので、立っに、生産は、神様の居ない部屋、ナンドでした。畳をはぎ、コモを敷いて、お産は、神様の居ない部屋、ナンドでした。畳をはぎ、コモを敷いて、

お産の重い人は天井からつるした力づなにたよってした。

産の軽い人をイヌバラミといわれた。(大門) 障子のさんが一本一本見える中はお産にならないとされていた。又お

お産は八、九分は婚家でやった。今は産院が多い。(猿石)

正の姿勢 昔はうっぷしてお産をしたが、戦後は仰向けになった。そ

の後、伏して産んだこともある。(猿石)

進部屋、暗い部屋、納戸など、昔は畳をしなかった。(居館)

お産をした。二十一クビリ(わら東の数)を当ておいて、産後一日に一納戸でたたみを上げて、そこにわらをしいて、背にわら束を当てて、

クビリづつはずしていった。(大門)

目) (針仕事はしてはいけないとされていた。 肩を使っては い けない。(居

も同じであった。(大門)
一つ棟で二人が同時に産むと勝負があるのできらった。猫と人の場合

める。畳を取りわらを敷いてその上でお産したので、昔は「わらの上かお産の場所は納戸に移ってした。平素とちがう寝室で、薄暗い部屋で

ら育てる」といった。(猿石)

産の形、昔は坐って、コタツヤグラかなにかによりすがって産んだ。

(居館)

った。(大門)年寄(経験者)がした。今は勿論産婆をたのむが此の頃は病院が多くな年寄(経験者)がした。今は勿論産婆をたのむが此の頃は病院が多くな昔は藁束によりかかって坐ってお産した。納戸でした。産婆は近所の

んをたのんで、腰のあたりをさすってもらった。むかかのお産は座産で、自力で産んだものだ。近所の産婆のおばあさ

かった。(橋詰)
いった。二十一日たつと、はじめて横になれた。それまでは横になれなにならないようにとすわっていた。一日にそのわら束を一つずつとってきそれによりかかって、二つ折りにした布団の上にすわっていた。脚気お産をしてからは、直径二寸ぐらいのわらの束を二十一つみあげてお

シの枕のようだといった。しばってこれにおっかかって産んだ人もいて、大きい枕をつくるとサンしばってこれにおっかかって産んだ人もいて、大きい枕をつくるとサン

た。(石鴨) おいたいでであれているのであるでは、半分ぐらいしか腹が痛く ない といっかっこう」していたら産めまいというので俵をもって来てくれたら、こがっこう」していたら産めまいというので俵をもって来てくれたら、こ 産婦が寝ているのをみて年老りが「あんな馬が寝そこ なったよ うな

ジャトノこいう。 産 婆 一生心づけをする。死んだときは見送りをする。トリアゲ

婆をしてくれた。(居館)

庭野喜平次ジイサンは男でも取り上げた。

その外は近所の女の人が産

取り上げ婆さんの碑

のお産の面倒をみていた。大正七年にその取りあげ婆さんの世話になっ産婆の制度ができる前に、地元に取りあげ婆さんがいて、近在の人々



関口正尺)

績偉大依而其功於表彰其労於 遂産婆之仁術領得爾来其与恩恵者枚挙不遑然令 六月二十五日群馬県山田郡二渡村四十七番地桑原吉五郎氏嫁資性温厚柔 嘉永元年十月十日生栃木県安蘇郡上彦間村長沢権次郎氏之三女慶応二年 泰家事之整理側仕夫貞節也或日有所感而為社界欲尽常念頭於不離 籍酬答与有志共相計姿石像於建設表意者 壮齢而老於養蔭 喜子之像 いる。 立したの 石碑を建 が残って 募金して 老婆者 桑原勢

トリアゲ孫

順而

らうにも招んだ。 キ、誕生などの祝いごとに招んだ。その子が嫁にゆくときや、 お産をとりあげた子どものことをトリアゲ孫といい、 お七夜、 ムコをも オブヤ

病気の見舞いにも、葬式にも行った。(石鴨)

ケで生れたという。(萩平) ケサガケ児 ヘソの緒をたすきにかけて生れると、 オショ ウのケサ ガ

へそのを首に巻いて生れてきた子は三本辻に捨て、 坊主に拾ってもら

埋めた上に棒を立てる。 動物(それが犬でも毛虫でも)を子供がこわがるから、 窒息する。袋はゴサンと一緒に亭主がお墓に埋める。埋めた上を通った **子** この場合口の部分が動くので、そこをすばやく切らないと (萩平) 通らないように

> 緒はいつまでたってもかびないものである。 おき、熱ざましに使う。長男以外の者の分は屋敷稲荷に納めた。 して長男の分だけは、或部分とっておいて、麻でしばって洗って干して ヘソの緒はテイッソク(大人の手で一握り分)に切る。そ ヘソの

た人々が

ってもらうと治るという。 向う側から、シマイッコ(末子)に男の子が生れたときの麻ひもでしば らないという。また女の人のコウデのときに、 ヘソの緒をしばった麻の余りで母親が髪の毛をしばると、頭に血が上 (萩平) 鉄瓶のつるをくぐらせて

紙に包んで取っておき、 生後一週間ぐらいたつとへそのおは自然にとれる。生年月日を書いた 生まれた証拠にする。大きくなると本人に渡

稲荷様の下へ上げた。 お七夜に頭の毛を一寸切って、

それと一緒に稲

荷様に上げた。(居館

納めちゃった。 ないようにつるしておくわけだが、いまの孫どものは、 ので、多くの家で屋敷裏へしばっておいた。かやぶき屋根なのでなくさ ヘソの緒は、しまっておくと遠くに行っても必らず帰って来るという おいなりさんに

という。(石鴨) 目が悪いときに、 ヘソノにお湯をかけ、この水で洗ってやるとなおる

い。(萩平) いて、家の周りを三回廻る。 産 後産がなかなかおりない時は、下駄と草履を片ちんばには 従って普段は片ちんばにはい てはいけな

(大門) 人にふまれるほど、またがれるほどよいとされ、 敷居の下に埋めた。

た。汚れ物もアキの方に穴をほって埋めた。(猿石) ノチ産はぼろ布で包み、油紙にくるみ、かめに入れて方角を見て埋け

(居館) ナ トブグチの跨いで入る処へ埋けた。又親が最初に踏んだ。

児はミズゴという。形があると墓地に埋め、坊さんに供養をたのむ。 流 産 ナガレゴというが、流産した児でもまだ形をなしていない

(萩平)

がって流産しやすかったという。(萩平)りせんじてのんだ。また生いかをたべた。或はさつま畑をマクレルと転りせんじてのんだ。また生いかをたべた。或はさつま畑をさし込んだり、ホオヅキの根をさし込んだ

(二生児儀礼

湯をくれておき、母乳が出ると飲ませる。(猿石) マ ク リ 生まれるとマクリを飲ませて胎便をおむつに取った。砂糖

ませた。虫切りといった。(居館) 赤ん坊には生れると間もなくホーズキの根のしぼり汁か、マクリをの

る。(猿石) でも乗てられる。(猿石) なりあげばあさんは胎児が無事に生まれると、肌着に包ん産 湯 取りあげばあさんは胎児が無事に生まれると、肌着に包ん

本来ならしゅうとが買ってくれる。(萩平) は何故つける。うんこたれてもわからぬように」といった。この着物はを、うこんに染めた着物を着せる。このとき着せながら「うこんのすそき通無地のもので、さもなくば麻の葉の柄 のつ い た、袖口、紐、すそれは前もって準備しておく。男が生れるか女が生れるか判らないから、れは前もって準備しておく。男が生れるか女が生れるか判らないから、

その家で作る。(馬立) 麻の葉模様。素性よく育つように、またしらみとのみがつかぬように。 子どもの生衣には、六尺の布で一枚とれるきもの。男は青、女は赤の

の柄の着物を着せると丈夫に育つという。(猿石)生まれるとすぐ、もめんの肌着を着せて取り上げた。その後、麻の葉

嫁の生家より

よい家では紋付を届ける。(馬立)子どもが生れるとカツオブシ一本とカンピョウ。初子の場合オボギ、

親は、産婦のところへ米とかつぶしをもってきた。(橋詰) 初 産 初産のときには、里方からおはぎをもってくる。また里の

ウブタキ 赤ん坊が生れるとマスカッキリ(一升)の米を、お産に手ですタキ 赤ん坊が生れるとマスカッキリ(一升)の米を、お産に手を出さない人がたいて、(荒神様はウブー血ーを嫌うからで、普通でもな出さない人がたいて、(荒神様はウブー血ーを嫌うからで、普通でもを出さない人がたいて、(荒神様はウブー血ーを嫌うからで、普通でも

菓子を出す。マメに育つようにというわけである。(萩平) ・ ツ メ 生後三日目、豆を煎って砂糖をつけ、産婆、近所の人に茶

オピチャ 生後一週間。この日名前をつける。それは三本のくじを神様にあげて、長男の場合は祖父又は父親が、次男の場合は長男がひいて また赤ん坊の額に、紅で「犬」という字を書き、仲人が作ってくれた まれかの着物をかけ、トリアゲバアサンが 抱い て、隣三軒の便所を廻る。このとき水引きで結えたオサゴ、オカシラツキのゴマメ二匹にカヤる。このとき水引きで結えたオサゴ、オカシラッキのゴマメ二匹にカヤる。 このとき水引きで結えたオサゴ、オカシラッキの質を書き、仲人が作ってくれた お祝いの着物をかけ、トリアゲバアサンが 抱いて、隣三軒の便所を廻る。このとき水引きで結えたオサゴ、オカシラッキは便所の神様に進ぜてから、 の箸を持って行き、オサゴ、オカシラッキは便所の神様に進ぜてから、 便所の便をはさんで赤ん坊にやる真似を三回する。これは犬になって廻るからである。(萩平)

(大門) た。理くつと効薬はつけ方でどこにでもつけられると笑う人もあった。 子どものひたいに「犬」の字を書いてじょうぶに育つ よ う に と願っ

に供えておき、一つを取り出し、その名をつける。(大門) 七日目にする。三つの名を紙に書き、一升ますに入れて、屋敷いなり

にとの呪いである。(猿石) 生まれた子の額に「犬」の字を墨で書く。犬のように丈夫に育つよう

便所も一軒ぐらい廻り、オサゴを上げてくる。(猿石) 生後お七夜には、生児を産婆が抱いて屋敷稲荷や便所を回る。近所の

とを持って、子どものひたいには紅でも赤ちんでもいいから「犬」と書きているという。モロコシの箸で便をたべさせるまねをした。(居館)きているという。モロコシの箸で便をたべさせるまねをした。(居館)とまれて七日目、お七夜にオヒヤマイリをする。自分の家の便所に行生まれて七日目を七夜といい、隣近所三軒の便所へ赤ん坊を連れていった。こ七日目を七夜といい、隣近所三軒の便所へ赤ん坊を連れていった。こ

る。(石鴨)下の家、上の家のいろりと三軒のいろりにあたらせ、やけどよけをす下の家、上の家のいろりと三軒のいろりにあたらせ、やけどよけをすて、

リになるという。このとき箸で食べるまねをさせる。

いてゆく。この字がヨコタ(横の方)にまがっているとコンジョウカガ

子供のお七夜には産婆を呼び、近親者を招いてごちそうした。便所回子供のお七夜には産婆を呼び、近親者を招いてごちそうした。便所回

ひかせて、ひいた名をつける家もある。(猿石)る。好い字の名前を三つぐらい選んで神棚に上げておき、子供にクジを命 名 名を付けるには暦を見て姓名判断など して もらう人もい

CKAン女の子ばかり或は弱い子ばかりという場合「アグリ」と命名する。女の子ばかり或は弱い子ばかりという場合「アグリ」と命名する。

なかった。(荻平) 甘い物は一カ月位、辛いものは二カ月位たべない。油物は百日くれられず、ナンドから出してもらえなかった。この間はお粥、あとは麦飯で、のみで、オカユも二杯までだった。それで一週間は寝ていなければならのみで、オカユも二杯までだった。それで一週間は寝ていなければなら

切餅を食べると出血がある。四日目ぐらいに一切れならよい。食べて

いけないもの、やつがらし、とろいも、そば、油もの。(大門

出ない人が多い。(猿石)というので、食べられなかった。今の人は何でも食べられるが、母乳のというので、食べられなかった。今の人は何でも食べると母乳が出なくなるいと食べてはいけないとされた。パンなども食べると母乳が出なくなるみそ漬け、見舞にもらった干ぴょうぐらいのもので、油気は百日たたな産婦の食べ物は極度に制限されていた。かつぶしに焼き塩、梅干し、産婦の食べ物は極度に制限されていた。かつぶしに焼き塩、梅干し、

昔は産婦は、梅干、塩ぐらいで、オカユをたべていた。(居館)

を帰は三十日位は、おかゆとかつぶしと味噌ぐらいしかたべられなかった。かつぶしのないときには、やき塩をなめていた。百日位は油物かった。かつぶしのないときには、やき塩をなめていた。百日位は油物かった。かつぶしのないときには、やき塩をなめていた。百日位は油物かった。かつぶしのないときには、やき塩をなめていた。百日位は油物ができた程であった。(橋詰)

んだろう。産婦の食事はミソとオカイくれえで、だから髪の毛がいっぱいぬけた

たもんだったが。
今の子は夜泣きしないのも栄養がいいせいで、昔は乳が離れると泣い

足を出していると乳が出ねえといれたたりした。(石鴨)

濃くなるというので、女の子などは年寄りが剃ってやる。(猿石) う ぶ 毛 うぶ毛は一旦剃ってしまう人もいる。一、二回剃ると毛が

お宮まいり

分けてやる。(皆沢) おまいりしてから、これを近所の子どもたちにおみき、きんぴらなど。おまいりしてから、これを近所の子どもたちにする。このときお供えするものは、赤飯(重箱に入れてもって い く)、鳥居のところまで行く。男の子の場合には鳥居の先まで行っておまいりをする。神社へ行く。女の子の場合には生後二十一日目にお宮まいりをする。神社へ行く。女の子の場合には

に行く。生児が女の子の場合は鳥居をくぐ ら ない で、手前で待ってい子供が生まれて二十一日めには、赤飯を重箱に入れて明神様のお参り

はさんで分けてやる。(皆沢)る。赤飯を神様に供えてから、集った子どもたちの手ッピラに少しずつ

稲荷)に詣る。このときの着物は、母親の実家で作ってくれる。女は二十日)トリアゲバアサン又は親戚の者が抱いて、お稲荷様(屋敷オボヤキ』生後、男は二十九日、女は三十日、(入飛駒は男が十九日、

る。(大門) 男の子は三十日目に氏神様日 枝神 社 にお参りす男の子は二十一日、女の子は三十日目に氏神様日 枝神 社 にお参りす供える。チンゲは鼻血が出たとき一本でも抜くと止るという。(萩平)この日チンゲを残して頭髪をそる。そった毛は紙に包み、お稲荷様にこの日チンゲを残して頭髪をそる。

男は二十一日目、女は三十一日が生部屋明といった。(居館)

参りはできないし、当日も行かない。(猿石)呼んでそろってお参りした。ここで氏子入りになる。産婦はこれまで神生後三十日にウブスナ様(二渡神社)にお参りした。親戚をお祝いに

行かない。親たちならかまわないのでかわりに行く。 血 ブク 産婦と夫は三十日間ぐらいは、よそのお祝いにも遠慮して

丈夫な産婦は三週間たてば仕事をする。(猿石)

(萩平) 一番先に御飯を一粒口に入れ、すんなりたべる者は大食になるという。一番先に御飯を一粒口に入れ、すんなりたべる者は大食になる。このときれ、石を赤ん坊にやる真似する。こうすると歯が丈夫になる。このとき一式セットで売っている)、川から小粒の石を拾ってき たのを茶碗に入りれてりまり、生後百十日。赤ん坊のお膳茶碗等を買ってきて(これらは

る。石は固いものでも食べられるようにと願う意がある。(大門)百十日目に食い初めを行なう。膳の上に 石 二つ、ごはん、汁を供え

膳の上に青石をのせる。(居館)

番目からは略されちやう。 男女とも生まれて百十日が食い初めになる。初子のときはやって、二

てオサイにして、箸ではさんで食べさせるまねをする。石でも食えるよその日、新しいお椀などを買って来て用意し、川から真石を拾って来

れなくも自分で食うわあ、といって略されるわけである。(石鴨)らな歯が生えて、丈夫に育つようにお祝いをする。下の子は食わしてく

き、子どもになめさせると歯が丈夫になる。(猿石)させるまねをする。その時に、庭先の小石をきれいに洗って膳の上に置生れて百日たつと、子どもの膳を一揃い作ってごちそうを盛り、食べ

育児

母の子供とは、大きくなるまで兄弟づきあいをした。(萩平)とその最後のとき着物、下駄、帯を買って乳母にお返しをした。昔は乳する。或は目やにが出たり赤くなるので、もらい乳をした。乳をもらうする。可は目やにが出たり赤くなるので、もらい乳を飲ませると下痢

チンケ

ナリサンに上げた。生まれた子は、もとはお七夜にきれいにすってやった。すった毛はイ

りのいた家では最近までやった。学校へ上るころとった。こしてくれるからだといわれ、鼻血止めにもなるといって残した。年老大きくらってもチンゲを残した。ころんだときオカミがひっぱってお

といってすらせないし、チンゲも残さない。(石鴨)いまは生毛は百日前にすると見えない小さな傷が百つくからいけない

る神がいる。(清水) 小さい子がいろりに入りそうになるとき、チンゲをひいてとめてくれ

残したが、ぐりぐり坊主にした子もいる。(猿石)やるもので、学校へ上がる年にまだやっていた子もいる。後に少し毛をいる。弱い子供を健康に育てるために、太田の子育呑竜様に願を掛けている。 おい子供を健康に育てるために、太田の子育呑竜様に願を掛けている。 ちていき 大正十年ごろまでは、七つまでの子を呑竜坊主にした人も

括マ

などとし、後者は戸籍上の名でなく、呼び名とする。こうすると丈夫に生れつき弱い子は名前をとりかえる。例えば正子を正夫、正行、正治

なるという。

捨てた人がモライッコにして育てる。このとき名前をかえる。る。予め話合っておいたお婆さんがその赤坊を拾ってきて、あらためてまた三本辻に寒くないようにして捨て、あとを振返らないで帰ってく

役に立つといわれる。てなかなか育たない。これをヤクドシッコといい、大きくなると特別にてなかなか育たない。これをヤクドシッコといい、大きくなると特別に父母の厄年に生れた子も一度捨てて拾ってもらう。そうでないと弱く

て一生盆暮には物を持って行く。(大門)四十二歳の二歳子は三本辻に捨てる。拾ってくれた人をヒロイ親としぬと葬式に参列する。即ち親としてのつきあいをするのである。(萩平)ぬとする。誕生日、盆、暮には出来たものをもってお婆さんに届け、死こうして拾われた子は、必ず拾ってくれたお婆さんの家に行ってトシー

して呼び名を替えた。(猿石)り、名を取り替えたりした。正式の改名でなくオカミナ(お上名)に対り、名を取り替えたりした。正式の改名でなくオカミナ(お上名)に対り、名を取り替えた。(猿石)

らう。拾い親という。(居館) 厄年っ子は一度道ばたに捨てて、ある たの んでおいた人に拾っても

平)合が多い。別居したり親が死んだり、いわゆる親にウスイという。(萩合が多い。別居したり親が死んだり、いわゆる親にウスイという。(萩が生えるとオニバという。こういう子は親の面倒をみないようになる場が生えているとオニッパ、六ヵ月の赤児で歯

ように思われる。(石鴨)がいいから目が見えるのが早かったり、夜泣きをするのもいなくなったがいいから目が見えるのが早かったり、夜泣きをするのもいなくなった養がついて早く歯が生える。そんな子を鬼っ子という。いまの子は栄養子どもが腹にいるときに、親があんまり栄養をつけると、腹の子に栄

ない。また餅でお供えをつくり、風呂敷に包み、紅白の水引でしばってに、重箱に五ヶ入れて配る。甘いあんであると甘くみられるとして作ら初 誕 生 餅をついて塩あんを入れ、お祝をもらった全戸や親戚など

がいた。しょわせた。しょったまま箕に入れ、それから這い出させる。

(影平

ウモチを背負わせる。(居館) 嫁の実母が子どものはきものを贈る。力もちという、一升のタンジョ

(食言) る。お産見舞をもらった家にその餅をくばる。家にはお客を呼ばない。配る。餅は直径二十センチぐらいの大きさに丸め、あんこは塩っぱくす配もの誕生祝いは紅白のお誕生餅を作って、親戚や世話になった人に

(猿石)

びついて背負せる。二足でも三足でも歩ける子は丈夫になる。(居館) がせる。早生の子はこのころまでに歩き出すもので、誕生までに足袋とかせる。早生の子はこのころまでに歩き出すもので、誕生までに足袋とかせる。早生の子はこのころまでに歩き出すもので、誕生までに足袋とかせる。早生の子はこのころまでに歩き出すもので、誕生までに足袋とかせる。早生の子はこのころまでに歩き出するので、近生までに足袋といっ(石鴨)

メや酒に桜餅をつけてやった。をする。女の子は三月節供でヒナ人形を贈られ、お返しにおコワやスルをする。女の子は三月節供でヒナ人形を贈られ、お返しにおコワやスル初 節 供 生れて初めての節供には初節供といって、親戚から贈り物

に座敷のぼりがはやり出した。(猿石)をつけ、柏餅を作ってやった。今の方がはでになった。なお、大正年間らう。この飾りの出し入れが大変だった。お返しはおコワやスルメに酒らう。この飾りの出し入れが大変だった。 お返しはおコワやスルメに酒入れた。こいのぼりを贈ったが、吹き流しはほんとに力のある人からも男の子は五月節供にノボリを贈ったが、贈る家と贈られる家の紋章を

オトモリ(子守り)

他所からやとったオトモリッコはなく、

兄姉やおばあさんがやる。

イッピキダト オモッタラカニガ ハイコンダ ネンネン ネコノケツイ(ヘ)

マタハイコンダ

アブライッショウ コボシタアブラカイニ チャカイニアブラカイニ チャカイニ

ジロウドンノ イヌガタロウドンノ イヌト

ソノアブラ ドウシタ

アブライッショウカンナメタ

ボウヤノコモリハ ドコイッタ

デンデンダイコニ ショウノフエサトノミヤゲニ ナニモラッタアノヤマコエテ サトイッタ

(石鴨)

7

なくとながもちしょわせるぞ。んだ。(これ以後数をふやしていく。)んだ。(これ以後数をふやしていく。)ねんねんネコの穴にカニがはいこんだ。一匹だと思ったら二匹はいこ

ねむるとねずみにひかせるぞ。からうとわらじをはかせるぞ。なくとながもちしょわせるぞ。

子守り子

(高沢)

子に来る子が多く。機屋の臨時の手伝いもやった。年寄りのいる家では赤子は一年もたつと子守りっ子におぶわせた。彦間の方から子守りっ

おもちゃ 生児のおもちゃはガラガラやおしゃぶりだった。おしゃぶおばあさんが子守りをした。(猿石)

りは長さ十センチぐらいの木の棒で作ってある。(猿石)

がはいらないという。(猿石)色紙に墨で馬の字を三つ書いて、トボロにさかさにはっておくと、病気色紙に墨で馬の字を三つ書いて、トボロにさかさにはっておくと、病気子供の病気。子供がバヒフ(ジフテリア)にかからないように、赤い

ちこんでやる。(猿石) 札が柱に貼ってある家もある。夜泣きがとまらぬ時には、それに釘をぶ供える。また、物知りのおばさんに呪ってもらった。今でも虫封じのお使える。すた、物知りのおばさんに呪ってもらった。

が家のまわりをひいて歩くという。ある人は一晩中まわったという。夜泣きがひどいときには、わらを叩く槌棒にひもをつけて、ダンナ様

イ明

飯)に油揚げを供える。(大門) 夜泣きのときは 屋敷いなり様に願をかける。治ると赤いごはん(赤

4

こ。 神主さんのところへ(子 ど も の 下着)をもって行って拝んでもらっ

せ、直ると新しいのをぬってなす(返す)。(石鴨)子育て地蔵にオガンショをして、そこのオメカキを借りて来てかけさいなりさんにオメカキ(おかけ)をつくって上げる。

子供がエボル(ぐずること)ときは、根性がねじれているのだから、人はかねのわらじを供える。 ドウロクジン 石宮である。正月のドンド焼きはやらない。足の痛い

ねじれた木を切ってきて供える。

穴の病気の人は穴のあいた石を供える。(萩平)

ホーソー神さま

送り出した。

・ホーソーをすると十二日間ホーソー神さまをまつり、十二日間たつと

ホウエンサマに赤い色紙を切ってもらって、サンダワラの四方をつる

のさめるまで上げて十二日で送り出す。してカイドに下げた。毎朝オシラキに入れてごはんを上げ、ホーソー

ハシカはイノチサダメ、ホーソーはキリョウサダメという。(石鴨)

う。(萩平) 入れる。そして「自分の歯は早く生えろ、鬼の歯はあとに生えろ」とい入れる。そして「自分の歯は早く生えろ、鬼の歯はあとに生えろ」とい歯 抜け 下の歯が抜けると縁の下に

イジッコ 養子をもらったあとで生れた子は、イジッコ或はヤキモチーイジッコ 養子をもらった養子は、他家にやるのが普通であっっという。この場合先にもらった養子は、他家にやるのが普通であったがよいといわれている。

子供組 以前は別になかった。道祖神祭もしなかった。(猿石)どちらかが欠けやすいといわれる。(萩平)双生児 二卵生の異性の双生児は、心中の生れ代りという。そして

寺 子 屋 寺子屋で教えていたころは、師匠ものん気で、朝子供に教えておいてから山仕事に出かけ、山へ行って来てからまた教えたりした。月謝は盆・正月にぼた餅を入れて持って行った。(皆井 沢)

子供のはき物 今倉学校に 子供のはき物 今倉学校に リを毎日一足ずつはいた。 雨が降りがひと仕事だった。 雨が降 ちとワラの横緒のついた相下 るとワラの横

行

(撮影

連

年祝

四つのとき――オビトキのお宮参りのときョツミを着せる。オビトキ むかしは、男の子も女の子も四つでやったのがふつう。腰巻き祝い 三歳の子に緋の腰をおばさんが買って贈る。(大門)

た。(清水)やることに変った。だからオビトキは、いまでは七つでやるようになっやることに変った。だからオビトキは、いまでは七つでやるようになっくなって着られなくなるので不経済だから、だんだんにのばして七つでところが四つの年にこしらえた着物は、いいところ一年か二年で小さ

帯びときは十一月十五日、男五歳、女七歳、三歳。(大門)して天神さまにお参りする。このときにはチンゲはなくなる。(石鴨)女っ子が七歳、男っ子が五つでやり、帯をしめてくれ、オコワをふか

今はしない。昔は五月になるとしめた。(居館)

お宮参りに行く。(猿石)に行く。七歳の女の子の時も、着物をこしらえて着させ、近親者を呼びで、最近のほうがよくやる。五歳の男の子の時は近親を呼び、お宮参り七 五 三 三歳の女の子の時には、お祝いをした りし なかったり

って神社へゆく。(居館) 子供が、女三歳、男五歳(袴着)、女七歳(帯とき)の時 七 五三とい

これをオビトキ祝という。(萩平)実家で作ってくれる場合もある。男子は実家で着物、袴を作ってやる。長い反物のオベコを作り、実家では帯、下駄、カンザシをくれる。全部長い反物のオベコを作り、実家では帯、下駄、カンザシをくれる。全部

甲種合格になると赤飯をふかして祝う。(萩平) 男は二十一歳で検査ギモン(紋付、羽織、着物、袴)を作ってやる。織った平絹の着物を染めて、着物、羽織、長襦袢を作ってやる。 + 七 祝 娘になった祝。七・五・三より重んじる家もある。母親の

成人式

祝いする。(居館) 最近一月十五日、桐生の産文会館で行う。家庭では友達など呼んでお

厄

寺、成田不動、菱町の観音院等に厄除にゆく。除大師に行く。女は十九、三十三が厄年で佐野の元三大師、小俣の鶏足男二十五、四十二を厄年といい、その前年前厄に厄除けといって、厄

とは、であっている。 1月19日が象目である。(居館) 子供の四つは厄年といい、菱の黒川の泉竜院へ行き、お金をあげて、

に男は四十二歳を中心にして前厄・後厄といわれ、その年代を気にかけ男は二十五歳と四十二歳、女は十九歳・三十三歳・五 十 五 歳。 とく厄除を貰って来る。一月四日が縁日である。(居館)

ることになっている。この時は理くつなしに買ってやる。るので思い出すことが多く、生まれた家から三角もようのウロコ帯を贈婚して他家へ出たりすると三十三の厄年のとき、親元へ請求が来たりす女の厄年も、十九のときはふつうは家にいるから特にやらないが。結

ヤシになるていどだと思う。この帯は、厄年だからというので一回しめる程度で、後はタンスノコ

勢多東の草木では十九のときにつくってくれたのを見た。(清水)

ルおとし

家の人は拾わない。 み、外に投げて放り出し、それがすむと直ぐに戸をたてた。そのお金はみ、外に投げて放り出し、それがすむと直ぐに戸をたてた。そのお金は、厄年の者は、障子を開けておいて、豆の中にお金を入 れ て 半 紙で包

男も女も同じことをする。(清水)

持護院が厄除けに回ってきて拝んでくれる。来ると大風が吹くといわれ持護院が厄除けに回ってきて拝んでくれる。来ると大風が吹くといわれ、佐野の元三大師へ正月三日にお参りして護摩をたいてもらう。また、

一月の四日ころが厄おとしで、神社や寺によって日が違うからその日

も成田山でもゆく人がいるが、行かない人も多い。にゆく。ふつう、桐生、大間々、佐野あたりまでで、かたい人は川崎で

年、祝い、喜寿、七十七のお祝、親類をよんで酒肴で祝う。吹竹封じ)に行く。本人が行けない時には着物を持って行く。(猿石)四歳の子は一月四日の四つ前(十時前)に菱村の泉竜院へ厄除け(虫

と导、喜弄:司兼であるが、子共が出し合って赤ハチャンチャン、赤を作って(老人が)贈る。

六十歳、七十七歳、八十八歳にはお祝いをする。(猿石)い帽子を作って贈る。大がい十一月十五日に行う。(居館)米寿、喜寿と同様であるが、子供が出し合って赤いチャンチャン、

う。(猿石) 七十七でお祝いすると死ぬとか、八十八でお祝いすると 死 ぬ とかい二重になって火を吹くまで生きろという意味で配る。(猿石)二重になって火を吹くまで生きろという意味で配る。(猿石)喜の字の祝いには、吹き竹二本に水引きをかけて、孫子に配る。穴は

ないが、神官を呼んで拝んでもらう。(猿石)帽子、赤いふんどしを贈って祝う。年寄りなので神社へお参りには行か米の祝いでは、本家に孫子が集まって、赤いはんてん、座布団、赤い

三青年集団

両馬青年同志会があった。と合せて、両馬青年交友会(馬立が二つに分れていたから)それ以前はと合せて、両馬青年交友会(馬立が二つに分れていたから)それ以前は若 衆 組 若衆組とよばれたものはないが、大正初期入飛駒と梅田側

入会員を紹介し、茶を飲んで話合いに入る。酒は使わない。退会は二十時に入会した。入退会は新年会を区切りにしており、新年会の初めに新遊ぶ事も勉強もすべてこの会で行なった。この会には小学校卒業と同

もおつきあいで皆やった。 た。これは最初は足利郡三輪村から教えに来てもらった。好きで嫌いでた。これは最初は足利郡三輪村から教えに来てもらった。好きで嫌いで北小学校と入飛駒小学校の先生が交代でしてくれた。夏は八木節をやっ北小学校と入飛駒小学校の先生が交代でしてくれた。夏は八木節をやった。との会は 夜 学 に 力を入れ、十五歳だが、会員の新入と同時に行なう。この会は 夜 学 に 力を入れ、十

が一日六○~七○銭、酒一升一円という時代である。(馬立)にま会時代は、桑園の仕立て、山の植林もした。当時林業関係の仕事い。また散髪は家でやり運動会は秋にやった。会としての旅行はない。会では村から兵隊に出る人のあったときの送迎 もし た。 酒は使わな

夜あそび

ろ、木の枕ではりとばされたものもあったという。(井戸谷戸)やったことである。むかし、娘と約束なしで、その家へ入りこんだとこょばいは、ずっと年輩の人たち(明治初年生まれぐらいまでの人)が

高沢) もっこかつぎの棒で棒押しをやったり、石かつぎ や 角 力 もやった。

に出たものもあった。 らじをつくったものだ。しかし、実際にはわらじつくりをせずにあそびらじをつくったものだ。しかし、実際にはわらじつくりをせずにあそびわかいしゅは夜あそびをした。夜あそびに出かける前に、翌日はくわ

夜あそびに出かけるのは午後九時すぎで、帰ってくるのは十二時か一

時ごろであった。中には三時ごろに帰ってくるのもあった。

事に行って、昼寝をしていたこともあった。ぐらいは遠出をした。夜あそびにはほとんど毎晩のように出た。山へ仕てからは、桐生から佐野の方まで出かけたこともあった。一ヵ月に一度出かけた場所は、むかしは村内であったが、自転車に乗るようになっ

つぎこんだという場合もあった。方で、なかには、外湯(外風呂)のせんをぬいてしまったり、墓石をかこともあった。障子に穴をあけてのぞっこみをするくらいはおとなしい夜あそびに行ったわかいしゅのもてなしが悪いと、いたずらをされた

見がまず、こと、良とうつとこれでは、ないのでもなった。などこの柔くれを手伝ったり、蚕糞ぬきを手伝ってくれたりした。親が承知で娘にあわせてやれば、夜あそびに来たわかいしゅが、かい

らえば行かなかったし、仲間もつれて行かなかった。であそびに出かけた年令は十七・八歳から二十五・六歳まで、嫁をもけだとおどろいて家中とびだし、娘だけが部屋に残っていたとか。ぶんどしでさがって部屋に入りこんだものがあったという。それをおばれがきびしくて、娘にあわせない家に、やぐらから入りこんで、六尺

夜あそびは、人づきあいの勉強になった。

あった。(皆沢) おいたは、夜あそびで一緒になったものもまたがせないなどといった。なかには、夜あそびで一緒になったものもまたがせないなどといった。おびしはだかで嫁にやるとか、二度ととぶ口をであそびに来たわかいしゅと知りあいになったものは、 くっ つ いたとせなかった。そういう家では、親のいいつけをきちんと守れといって、せなかった。そういう家では、親のいいつけをきちんと守れといって、であそびに来たわかいしゅと知りあいたなったものは、 なわなるときに出かけた程度であった。 夜は針仕事が主で、なかには、なわなるった。 (皆沢)

りいたずらしたりした。追い出されると、いたずらをして、ヮナを仕か若い衆が夜遊びに来た。ハタオリッ子の所に遊びに行って、さわがせた機屋には娘たちが三~五年くらい寄宿舎にはいって働いていたので、

けたり、 青年会ができ、補修学校が夜学で始まると、夜遊びをしなくなった。 井戸にモミヌカをあけたりした。

ってきたこともある。大正十年ごろまで、花火がはやりこしらえてあげ 若い衆の間に芝居や剣術のはやったことがあり、本間道場の高弟が回

夜ばいは明治時代の話である。(猿石)

行った。また米俵を二俵天秤にして、肩にかつぎ、十歩歩くのは強い方 かついで、 である。(馬立) **カくらべ** 六尺棒の棒倒し、相撲やそのあたりにある二十貫位の石を 力くらべをしたものである。正月、盆、農休みのときなどに

きると親の子にしたのが多い。また恋愛結婚はこのような場合に行なわ れた。然しテテナシゴの生れる場合と結婚できたのと半々位の頃もあっ た。最後まで一緒になれないのは、男方の親の反対の場合が多かった。 バイ 現在六十二、三歳位の人まで行っていた。テテナシゴがで

VU 婚

烟

結婚の条件

から嫁が来くるようになった。これは男が勤め人になったからである。 姻 巻 村内が多いが、次は飛駒本村、足尾線沿線で、最近は桐生

て、米沢のは運ばなくなった。(馬立) んだからである。その後大正九年に葛生の石灰を足尾に運ぶようになっ の沢入地方で、それは米沢の石灰岩を鉄索で沢入に運び、更に足尾に運 婚姻圏、部落外が多いが、飛駒村同志はかなりある。遠くでは足尾線

> 馬立は飛駒の方が多い。 れる関係から勢多東村が多い。栃木の方も多いが、これは飛駒の方で、 ル」といった。戦後はボットニモネエ。知っている人がいて話をしてく 昔は土地の者で、いとこ同志が多く、「イトコドウシハ五分余計ハイ (石鴨)

まで行く。(猿石) 婚姻圈 村内や飛駒・川内が多く桐生とは少なかった。藪塚や広沢

結婚年令

今の子どもじゃあ十四や十五ではつとまらない。(石鴨) る人は、家の人から「三日行っていりやあいい」といわれたという。 に来てからも寝ぼけてどうしょうもなかった人がいる。十八で嫁いだあ 昔は女は十四か十五という人も多かった。いまの中学生くらいで、嫁

後、女も同様で二十歳というのは極く早い方である。 年廻りは、一歳上の妻をよいとし、こうした女はかね、 婚他村の者との恋愛ということはなかった。 男は二十五歳前 太鼓でさがし

てもないといわれた。(馬立)

二十一歳ぐらいが普通になった。二十二歳は並ぶといって嫌った。それ を過ぎると晩婚だった。 明治半ばまでは十七、八歳から二十歳前ぐらいで結婚するも 材木の前で鬼ごっこしていたといら話もある。明治後半には二十、 (猿石) 0 が あ

あるところにやりたがった。(馬立) 嫁は大尽からもらえ、むこは貧乏からもらえといった。 主として財産がつり合う程度のものを仲人が見立てた。 また家屋敷位

(橋話)

よめのはずれは、六十年の不作という。

言に返し言葉はできなかった。 親のいうことを聞いてよくかせぐ嫁がいい嫁で、

親のいう

姉さま女房

一つちがいは金太鼓でみつけてもみつからねえ。

、当たう だと皆が思いこんでいる。自由行動をとるとヤクザモノ と 思 わ れた。きめた。狭い地域だから平常いつとはなしに知り合った。こういうものきめた。狭い地域だから平常いつとはなしに知り合った。全人 戦前は見合いなどしなかった。仲人と双方の親同志でとり

(馬立)

を合せて会った。(居館) 昔は恋愛は許されず、皆見合い結婚であった。仲立人が入って、時間

つの目で見られた。(猿石) 嫁は親が決めた。恋愛でいっしょになると、ナレアイといわれて軽べ

仲人は村の有力者、人望ある財産家の人が普通する。仲人のナナデンとになる。仲人はもらう方が頼むのだから、嫁の家に申入れる。ては仲人結婚の形とする。従って最初の婚約申込はやはり仲人がするこ体 人 恋愛結婚はナレアイでクツッイタといい、この場合表立っ

- 大体二人の配禺を見寸すてくれた人がよるが、又懇意よ人をたりで易ボウといってつくりごと、うそをいうこともある。(馬立)- 何人は村の有力者、人望ある財産家の人が普通する。仲人のナナデン

合もある。(居館) 大体二人の配偶を見付けてくれた人がなるが、又懇意な人をたのむ場

ナコウドン(仲人)

ので、罪のないデンボウという意味に使われる。(石鴨)をういう結婚の場合にも仲人をたてるもので、罪のないデンボウといい、何とか結びあわせるためよくほめる。ふつうもらう方から頼んでやるが、下ごしらえというので近所の別る。ふつうもらう方から頼んでやるが、下ごしらえというので近所の別る。ふつうもらう方から頼んでやるが、下ごしらえというので近所の別る。かつうもらう方から頼んでやるが、下さしらえというので近所の別る。というはがかり、仲人は旅行に行くよりおもしれえというので、罪のないデンボウという意味に使われる。(石鴨)といいはオジゴや兄姉がやり、仲人は旅行に行くよりおもしれえどいうでいる。

午)(中人には世話好きの人や、嫁・むこ両方にこ ん い な 人 が なる。(猿

(二) 婚

約

クチガタメ

る。半端もんよりは一升の方がよい。 お端もんよりは一升の方がよい。 の酒をのんでクチガタメができる。酒は結納だるに一つ詰めてもってりの酒をのんでクチガタメができる。酒は結納だるに一つ詰めてもってりの酒をのんでクチガタメができる。酒は結納だるに一つ詰めてもってもらい方に戻り、残る。半端もんよりは一升もって行れ方にゆき、組話がきまると良い日をみて、、仲人が酒一升もってくれ方にゆき、組話がきまると良い日をみて、、仲人が酒一升もってくれ方にゆき、組

クチガタメは結納おさめにしたのもある。(石鴨)

口がため

わる。(居館) 女の家では親戚や伍長を呼び、その日に近所中、施主か仲人を連れてま女の家では親戚や伍長を呼び、その日に近所中、施主か仲人を連れてまりのいい日に仲人が、先に女の方へ一升持ってゆき半分置いてゆく。

いてきて、嫁方に行き五合をやって、分けて飲む。(猿石)結婚の約束を固めるために、仲人が酒一升を持って婿方に行き五合置

半分を飲む。その場合、組合の人近親者が十人位集ってお祝いをし、ほ飲まないが、次に嫁の方に行って半分飲み、またむこの方に来て残りののまないが、次に嫁の方に行って半分飲み、またむこの家に行き、ここではっチガタメという。仲人が一升買って先ずむこの家に行き、ここでは仲人が酒一升を婿のところから嫁の家に持って行き、半分飲んで残り

○○の嫁にもらうと挨拶する。(馬立)ときは親がついて廻り、仲人を紹介する。仲人は例えば○○家の娘を、クチガタメのとき仲人披露といって、仲人が両者の組内を廻る。このかに用意しておいた酒をのむ。嫁の家では嫁も同席する。

持って廻る。(萩平) 部落を仲人が挨拶廻りする。そのとき半紙一帖位仲人の名を書いたのをの家で飲む。そして先ず嫁方の村内を挨拶廻りしたあと、むこの父親との家で飲む。そして先ず嫁方の村内を挨拶廻りしたあと、むことむこは翌日帰るのが普通である。仲人は酒一升買ってきて、嫁、むことむこすシイレ クチガタメのことで、嫁が来て泊ることもある。このとき

クチガタメで婚家に来てしまうこともある。そのまま祝儀をしないの

になった例があり、このときは金で解決した。(萩平)になった例があり、このときは金で解決した。(萩平)なのあと男がいやだから手伝ってくれというわけであり、一泊して帰り、その後また来てだから手伝ったり、準備ができないから、手もないことだし、決ったこともある。アシイレは普通結婚の半年~一年前で、アシイレにしてかせい

れから式に入る場合もあった。(馬立)まわない。祝儀の当日「これはクチガタメの酒です」とことわって、そ普通は一夜泊って翌日帰る。クチガタメをして渡せば、あとは仲人はかクチガタメのとき仲人が連れてきて、一夜或は二夜泊ることをいう。

シイレは身上にはあまり関係がない。(橋詰)てそのまま居続けるものもあった。ご祝儀の前に一旦実家へかえる。アイレという。これをアシがへえった(はいった)という。アシイレをしてがためをして、ご祝儀をする前に、はじめて泊りに来ることをアシュがためをして、ご祝儀をする前に、はじめて泊りに来ることをアシュ

トマリソメともいう。

てから破談になることは山の中だから少ない。(石鴨)て戻らないで、お祝い――結婚式もしないですむ人もある。足入れをし行くのもある。その日から夫婦のようになるもので、そのまんまいついクチガタメがすむと、その晩「借りてゆくよ」というので娘を連れて

客として泊るだけである。(猿石) おりそめ 式の前に嫁がお客に行って一晩泊ってくることもある。お

の足入れというのはなくなった。浅部にはあるとか 聞 い て い る。(居家庭の都合で男の母が病気の時などオンカで借りて来られる。最近はこ事がある。嫁を借りるなどいう。その晩妊娠したなどいう話もあった。 口がためがすんでから、宿り初めといって、嫁になる娘をつれてくる

髪結さんはヨメ持ちである。大体結納は一ヵ月前位に贈る。(居館) いいというと品物を贈る処もある。結納とは別に嫁の衣装はムコ持ち、万とか約束する。場所によっては袴代といって半分位返す。嫁が品物が納金は今は五万円位、昔は十円か十五円であった。結納かえしなしに五口がための日に、結納はいくらとか、仕度はどうするとか定める。結

きまりだった。 嫁のしたくを全部やるのだが、ムコの場合にはカツブシ二本というのが結納おさめの日は特別にとらず、結婚式の当日やった。結納の金に、

てやる方が多かった。お返しに袴をやったりした。(猿石)の「がち嫁方に金品を贈るが、金でやらずにたんすなどの品物を買っくから楽だ。トリムスビをする人が折って作ってくれる。(石鴨)今の人はクチガタメのときにするようで、できている目録でもってゆ

々めでたく受納仕り候」。(猿石)て、目録を取りかわす。「右の品々めでたく受領下されたく候」「右の品て、目録を取りかわす。「右の品々めでたく受領下されたく候」「右の品目 録 仲人は嫁方から目録に裏書きして持ってきた物を受け取っ

婚約破棄

になり、女が嫌やになると、結納金を返す。(居館)かならとらない。結納日がすんでから止めると、男が止めると結納流れ吻らなければならない。違約金をとられる事もある。尤も相手がおだや時には予約が破談になる事もある。そういう時は仲人は組合をわびて

三 嫁 入 り

お宮まいり

りした。おわかれのじんぎという意味があった。(橋詰)嫁に行くときは、屋敷稲荷、神社、そのほか近くの神さまへは

婚礼のウドンブチ

翌朝は夜も明けぬうちに朝飯食べずに来て、夜のうちに用意した粉でゥ婚礼の準備のウドンブチは、前の晩に集まって粉をこねこんでおき、

たハンダイを使ってうどんぶちをして用意をした。(石鴨)ドンをぶった。川原にカマをついてゆでがまとし、近所中から借り集め

嫁のいとまごい

り向いちやう。後をふりけえらねえでゆくのだというが、うちが恋いしくてだれでも振つをし、その後親たちに別れのあいさつをして出る。表から出てからはいよいよ嫁が出発という前に、お勝手の人にもジンギを言ってあいさ

で本当にきまりが悪かった、という人がいる。(石鴨) で本当にきまりが悪かった、という人がいる。(石鴨) で本当にきまりが悪かった、といりますといったけど、お客に来るんならいくら来た人がいる。こっちからモライイチゲンに来ていた人たちが、翌日に来て来るんだらいいけど、帰って来るんじゃあねえど」といわれて嫁に来てもいいけど帰って来るなといわれたんな」というんだといわれながら、ついある人が、「お世話になりました」というんだといわれながら、つい

オ勝手ブルメエ

る。(石鴨) くれ方では、嫁を送り出すとオ勝手ブルメエといって気軽な宴会にな

オッツケミツメ

てあればいつでも実家へお客に行ける。(石鴨)って、お茶を一ぱいもらって来ることをオッツケミツメといい、こうしっち振舞いのあと出かけた嫁が、すぐひっかえして仲人 がつ れて戻

モライイチゲン

坐っている。冷酒の前にお茶が出され、親子の盃がすんでからオチッキいわれてからイチグンは入るわけである。親 子 が 出 て挨拶するまではてよこし、「確かに納まりましたからお寄りなすっとくんなんしょ」 とが目を通し、組の係の人が目を通すと裏書きをしてハンコを押して返しが日を通し、れずに目録を出す。隣り組の人がらけとって施主に渡し、施主朝早くムコが嫁の家へもらいに行く。家へ入るには縁側から入るが、す朝早くムコが嫁の家へもらいに行く。家へ入るには縁側から入るが、す

が出る。(石鴨)

る。(猿石) おの当日の朝、婿方から婿や近親者と仲人が付いて嫁方の、猿石) 式の当日の朝、婿方から婿や近親者が待っていて、仲人が紹介してお近づきの世話をやき、固めのの近親者が待っていて、仲人が紹介してお近づきの世話をやき、固めのの近親者が待っていて、仲人が紹介してお近づきの世話をやき、固めのの近親者が待っていて、仲人が紹介してお近づきの世話をやき、固めの近親者と仲人が付いて嫁方の、猿石)

をする程度である。 方はこのイチゲンを迎えて飲む。このときむこも一緒で、嫁はおしゃく一件人がもらう家に来て挨拶をし、むこ方のイチゲンが嫁方に行く。嫁

くと、
は、
ないのでは、
ないでは、
ないでは

って嫁方へ行く。そし御馳走になってくる。その後嫁 が 出て来る。(居ムコ一元(一見ともかく)これは朝早く、婿方で、本人や伯叔父が揃

しろいなどを入れてきた。(猿石)ツトッコ・末広・スルメ・帯・じゅばん・たけなが(髪飾り)・紅・お嫁 支 度 はさみ箱の中には縁起物として、貝ののしを入れたわらの

たのむ。(居館) 中 宿 嫁が化粧直しをする為に小休みする家で、貰い方の近くに

ザに立寄り(茶をのむ程度)むこ方の準備の出来るのを待つ。次で嫁方のイチゲンが嫁を送ってむこ方に来る。このとき嫁はチュウ

チュウザ

見て、ムコの方が後の方になる。婚家より手前の方の家を休み場として花嫁の行列には特別の順序もなく、仲人ばあさんが嫁の小さい面倒を

る。 この休み場をチュウザといい、お茶を出すていどである。 休んだり、化粧直しをしたり、先方の都合による連絡待ちをす (石鴨)

タイをうたって嫁の一行を迎え入れる。 のカド先まで、 ける婿の家の近くのチュウザ(中座)に寄って時期を待つ。 ンは座敷から直接に出入りする。 ウトに菅笠をかぶせる。これは角を出さないようにするため。 **送りイチゲン** 昼過ぎに嫁方のイチゲンの一行が、提灯をつけて出 組合の人が提灯をつけて迎えに出て、 (猿石) 嫁がカドロをはいる時に、女シ 灯りをたきカドウ 婿方では家 イチゲ カン

チョウ、メチョウの役をする子どもがチョウチンで切って(すれちがい をして)消す。門づきという。 もらい方ではちょうちんをつけて待って おり、カイドウを入るとオ

ツキニケリ」とらいときにトボグチをまたいで入る。 ちに「確かにもらって来やんしたから……」と挨拶をする。 れて入り、お勝手、施主にあいさつをする。仲人も施主やお勝手の人た 花嫁は玄関から入るがそのときに門うたいをする。「ハヤスミノエ 姑さんに手をひか

下を通ると位置を交代した。その後タイマツが提灯になった。 す。昔はカズガラを結えて作ったタイマツを両側からもって、 いた。)むこ方の姑が嫁を迎え入れる。 この とき 菅 笠 を 姑が嫁にかざ から入る。(嫁が初めて家に入るのは、 う。「高砂や···・・」も謡う。 一方嫁方のイチゲンは縁側から、 て出迎える。そしてむこ方の人で謡曲の出来る人がカド ウ タ イ をうた 仲人は嫁を連れてむこ方の家に来る。このとき仲人の後にむこがつい 右足から先に入ることになって 嫁がその 嫁は玄関 (馬立)

をうたう。「高砂や……」 代りだといい、火の方は火にも堪えられる為という。 家では長竿をトボグチにおき、麦稈の束で火をたく。 姑が菅笠を嫁の頭の上にかざす。組合の人は庭に入る時カドウタヒ 貰い方の組合の者が提灯をつけて中宿迄迎えにゆく。婿の の謡である。 それを家で待ち受けた人々が、 嫁が竿をまたぐ時 これは長竿は川

> 練習は秋の夜長の時分にやっておく。) をもって引上る。 謡は桐生から宝生流の人をたのんで来る。 嫁が軒先に来た時ウケウタヒをして引き継ぐ。家へつくと仲人が嫁の手 (大体その

嫁入りの時は玄関から、婿入りの時は廊下から上る。

見ないで、たい松の中でも三年のしんぼうするように」という意があっ 嫁が門口に来て、たい松をまたぐとき母が笠をかぶせてやる。 一上を

で尻をたたいた。(皆沢) 笠をかぶせる。上を見ちゃならないという意味で、 嫁は婚家に来るとトボロからはいるが、 ひきいをまたいだ時に姑が菅 子供が寄ってタイ松

沢 入り 聟は表座敷から直接はいる。 嫁はトボ 口 からは る。

オチツキ

するからというので余り出されない。これまではツキモチが多く、 おしるこの家もあった。 チツキは、ツキモチ、オコワ、スシなどがあり、 オコワは赤い顔を ぞう -- 159 ---

りかえを出した)ので、 チッキは送りイチゲンにも出されるもので、オチッキをケエ オチツキョメゴといわれた人もいる。 (石鴨) タ

うたえる人を頼んで取り結びの式をした。(猿石) 所の十歳以下の子を頼み、 蝶を新婚夫婦に加えて、 待ち女房(近所や親戚を頼む)が二組そばに坐り、仲人夫婦、 取り結びの式 座敷には嫁方と婿方の近親者が並んで席に着く。 五夫婦そろうのが本式だった。 固めの盃のおしゃくをしてもらう。 雄蝶• 雌蝶は近 組の謡

る。これは夫婦揃った人で、 取り結びの座敷は、 床の間は仲人が坐り、 お腹に子供のない人がえらばれる。 その隣りに待女房が二人坐 仕度は

が出る。 司会は組内の人がする。 この嫁のお高盛の飯を盗んで食うと後に嫁が自由に出来るなど 新婚夫婦は三三九度の盃の後、 御高盛の御飯

いう。(居館)

とき「高砂や……」の謡がうたわれる。(馬立) 五・六歳の男女の子供が男蝶・女蝶となって、三三九度を行なう。このについて紹介し、オチカヅキの盃を交換する。そして組内の両親のある次で嫁方の家での席と同様に、仲人の両側にむこと嫁が坐る。この席

式の後に嫁の土産といって、両親や家族にお茶菓子を出す。(居館)茶を飲んでもらうと、組合の人は帰る。床入れの式はしない。(猿石)組合の人にお茶をついで飲んでもらう。嫁ごのみやげを配り、嫁ごのお人も式がお開きになるまでいる。宴が終ると、嫁が式の着物を着替えて式の終り 式のあと酒宴になる。宴がすんで嫁方の一方が帰るが、仲

る。(馬立) る。(馬立) る。(馬立) 、 院方のイチゲンに出す。次で持ってきたヨメノオチヤガンをむこ方で働いている人や両親に挨拶する。次で酒盛りとなる。 これが大体限度にくると、嫁方のイチゲンが帰る頃になる。そしておぶ大体限度にくると、嫁方のイチゲンが帰る頃になる。そしておぶた体限度にくると、嫁方のイチゲンの近しい人が嫁を立たせ、座敷にきて、手伝送ってきた嫁方のイチゲンの近しい人が嫁を立たせ、座敷にきて、手伝送ってきた嫁方のイチゲンの近しい人が嫁を立たせ、座敷にきて、手伝送ってきた嫁方のイチゲンの近しい人が嫁を立たせ、座敷にきて、手伝送ってきた嫁方のイチゲンの近しい人が嫁を立たせ、座敷にきて、手伝送ってきた嫁方のイチゲンの近しい人が嫁を立たせ、

お勝手ぶるめえ

嫁がお給仕をする。(石鴨)す。この席では酒をてっていいして出したので夜が明けたことが多い。すチゲンの帰った後、お勝手やその他で手伝ってくれた人たちに酒を出

タチオチャ(ヨメゴのお茶)

いえないとオッカサンということばがいいずらい。オッカサンといえればその後はずっとオッカサンといえるが、このときオッカサンといえるが、このときに対に対してコメゴのお茶は、イチゲンのいるうちに出す。そのときに姑に対して

お茶菓子は一人一人に嫁さんがはさんで出す。(石鴨)とのお茶をのむとイチゲンは帰るのでタチオチャということになる。

ヒキオトシ(引き出物)

だった。(石鴨) もらい方でも、ふつうにはスルメを三枚とか 五 枚 く らいひいた程度でスルメ二枚にふろしき一枚ていどで、ちっとんべえくれた程度だった。イチゲンのヒキオトシ(引き出物)は、くれ方はかんたんで、よい方

シマダイ

松にタケテつくる。(石鴨)さし、カメはほしがきにごまめの頭をつけてつくり、ツルは紙を折ってのじいさんばあさんを並べてから、大根を切って松竹梅をさす台としての能に米一升を山盛りにし、松竹梅をとって来て、おひなさまの高砂

ね、水引をかけたものである。(今倉)に入りつつ」といいながら出す。ヌデン棒で或は二又大根で作って束は、夜中の頃にむっくと起き、およめごさまのまたぐらへ、ずくんずくは、カカモリをお膳にのせて出すとき「そもそもだいのこぼーと申する

婚礼のつくりもの

てゆく。(石鴨)たものにして、謡をうたいながらおぜんの上にのせて嫁さんの前にもったものにして、謡をうたいながらおぜんの上にのせて嫁さんの前にもっつくり、トウミギ(とうもろこし)のチンゲで毛をつけて、ちゃんとしシマダイのほかにダイノコボウという男のものをつくる。大根で実を

ダイノコボウ

イは、ダイダイ(代々)ダイノコ(大の男が)できることを意味して祈いで、大根をダイノオトコとかけてやるのだという。またダイコンのダー御祝儀のダイノコボウは、先ず大の男が生まれることが何よりのねが

念するものなのだという。(清水・石鴨)

婚礼のつくりもの

ゾッコミをした。(津久原) をもってきて、いくらでもくれるので酔っぱらうようだった。 そのかっこうが実におもしろので手をうって笑ったが、見に来た人に酒 つくったものを、腰をつかいながらヨメゴサンの前へもってゆくので、 て婚礼を見に行ったところ、大根でつくり、トーモロコシの毛を使って アナッポをあけるほどいいというので穴をあけて歩いたもんで、ノ いまから四十五年くらい前(大正末)、川内の方へしごと に 行ってい

結婚式のときのうたい

、げんかんつき

たかさごや、このうらふねにほをあげて

はやすみのえに とおくなるほの なみのあわじのしまかげや つきもろともにいでしほの つきにけり おきすぎて

一、のしすえの時 せしんゅうばんぜえの はこぶみちなり みたからのおんを いやましんに

ばんみんこれをしょかんす あづかるほどのきなりとて ほんちょにも いこくにも しこうのおんしゃくに しまだいをだす時

ちはこのたまをささげん

五、さかなをだすとき たからがしまから舟がくる あれみや

これのみくらいをおさめおき 舟にきんきくそをつみおきて

そもそも福神と申する神は ちくぶじまにて

えんめこうぶくろ くらまの福もえびすだいこく

七、高さご一のさかずき ちはこのたまをささげん あいおいのまつぞめでひき まつだいのためしにも

九、高さご 三のさかずき 八、高さご、二のさかずき あいおいのふうふとなるものを まつもろともにこのとしまで

四。さかずきをだすとき かげをたたえてまちいたり またかたもくるさかずきの きくをたたえてよもすがら つきのまゆにもともまつや しんようのいのほとりにて

十一、おいさかもり時 十二、こじさんのさけ出す時 このまつかぜにたびいして うれしかなや、いざさらば そもそもたいのこごと申するものは さつさつのこえぞたのしむ せんしゅうらくはたみをなで かみのつげをまちてみん かげもうそふくとらのとき それぞめたき もとにもくりとけがはえて あいおいのまつかぜ まんざいらくにはいのちをのぶ おさむるてにはじふくをいだき さすかいなにはあくまをはらい おみごろも さてばんぜえの それぞげんじょらくのまへ おたかもり

> 十三、親酒盃(数字は盃の順 十二、こじさんのさけ出す時 さかなさかなとのぞまれて ふかきちぎりはたのもしや あさゆうなるるたまのへの えだをつらねてもろともに つきのかつらのひかそう こころのそこもくもりなき ながきいのちをくみてしる まつのこえだにたかをそへ ちょしのくちへまつをさし ななつごがしゃくに出て ことりをとらせおさかなに

みかげをおがむあらたさよ 月すみよしの神あそび ありがたのようごや

げにさまざまのまいひめの

こえもすむなりすみのえの

みやこのはるにゆくべくは 神と君とのみちすぐに せかいはとはこれやらん まつかげもうつるなる

15 16 ... 諸親類

女仲人 13 2, 5, 14

待女房

人男仲8、

10

十四、三三九道蝶の道の事

女出見合

十五、島代づくり 松は弐本 柏老松三がい二かい

出見合 二番の盃道 ヨメ 三番の盃道 島台 出見合 モコ 女蝶付 女見合 モコ

亀

鶴 大根弐本

米は壱升

カハラケニつ

梅は壱本

竹は弐本

七ふし

女蝶付

島台

女螺付

一番の盃道

にてなみを書、海の形とするなり 目録進上 斗

なり。置物は造物なり。中に紙にてさいしき山をかざりけり付との…… 本是は大之男の子をもうくると吉事なり、島代、是は嫁聟はかりにて出 亀、是は海なり。前方金銀のカワラケ二枚、是は島神の故なり、大根二

相生の松、中に竹を、左に梅、

左右は鶴亀、

但シ鶴、

是は山なり。

シマダイ

御 御 菓 和 末 白 子 紙 広 毛

> 壱色 壱折

壱荷

御

肴

御家内喜多留

終道勝手ひらく

御毛ぬきはさみ

御

出見合

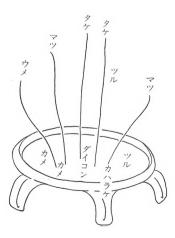
モコ

御 御 櫛 掛紛紅笄

御 御

> 壱束 壱対 壱折 フタツ 壱ト品ズツ 壱ト品ズツ

フタツ



○おたかもりを出す時 そもそもたいのこごともうするものは およめごさまのまたぐらへ かりたかかさをかぶりそめ もとにもくりとけがはいて つっといりふねにのりそめ 御す志除 足足 結 何 御 右目録之品々相違無千 御 御 右目録の品々幾久敷御受納被下度候 何 大正 但シ目録ウラ書之事 何 納金 帽小丈子袖長 年 何 村 駄 袋 帯 何 年 月 村 月 日 殿 秋万歳目出度受納仕り候 日 何 何 何 何 村 壱足 何円 壱本 壱ト筋 壱トツ 壱重 某 何 番 地 印 以

上

印

およめごさまのとればらがぼてれんといつぞごたんじょのせつをまつぞめでたきまつぞめでたきまつぞめでたさでは金銀のたまをつらねてしきたいのいおえのにしきやるりのとそしゃっこうのゆきけためのうらはしいけのみぎはのつるかめはほうらいさんもよそならずきみのめぐみぞありがたき

八幡大神 天照皇太神 春日大神 袋 頭 女神人 藏 [II] 待女房 回 Ī 島 川 代 待女房 ĮŒ, 男蝶一出 女蝶 一 男仲人 カ ラ カ

冬でも開け放しでやるからこうしたこともなくなった。(馬立)は酒を御馳走した。庭に酒をもっていって飲んでもらった。今は部屋はノゾキコミ 昔は式のとき若衆がノゾキコミをやったもので、彼等に

若い衆は招かれるが同級生位である。(居館)

ノゾッコミ

いってやるようになった。 ることはなかった。しまいには障子をおっ 外っ て「よく見てくれ」とることはなかった。しまいには障子をおっ 外っ て「よく見たが、乱暴すふつうは、障子にノゾッコミの穴をあけることはよくしたが、乱暴す馬立では若い衆に酒を出して乱暴をしないようにする。

御祝儀の酒より青年がのんだ酒の方が多かったようだ。(石鴨)

ノゾッコミのもめごと

鳴)のけるとは何ごとだ」といい出し、ひともんちゃくをし たという。(石つけるとは何ごとだ」ということになり、「ひ とんちのヨメゴにねだんをに向かって「ひとんちのヨメゴをただで見せねえ」と いっ たところ、に向かって「ひとんちのヨメゴをただで見せねえ」と いっ たところ、上藤生の人の御祝儀のとき、若宮のじいさんが仲人をして、仲人だか

氏神まいり

ョメゴは来るとすぐに氏神さまに連れて行ってお参りして 来る。(石

ヨメビロウ(嫁披電

ことだった。(石鴨)がら、嫁さんはしたくをしてシリッパショリをして歩くのだから大変なから、嫁さんはしたくをしてシリッパショリをして歩くのだから大変なンヅクリの方から高見まで、ウンマミチは歩かなかったがみんな歩いた婚礼の翌日、姑さんがつれて村中をあいさつにまわる。馬立からコイ

の夜にやる家が多い。(馬立)水引でしばってもっていく。今は組内の人に対して、ザシキビロウを式組内をむこ方のシュウトバアサンが連れて廻る。このとき半紙一帖、

車で回った。(袁旨)て回る。半紙を二帖ぐらい包んで配る。その後、近場の親戚回りを人力て回る。半紙を二帖ぐらい包んで配る。その後、近場の親戚回りを人力くと、嫁は菩提寺にお参りに行く。それから組合を一軒一軒、姑が連れ、微儀の翌朝、組合の人が来て跡かたづけをしてくれる。一通りかたづ

困ってしまう。(猿石) 事を手伝う。ようすがわからないので、聟がリードしてくれないと嫁は**式の翌日** 翌朝はその家の嫁として、仏様や屋敷稲荷を拝み、勝手仕

石)

一名の大学を表示して、おいまでは、これが一般ので、原物などお土産にもって行った。また三日目はイチゲンに行かなめで、履物などお土産にもって行ったが、これが両親のつき合いの初った。このとき両親がつきそって行ったが、これが両親のつき合いの初った。ユのとき両親がつきそって行ったが、の実家に手土産をもって行った。メリカーを表示を表示で行ったが、のというでは、

してからならなら泊ってよい。(石鴨)く、ミツメには泊れずに帰るわけだが、オジンギをしてごちそうさまをく、ミツメには泊れずに帰るわけだが、オジンギをしてごちそうさまを婚礼の三日目がミツメで、仲人と嫁ムコ、姑ばあさんが くれ 方 へ行

泊ってくる。五ツメ(五日め)に二人で戻る。(猿石) 里帰り 祝儀のあと三日めを三ツメといい、嫁は聟と二人で里へ帰り

姑に白歯を見せるものでないといい自分で染める。(大門) かねつけ祝い 嫁に行き里帰りから帰る三日目「ミツメ」に行なう。

もいたが、大正初期までのことである。(馬立) オハグロ 山のヤシヤの実で、針くずを使って作った。まゆをそる人

四その他

年以上贈っていた。戦後はそんなにやらなくなった。(猿石)仲 人 礼 「仲人三年」といって、仲 人にはお中元やお歳暮などを三

仲人礼をこぎってはかわいそうである。(猿石)歳暮。中元などに贈る。一姫二太郎の二人ぐらいは祝ってやる。だから歳春。中元などに贈る。一姫二太郎の二人ぐらいは祝ってやる。だから

仲人との交際

おつきあいをした。 んぎに行かなくともよいといわれているが、近くでもあればそれ以上の 八朔のときに、わずかでもおつかいものをもって行った。三年たてばじ 仲人のところには年に三回じんぎ(あいさつ)に行った。正月・三月

として持ってくる。(馬立) 嫁のお土産 嫁にくるときむこ方の家族に、下駄、足袋などを手土産

るとお歯黒をぬった。(猿石) 嫁の髪型 大正年間までは、娘はいちょう返しや桃割れ髪に結って 結婚すると丸まげに結った。 また、 明治三十年ごろまでは、 嫁に来

れないと一人前の嫁でないといわれた。(猿石) は、五人とか七人とかの家族のお給仕をしながら、 嫁の食事 家族の食事のお給仕をしてから、あとで嫁が食べた。 家族と同じに食べら もと

なかったから、夜なべにも機を織っていた。大正七、八年に自家発電が りやかましくいわれなかった。ハタシの三、四台もはいっていない家は 田発電所で電灯をつけるようになり、夜なべもランプから電灯にかわっ 五、六軒あり、桐生川の水で水車やタービンを回した。大正十三年に梅 (猿石) ハタ場で年中忙しかったから、嫁も機織りするので、 あま

いって出したという。 の役 昔は大水などで危い作業の所へは 「聟出ろ、 聟出ろ」と

コ の酒

ムコをもらうと、若い衆づきあいというので酒をもってゆく。 (石鴨)

聟だまし 薬餅のことを「聟だまし」という。 モチ粟の餅を聟に食わ

があればいいところであった。 しもある。ふるしきずつみ(ふるしきよめごのこと)はあまりなかった 大尽の家でないと嫁に行くときに着物を沢山もたせなかった。 たんすの中はからっぽだったというはな 着換え

> が、明治のころはひどかったようである。いい家のものが、 長

持をもって行った。 特別の持参金や財産として山林など持ってくる嫁もいたが

般には小遣いくらしか持って来ない。

合が多い。 た。これを持参金つきという。 嫁の持参金 嫁に行く場合、 (井戸谷戸) 地所を持って行く場合もあるが、 満足でないものは財産をもって嫁に行

嫁の里がえり

挙式後三日目(ミツメ)に里がえりをする。

は泊って来た。これは、身上が中から上でないとやらなかったようだ。 三月(この辺では四月)のお節供には、初嫁は里がえりをした。 一月十五日 嫁のご年始日、よめが実家へお客に行った。一晩か二晩

ときはむこも一緒に行き、 五月の節供のときは、 かたい家で里帰りをさせた。 ひしもちをもっていった。

げに行く場合もあった。 八月十五日が盆だが、身内のものがなくなっている場合に、 線香をあ

た。 八朔には嫁に来たてのころ、 赤飯にしょうがをつけて里 が えりを

春秋の彼岸には、場合によると行く程度。

嫁の年始 正月四日に嫁は里へ年始に行く。四 日 に行けないと、

五・六日に行く。(猿石

と二人で里へお客に行き、二晩くらいゆっくりと泊ってくる。 嫁の初節供 嫁に来て初めての節供には、赤飯などをみやげにして聟

嫁が里へ帰れる日

しゅうと次第できまってはいなかった。

節 正 三月三日、赤飯の上に南天の葉を副えた重箱へ入れて持って いった。

Ŧi. 月 節供はあまり帰らず。

八 朔 今は九月一日。赤飯にショウがを副えて。

歳 暮 シオビキ持参。(馬立)

よめ・むこの里がえり

一月は七日に里がえりした。赤飯をもっていった。よめに来て、二・初よめ(初むこ)は、五節供には必ず里がえりをさせた。

三月三日、五月五日の節供にもかえった。三年はこの日里がえりをした。八日にかえった。

いそがしくなるので、里へも行けないということである。赤飯をもって八朔は、よめ、むこのなきわかれという。このあとしばらく農作業が七月二十日ごろ、祗園に里がえりをした。土用に入るころである。

年ぐらい。(皆沢) このほかに、八月八日にも里がえりをした。これはよめに来て二・三

姑のあるうちは嫁とよばれた。

語) に来てから四十年も辛抱しなければならないと い う こ と で ある。(橋に来てから四十年も辛抱しなければならないと い うこ と で ある。(橋ら。また、むこ六十でしゅうとになるということばもあった。大体むこ庭にそまらないといわれた。嫁なら三年、むこなら十年たてば安心とい嫁三年、むこ十年という。その間は、その家の人になれない。その家族

るようになったというはなしもある。(橋詰)れることにいう。乳の出ない嫁も、里へ帰ってのんびりすれば、乳が出れることにいう。嫁は苦労していたので、里へかえると沢山食べら

婚姻関係用語

あってこっちむこに行って、出てくる場合にもいう。(橋詰)ていないので、おどろいて、いやになってかえった 場合 など。また、は、たとえば、一晩泊って翌朝おきてみたら、しゅうとが草刈りに行っは、たとえば、一晩泊って翌朝おきてみたら、しゅうとが草刈りに行ってリシキヨメゴ 何ももたずに嫁ぐもの、この辺には例がない。

合はセエフロヨメゴという。 出るの入るのとさわぎをして出たり入ったりしたムコのこと、嫁の場

間というものだ。きておちついちゃったというのがふつうで、これまでが嫁の面倒見の期きておちついちゃったというのがふつうで、これまでが嫁の面倒見の期トリでまあまあといってるうちに情がうつっていついたり、子どもがでここではこうしたさわぎは多少あっても別れちゃった人もなく、ナカ

一晩しかいなかったムコはイチヤムコという。(石鴨

行ったり、さまざまだった。(猿石) 慰藉料などは無かった。子は里子に出したり、連れて行ったり、置いて変だった。不縁で出て行く時は、嫁が持参してきた物を持って行くが、離 婚 離婚になるのは親対嫁の原因が多かった。また、小姑が大

家の男は、ベベズキンかぶっていると悪口いわれた。(馬立)カカアデンカ 男で女の尻にしかれている。いわゆるカカアデンカのオトコオンナ いつまでも結婚しない女のこと。(馬立)

かないということ。(石鴨)

カカアデンカニ二代ナシといって、どんなカカア天下でも二代とは続

五 葬 制

死の予兆と死

いう。(馬立) えに来た」「じいさんがここに来ている」 などと、 夢中で先祖のことをえに来た」「じいさんがここに来ている」 などと、 夢中で先祖のことを予 兆 烏鳴きが悪いとか人魂がとんだとかいう。 「死ん だ 人が迎

ノノにいう。いせいのいいカラス鳴きは、子どもができる前知らせで、サンシ、サカラスの鳴き声は前知らせになるが、吉凶ともにある。

人が死ぬときは、女ならばナガシ(お勝手)に来る。来たときには茶人が死ぬというときの鳴き方は、「シニ、シニ」と鳴く。(清水)

男なら仏だんに来るという。

わんの音がするという

お寺さまに来るということもいわれる。

だという。トダマがとぶときは魂がとぶので人が死ぬという。赤いタマはカネダマトダマがとぶときは魂がとぶので人が死ぬという。赤いタマはカネダマヒトダマはある。青いのがヒトダマで、ノロ(尾)をひいており、ヒ

シニガラスが鳴くときは「シニシニ」と鳴く。(清水)

て墓地へ飛んで行った。火の玉を見ると出世しないという。 人 槐 昔は火の玉をよく見た。青いノロ(尾)を一間以上も引い

る。ふつう、寺や墓地へ向って行く。(猿石)と行くのもあり、ふらふらするのもある。夕方や夜中の二時ごろにも出と行くのもあり、ぶらふらするのもある。夕方や夜中の二時ごろにも出に出るものや、死んだ時間に見えるものがある。ノロシを引いて、すっ人魂は他人でないと見えないで、家人は見られない。死ぬ一、二日前

魂よび

ずにそばへ来て名を呼んでみる。年老りは静かに死んだというが、子どもたちはやっぱりあきらめ切れ

という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(清水)という。(

に上ってヨビツケースをした(馬立)ョビツケース、人が死にそうになると耳もとで大声で呼んだり、屋根

コオリトリ

の水をもって行って病人にくれた(清水)いて、まわりで拝みながらみんで水をはじいてびんの中に水を入れ、こ病人のぐあいが悪いときコオリ(こり)をとった。びんを川の中にお

お百度まいり

病人が医者に見はなされてあぶないという時に、親戚のものとか近所

穴) た。昼間でも夜でも、病人が大変なときに、お百度まいりを し た。(皆た。昼間でも夜でも、病人が大変なときに、お百度まいりを し た。(皆復して、病気の平癒を祈った。やしろのまわりをまわった こ と もあっの人たちが、神社(八幡さま)の鳥居のところから拝殿のところまで往

りをよくやった。そこの観音様にお参りする。(猿石) 鷹林寺の前の住職の時には、近親者が寄って、病人のためにお百度参

―石で数とりをして幾度も往来する―をした。(馬立) 人が死にそうになると、身内の者や組内の者が大杉神社にお百度詣

似かけ

回といった。で、数をおぼえるために川原から小石を拾って来た。それが終えると百で、数をおぼえるために川原から小石を拾って来た。それが終えると百天神さまにお百度参りをした。口をゆすいで来て は 天 神 さまを拝ん

てもって行って拝んだ。(清水)(戦時中だけのことで、戦勝を祈願するために熱心にやった。紙に書い)

して末期の水をとらせる。(猿石) 末 期 臨終の時には、近親者が綿に水をふくませて口びるを濡ら

にフタシロという。(馬立) ブツヨケ 組内の者が集ったとき、神様の前に半紙をはる。ブツヨケ

耳ふさぎ

ことをしたという。 話だけ聞いたことでは、マグソ(馬糞)を拾って来て耳へふたをする

石をへがして、上と下をとりかえればいいという。(清水)

の上にのせる。(馬立) ねせかえる。これをネセカエという。そして刃物(マモノヨケ)を布団ねせかえる。これをネセカエという。そして刃物(マモノヨケ)を布団

(猿石) 死者は北向きに寝せ替えて、線香や水、枕飯、枕だんご等を供える。

死者を北向きに寝せると、「一生北向きにした」 と いうのでいいのだ

わって来るので、 という。北は鬼門というが、新しく北から始まるというので、 もとへ帰すことになるからである。 北からま

死者は北枕にして刀をのせる。(鍋足)

まくらめし

べていた茶わんにもってやる。 たてて小さな鍋をつるし米はとがずに煮る。煮えると、死者が生前に食 フタオヤ(両親)のある人が煮てくれるという。木と竹で三本の棒を

このとき使った鍋は、一週間は使わない。

て、箸を一本立てて死者に供える。(猿石) 釜はあとでは使わずに棄てる。枕飯は生前使っていた椀に 山 盛 り にし に石を組んで茶椀一杯分の白米をとがずに土釜か鍋に入れてたく。この 死者の家に組の者が寄って枕飯をたく。必ず他人がやるもので、 人が死ぬと、近隣の人が、米をとがずに炊いて死人に上げる。(居館) 庭先

る。そこで誰が告げに行き、誰が棺を作るかなど相談する。(鍋足) 人が亡くなると、まず組長さんに話す。 組合の方が皆 あつ まってく

たりして汚されないようにする。 死者の上に古なたとか、かまなどをのせておく。 死者の上に猫が上っ

ときに空から舞いおりて来て連れて行ってしまうことがあるので、マモ ノを防ぐためになたなどをおく。 また死んだ人を連れてゆくマモノがいて、夕立のするような雷の鳴る

たという。(清水) 墓地へ行くので担いでいた棺が、急に軽くなってしまったこともあっ

ばないようにするという。 死体の上に刀や鎌などの刃物を抜いて乗せておく。 (潰石) 猫が死体の上を飛

ンゴという。(馬立) マクラダンゴ 死者にはチョコダンゴ(とがない米をすりばちですっ ダンゴにこねて作る)とマルで一組として供える。 これをマクラダ

> 枕めしは墓場へもってゆき埋けた上にお膳にのせておく。 ませて小さな皿形にした上に一つずつ団子をのせて、計六個作る。 これも玄米で粉をひいて、団子をつくる。オチョコといった団子を凹

団子や、めしをたいた灰はサン俵にのせて、幣束を神官に作ってもら (南蔵院でも作ってくれる)灰と一緒にのせて三本辻へおいてくる。

(居館)

作り、庭で火を燃やし三徳に鍋をかけてゆで、椀に盛る。死者の枕もと に供える。(猿石) 葬式の前に組の人が寄って、玄米を石臼でひいた粉で枕だんごを三個

枕めし、チョコダンゴ

を取る。オツケといっても塩気のない水である。むかしは、ハシゴの桟 る。米はとがないで炊くので真黒であった。水のある内に、オツケの汁 ダンゴ(三組―六つ―)を作るのに使う。チョコダンゴは飯と一緒に煮 は家族でなく他人が炊いてやる。(鍋足) につるでナベを結わえて枕めしを炊いた。その火は消して、サンダワラ に、枕めしをよそったシャモジと一緒にのせて、三本辻におく。枕めし 故人の使用していた茶碗に一杯の米を、飯にしたり、粉にしてチョコ

カザリダンゴ

コである。このダンゴは欠いて、位牌と一緒に縁者に配る。 七十二コ作る。一串に六ツずつさし、その六本が対になるから七十二

り、しゃくしをのせ、清めのお祓いしたオンベを立てて、近くの三本辻 と鳴らし、女ならお勝手を鳴らすという。(猿石) へ出しておく。今でも、葬式の前に組の人が用意してくれる。(猿石) 寺への通知 組合ばらい 死者のあった家では枕飯をたいた灰や炭を サン 俵 に盛 人が死ぬとお寺に知らせがある。男なら本堂をカタカタ

十三仏掛軸をもってくる。カネとチーンは坊さん が 持っ て くる。 寺には道中寄りよい人が行って知らせる。寺からジャンボン・太鼓

頭である。友引の日、トラの日は避ける。(馬立 人が死ぬと組合の者が集って、葬儀の方法について協議する。死の通 組合の人がヒトに行くといって二人一組で軽装で出る。 伝達は口

めを出し、ススギをもって来て上げ、小遣をくれ(今なら五百円位)飯施主の家で行く家をきめてもらい、必ず二人でゆく。先方の家では清 を出し酒も出す。(居館

誰が、いつ死んでいつ葬式を出すということをいう。施主からあずかっ て弁当銭を持ってゆく。 二人で行く。まちがいないように一人が補助で、特別の口上はない。

か出す。現在は三百円から五百円くらいを出している。 飛駒の方では、来てもらった家の方で御苦労賃とでもいうのかいくら 時間になればお昼を出す。 (清水)

どはない。(猿石) はいかない。車で回るようになったが、十五軒から 二十 軒くらいも回 施主の希望等を近親者に知らせるために使いに出る。電話を使うわけに 組合の人が二人一組になって、亡くなった日や葬式の日取り、その他 先方ではお茶を出すのが、 仁義になっているが、その他の心付けな

れがすむとすぐ風呂に入って浄めた。 をあげる。これはお祓いの意味で、コンパク(魂)を祓うといった。こ はずして下に流した。 薄着で腕をまくってやる。お湯を用いるが、使った湯はナンドの板を そして 樽を手や足で転がし合って、ワーツと声

なお湯を入れた一斗樽は、 湯灌に用いた布と一緒 に、墓場で燃した。

湯かんのことはガンバコに納めるという。

けて死んだ人をふいてくれて棺に入れる。 湯かんは身内の人がやり、昔は上半身はだかで、荒なわで片側だけ カン

もってくれている人がキョメてくれてから家に入る。 てきて、塩を使い、さかさみずで手を洗って ト ボ ウ にヘイソクと塩 湯かんがすむと、酒を一ぱいのんでから、ナンドから外へ出てまわ

今ははだかにはならない。

き下半身を女がふく。死者が女の時は女がおもにふいてやる。終ると清 めに酒を吹つかけてやり、着せ替える。(猿石 腰巻姿になって死者の身体を湯でふいて清めてやる。 棺に入れる前に、近親者が寄って、線香を立て男はふんどし姿、女は 上半身を男がふ

すっかり裸にして、頭から水をかけて洗ってやた。

けない。そのままにしておく。(毛をするのは納棺後である) 女の人は髪の毛をすって丸坊主にした。すり落した毛はあつめ てはい

の入った樽を使った。(鍋足) 湯灌した道具は、墓のむこうに持っていって捨ててしまう。 ショ 一ウ油

く時は裸足でいった。 洗い(勿論自分の身体も清め) ルをつかってふく程度になった。昔は湯灌の桶は桐生川へもって行って 昔は男は六尺ふんどし一本になって、死者は素裸にし、 て洗い清めた。今では上着をとる位で簡単にふくか、脱脂綿でアルコー 湯灌の事を納棺ともいう。一緒にするので混同したものと思われる。 桶は桶ごと流してしまった。 水を充分にかけ 人は河へゆ

眼鏡、 十銭と金を入れてやった。道中の小遣銭だという。そのほか大人の場合 そしてヮラジは新らしく買ってきてはかせる。また昔は一厘銭、五銭、 ビラを着せて、足には白足袋を右左逆にはかせ、 納棺は葬儀の前日行う。死者には新らしく作ったサラシのキョウカタ 仏檀のようにして白布をかけておく。(馬立) 煙草を、子供の場合玩具を入れてやった。棺はナンドからデイに コハゼはかけてやる。

もとは立棺が多かった。腕と足は予め組ませておき、

用意してくれた血脈を入れ、 らせる。 動かないように小さい座布団を敷いてやる。 花なども入れてやる。 坊さんが

手伝わない。)死者の手には手甲、 経かたびらは肉身の者が晒し木綿を使って。麻の糸で縫いつ払いに縫っ 銭を持たせた。 て作る。 にはかせる。 (この時に身ごもっている者は腹の子に影響するというので、 死者にはゆかたを左前に着せ、 じゅずを持たせ、 男には筆と墨、 足には脚絆、 上に経かたびらを着せ 女には針を持たせ、 たび。 わらじを左右逆 六文 る。

ンにみはからってやる。はさみは使うが、かえしばりはしない。 キョウカタビラをつくるときは、 たびらはさらしを買ってきて、 身内の者、 ものさしを使わないでエエカラカ 親せきの者がみんなで X

アクマッパライのマクリダシ

勇)

くれた人たちがみんなで大声を出してあ 丸いものなら、 悪いものはみんな送り出してしまう。 ばれながらまくり出し、わあわあやって 使うことが多い。 陰気なしめっぽい空気を入れかえるもの でふんがいちゃうものだから古いかごを でも何でもいいが、これを湯かんして 仏を棺に納めると座敷に出してから、 丸いものとはいっても、後で使わねえ アクマッパライになるのだろう。 タル、ウス、メカイ、 (清水)

具

(撮

道

沢)

列用の道具をそろえ ろうそく立てなど行 旗・たいまつ・杖

棺

(皆

る。

(猿石)

部落共有、

関

影



葬式のあと座敷にころがすかご 上野 (清水) (撮影



地では通夜はしない。 トラの日にぶっつくと二日となる。 普通 は 日 である。 (馬立)

出す。交替で起きている処もある。最近は大体半夜位で終る。 死者の近親は遺骸の近くで夜おきている。 今は清めを出 又すし (居館 位.

たので、

それを使うようになった。 小屋に保管して置いた。

昼食を本膳として、

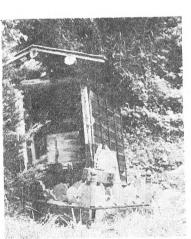
+

時から一

時ごろまでに

一同

門が食事



(撮影 関口正巳) 保管(皆沢)

1,

もとに集まって、

線

1

近親者が死者の

る。子供が大勢いな の話などをして うに

一晩中起さて

昔 香の煙が絶えない やかでないの いと、枕もとがにぎ

(猿石)

で

牌・鐘・太鼓・にょ 人がする。 が、組合で持ってい の人が借りてくる うはち・竜頭・四方 ている所もある。 て、堂などに保管し ふつうは寺から組 飾り付けは組合の 棺 位

口正巳)

皆沢部落では棺を

三年ほど前から石雲寺で台を新調し (皆沢) 入れる輿などの道具

をすませる。その後、出棺となる。(猿石

出棺

る。(馬立) おいで、 「馬ってきてからのオキョメのお膳の準備をすれている。は、 「たってきてからのオキョメのお膳の準備をすれての出たあと、 「非の人で、 近親者は棺のそばについている。 組棺を運ぶのはトコホリの人で、 近親者は棺のそばについている。 「病は二人で尻合せになって左繩に結って、十三尋半、これでしばる。

ると出棺になる。(居館) 鉦を下げておいて、お経の始る時、中頃。又終った時叩く。これがな

手がった

に、かついで行った人が、犬ハジキをする。のぐ。繩を切って穴に棺を落し、身近な人から順に土をかける。最後のぐ。繩を切って穴に棺を落し、身近な人から順に土をかける。最に三回半まわ棺に繩をかけて縁側から出す。庭でアナマワリをやる。左に三回半まわ店園寺から坊さんがきておがんでくれる。縁者が石で棺の釘を打つ。

そのまわりに泥がくずれないようにする。翌日、親戚の人が墓ナオシといって墓を飾ってやる。サオ石をのせ、

参りをし、塔婆をあげる。(鍋足)にお参りする。四十九日には坊さんがきておがむ。百ヵ日には縁者が墓墓を作るとき使った道具は一週間目にもってくる。その後、七日七日

蓋の廻りを左廻りに三回り半廻る。(猿石)(男の近親者が棺付きになる)の順に並んで行列を組む。行列は庭の天(男の近親者が棺付きになる)の順に並んで行列を組む。行列は庭の天のせ施主の妻が持つ)・位牌(施主が持つ)・番炉(女が持つ)・たいまつ・杖のせ施主の妻が持つ)・位隣(施主が持つ)・番原(女が持つ)・たいまつ・杖のとまる。。。(銀合の者がたたく)・籠(銭出棺の行列の役割りは発表される。鐘(組合の者がたたく)・籠(銭

願をとく

き、それを桐生川に流した。(居館)病人がねている間、願かけした神社や寺院の名を扇にかいて、要をぬ族などが願をとくために、死者の着物をもって後に投げる。(清水)願をかけておいてうまくゆかず、そのまま死んじゃったときには、家

役

(清水) で不都合はない。イハイモチはあととり息子のことをいう。てくれるので不都合はない。イハイモチはあととり息子のことを話しておいないて来た人から順に、おまえさんはこれこれということを話しておいる役を紙に書き出すことはない。来てくれた人には世話役の人が書いて

葬列の服装

てきた。(猿石) 白むくの着物で、黒の元結いで髪を結った。戦後、黒むくの着物に変っ白むくの着物で、黒の元結いで髪を結った。戦後、黒むくの着物に変っ合むくの着物で、紋付き袴に編み笠をかぶり、わらぞうりをはいた。

ジ)にこれをかける。(居館) 今は黒の紋付。位牌持ちは刀をさし、編笠をかぶり、肩又は頂(ウナー 音は白無垢・つぶし島田に髪を結い袖をかぶって行った。(居館)

穴掘

(一升以下が多い)出す。あまり出すと酔って掘れなくなる。穴掘りにいという。穴は棺に合せて掘る。掘っている間に、キョメの酒を一升位あり、そこに備えてあるものを用いるが、穴のホリオキをするものでな葬式の日に隣の組合がトコホリの役をする。共同墓地に小さい小屋が

のまま置 使った鎌・その他の道具類は一週間は使うものでないという。 いて、ハカマイリに行ったとき持ってくる。 墓場にそ

みながら掘る。古い骨が出るので、正気では掘れない。唐ぐわの柄を短 る。墓地にお神酒・ゴマメ・キンピラなどの三つものを供えて清め、 かかって、深さ八尺から一丈ほどの穴を掘り、葬式 まで に間に合わ 落単位で、部落内の若い者がくじ引きで決めて当番になる。 く詰めて掘り、石箕で土を上げる。唐ぐわなどの使った道具は、 週間使わずに置く。(猿石) 以前は穴掘り組合があって、 よその組合が掘ってくれた。 四人で一日 今では、 その後 飲 中 部

くる人、ショーコーバナ、ハナカゴをつくる人を除いてやった。 穴ほりは組合の人の中で、 ッゲに行かない人たちのしごとで、 棺をつ

ってそのまんなかにおいたのが正式で、合せて六文の地代を払ったわけ 穴を掘るときは、「地所を買う」といって六文もってセキトウの所に 掘る穴の四隅に四文を並べ、残りの二文を地代 でありますとい

程以前謂雲寺の和尚が話してくれた。 して、曳きまわす習慣がある。ごろごろ音を立ててまわす。 梅田町五丁目、 山地辺りでは葬式の出たあと、 座敷の上を臼をころが この事は余

使っていたが、今は寺に揃っているのを借りる。 地 皆沢には個人墓地の人はいない。 (皆沢) 共同の棺 道具があって

畑の真中に墓地があると、借金のカタに取られないという。

出してお寺に埋める。(馬立) 墓地は組合の共同墓地、 掃除は別個に行なう。 村への新入者は、金を

多い。棺は組合の人が作る。 法 この地方は土葬が多い。 (馬立) 昔は坐棺であっ たが、 今は寝棺が

般に北向きに埋ける。 穴の深さはこの辺では五尺位が 般である。

埋葬は、 見送りに行った人全部が、 握りでもかける。 あとは 1 コ 木



地 関 П 正 巳) 墓の廻りにはオオカミヨケ は名旗と共にお膳をおく。

の真上に立てる。

そこに

墓標は、 0

埋葬したらすぐ

から

埋

8

墓 (撮影 竹を曲げたものを立てる。 或はイヌハジキといって、 この竹は棺をかつぐのに用 である。(馬立) いた竹を割って作っ 野辺送り 葬列が墓

たもの

着くと、荒縄でしばった棺 は遺体に乗せて置いた刃物 を穴の中に吊りおろす。 施主が伐って縁切りを 地

する。 矢来を組み、 へこむので、土はあまり入れないでおく。 埋葬の帰途は近路するなという。 近親者が一握りずつ泥を入れてから、 魔除けに竹を曲げてハジキを作り、墓標を立てる。 必ず往きの路をかえれといれた。 組の人が墓の廻りに青竹で竹 土をかけて埋める。 (猿石) あとで

七日の経 七日の経 をあげてくれる。 墓地へ出ている間に、 (猿石) 家の奥に位牌を飾り付け、 坊さんが

臼は別に使わない。 を振りかけて清める。 墓地から野帰りして、家につくと、 清めてから家にはいる。(猿石 水で手を洗い、 組合の人におはらいしてもらう。 入口 の所に用意

の時には一膳しか食べないで出る)。 野帰りして家に着くと「七日の膳」が用意され 膳には精進物・野菜に酒が出て、 る。

施主が接待してがっしり食べてもらう。(猿石)

オキヨッ

埋葬が終ると行ったときと同じ道を帰ってくる。家に着くとトボグチで波の花でオハライをする。そこには被う人がついている。次でオキョスは両親のある男の人と女の人とでやる。男が塩をまいて神だなにかけた紙をはいできよめ、女はいろりに灰をかけ、ミッピシャク水をにかけた紙をはいできよめ、女はいろりに灰をかけ、ミッピシャク水をにかけた紙をはいできよめ、女はいろりに灰をかけ、ミッピシャク水をにかけた紙をはいできよめ、女はいろりに灰をかけ、ミッピシャク水をにかけた紙をはいできよめ、女はいろりに灰をかけ、ミッピシャク水をにかけた紙をはいできよめ、女はいろりに灰をかけ、ミッピシャク水をにかけた紙をはいできよめ、女はいろりに灰をかけ、まずに着くとトボグチとなる。家に着くとトボグチとなる。家に着くとトボグチとなられる。

チを切ってからつけなおすことをした。電気が入ってからもスイッきにはランプの火も一度消してつけ直した。電気が入ってからもスイッを男の人に頼んで上げてもらい、その後みんなにも出してやる。このととりかえてきれいな水を入れて湯をわかし、新しく入れたお茶と、酒とこうすると女の方は、ほかのもので新しく火をおこし、鉄びんの水もこうすると女の方は、ほかのもので新しく火をおこし、鉄びんの水も

ったから燗しとくれ」ということになる。(清水)キョメノ酒は、冷酒を最初出し、これがひと通りすむと「キョメが通

オハラィ

い。(鍋足) て、オヒネリに入った金をおいてくる。金は子供達に つ か わ せてもよの金を各家でだす。最後の家の人がサンダワラのところにヘイソクを立の金を各家でだす。最後の家の人がサンダワラのところにヘイソクを幸

5)・小さいダンゴを作り、葬式の晩、念仏に き て く れ た 人にだす。(鍋・小さいダンゴを作り、葬式の晩、念仏に き て く れ た 人にだす。(鍋

香典返一

葬式の当日にマンジュウとお茶を返す。(鍋足)

念仏

を唱え、この間に一回休んでお茶をのむ。合の人や残っている客が念仏を唱える。ナムアミダブツと十三仏の念仏十三仏の掛図をかけて用意しておき、オキョメが済んで客が帰ると、組埋葬に行っている間に、留守の人は新に祭 壇 を 作 り、供物。位牌、

て三本辻におく。(馬立)

さずにいられるのだといい、何回でもとりかえる。(清水)ので、この水が流れるほどくれてやると仏はこれをのんでのどをかわかって、ネンブツガシ、ネンブツダマが出る。この間近親者は、念仏を聞って、ネンブツガシ、ネンブツダマが出る。この間近親者は、念仏を聞った。本人がまちがえないように回数をかぞえてからやる。中休みがあれ三仏と南無阿弥陀仏をやる。七へんげえし十六べんとかいって、カー三仏と南無阿弥陀仏をやる。七へんげえし十六べんとかいって、カー三仏と南無阿弥陀仏をやる。七へんげえし十六べんとかいって、カー

れを位牌の両がわに供える。(猿石)上に付ける。高さ一尺五寸ほどで、わくに生のうどんをかけておく。こ上に付ける。高さ一尺五寸ほどで、わくに生のうどんをかけておく。こしたものを六本作り、「六甲」という膳にまるく立てて、 色紙の飾りを十三仏の飾りだんご 大きなだんごを三十六個丸め、六個ずつ串にさ

石を中央に印しとして立て、前に膳を置く。(猿石)を取り払い、川原から川石を拾ってきて四角に並べて表面を飾り、サオを取り払い、川原から川石を拾ってきて四角に並べて表面を飾り、サオーを、直してきれいに整える。 竹矢来

埋葬の翌日に、近親者がするハカナオシのとき、四角に土を高めに盛

って埋めた上に、サゴ石 (川石)をおく。(馬立)

死後の供養その他

いという。(猿石) おき、七日間家の者がひしゃくで水をかける。いつもしめっておればよ 七日ざらし 人が亡くなると、死者の着物を日かげに北向きに掛けて

にむけて干す。毎朝水をヒシャクでかける。七日経ったらし まって お 着ていたジュバン(下着)を日のあたらないところにいって、 体の弱い人にそれを着せると丈夫になるという。(鍋足) 、家の方

る。 回唱える。組合の人が念仏を唱える間、親族は念仏しない で 水 をあげ 組合念仏をあげてくれる。念仏は十三仏を十三回、南無阿弥陀仏を十三 あと念仏 鐘をたたきながら、水を取り替える所作をくり返す。 野辺送りのあと、七日の膳がすむと、組合の人が集まって (猿石)

七日 七日めに近親者が寄って墓参りをする。

|葬後七日毎にお詣りする。四十九日までだが、今は三十五日であげ

親類はお墓参りをする。 四十九日を忌明けと云ったが、今では三十五日が多く、僧をたのんで おはぎを作る。(居館)

人の魂は死後四十九日は屋根棟にとまっている。四十九日に棚上げを

墓地に七本木を立てる。これで塔婆を立てたことにする。

が仏になる。(猿石) 位牌を床の間から、 仏壇に移して細め、餅をついて供える。死者の霊

四十九日まで

ダンゴをつくり、花をもっていって線香をたてる。七本木は墓場にもっ を軒下にかけ、これに毎日水をかける。七日供養は、一週間一週間にオ 四十九日がすむまでは仏は家にいるのだといって、 仏の着ていた着物

> 行くごとに一本ずつもって行く人もいる。(清水) て行って一回ごとにとってかえしてくる。これを家においといて、

る。 (猿石) か 日 近親者や組合を呼んで供養する。坊さんが来て念仏をあげ

に忌中と書いた札を貼るが、門牌は立てない。(猿石) 忌 不幸のあった家では、神棚に白紙を貼りシメも張る。 入口

居をくぐらない。これは四十九日間、親の死んだ場合は 百 ブクをきるという。死者のある家では神棚に半紙を下げる。 カ日 神社の鳥

死後四十九日から百かん日までは、ブクといって家族は神様に供え物

を上げない。

(猿石)

三回忌で終る。(猿石) 忌・二十七回忌・三十三回忌・五十回忌・百回忌とある。 忌 一回忌・三回忌・七回忌・十三回忌・十七回忌・二十三回 ふつうは二十

50 来るが、話がなければ行かないから、他の地区にくらべると雑だとい 一週忌 坊さんを頼んで拝んでもらう。 ふつうは一周忌ぐらいは

さんも頼まずに、彼岸に塔婆をたてるていど。(清水) 三年忌、七年忌、人を招ぶのは略すことが多く、近親だけでやる。 十三年、二十三年、二十七年、三十三年はそれぞれ年忌になるが、 坊

年忌はどこでもやるが、それ以後は家によってちがう。

塔婆を切ってたてる。このときまでにセキトウがたたねえと「これで供 三十三年の供養には、杉の葉っぱのついている――シンのついている

養してもらえねえ」といって仏が泣くという。 これから後は先祖さまということになる。(清水)

三十三年忌のシントウバを立てて供養すると、これで縁切りとなり神

様となる。(馬立)

まったことになる。(猿石)のいた心とう柱を墓に立てる。自然に帰るという意 味。 極 楽 浄土に納死後三十三年めに年忌で供養する。「さかさ塔婆」として、 杉の葉の

位はい

納めておく。と、紙に書いたいはいをつけて渡すので、これをもらってきて仏だんにと、紙に書いたいはいをつけて渡すので、これをもらってきて仏だんに仏に関係の深い人、親が死んだときは子や兄弟たちに、かざりだんご

これをオキャクボトケという。(清水)

香

この辺では組合の規定は五百円。(祝儀の時のお祝が千円)(居館)

行 器 (ホカイ)

おこわ、若人が死ぬと白いおこわが贈られる。(居館) 昔は祝儀、不祝儀共に行器を使った。葬式にも、老人が死ぬ時は赤い

弓 物

る。(居館) 一元は念仏講で十円ずつ積立てておくと葬式の跡始末ができたものであい。常識では香奠の半返しというのだが、今は千円位は返し物にする。い。常識では香奠の半返しというのだが、最近は毛布、上敷、布団がわ等が多茶と饅頭が古くから多かったが、最近は毛布、上敷、布団がわ等が多

る。(馬立) 不幸つづきのまじない 一年に同じ家で二人の死者と一緒に埋め度あったことは三度あるといって、藁人形を二人目の死者があった場合、二

水をかけてもらう。こうしないとあの世に行けないという。(萩平)てつるし、外にバケツに水を汲んでおいてひしゃくを用意し、通る人にを洗ってもらうため、朱の無地の三角巾をつくり、一斗樽に麻でしばっ流れ灌頂 お産で死んだ人は、血でよごれているので、千人の人に身

書いて、竹筒のヒシャクで大勢の人に水をかけて貰った。母親の死ぬ時産で死んだ時、ジンデンの真中で流れ灌頂をした。四角な布に経文を

と赤ん坊の死ぬ時と布の色がちがった。(居館)

だのは赤い布をつかった。(大門)て貰った。赤ん坊が出来なくて死んだ産婦の時は白い布出来てから死ん白い布の二尺位のをはって、ひしゃくをつけて置き、通る人に水をかけお産で死んだ人があると、神田という処によく田の掘へ竹の四本柱に

そうすると死出の山を楽に登れるという。 にヒシャクをおいて、通った人が水をかけてやる。 いるから、 濡れていれば後生よく、行ける所へ行けるという。産婦には念が残って て流れの出る所に置き、 お産でなくなった人のために、川に竹四本を立て、 産婦が亡くなると、 特にこうやった。大正時代まで見られた。 四角に竹を立て白い布 通る人が竹びしゃくで水をかける。 (和尚が字を書く) 四十九日までやる。 白布をはり、 布がいつも を張っ そこ

拾ってきて立てたり、小さい墓石を立てたりする。(猿石) 子供の葬式 子供が死んだ場合も葬式は普通にする。墓石は川の石を

猫が死者の上を、三回またぐと生きかえる、という。(清水)スの花が咲いていて、きれいな野原を進んで行ったら、寒くて霧がまいていた。そこに父の菩提寺のオッシャン(和尚)がいて、向らへ渡さなていた。そこに父の菩提寺のオッシャン(和尚)がいて、向らへ渡さないた。そこに父の菩提寺のオッシャン(和尚)がいて、向らへ渡さないた。その人は一旦息が止まってしまった。その人は夢でハ

見たのを、今でも覚えている。(猿石)時に、諏訪神社の裏に小さな花がいっぱい咲いている所をさまった夢を時に、諏訪神社の裏に小さな花がいっぱい咲いている所をさまった夢を

仏おろ-

口を語った。盲目のように見えたが目明きであった。(居館)いなものを背負って来た。白い足袋をはいて居り、頰杖をついて死者のきない。おろしの専門家の女の人が来るとたのんだ。その女は行李みた死者の供養のため、その言葉をきく事があった。これはいつでもはで

に語った。(猿石) 中 を せ 村に女の占い師がいて「池の端の占い」といわれたが、幣

らせ

た。その時は汽車の時間にせかれて声をかけなかった。 で向うから来るその人に午前八時頃出会った。その人は中気病みでヒョ で向うから来るその人に午前八時頃出会った。その人は中気病みでヒョでのうから来るその人に午前八時頃出会った。その人は中気病みでヒョ でのうから来るその人に午前八時頃出会った。その人は中気病みでヒョ

知らされた。 の通ったようであった。夜になったら迎え人が二人来て、その人の死を の別の話。四万の帰りに沢渡の湯に行っていた時、ガラス戸の下を誰

沙汰があった。。(大門)煙草入れを下げて現われた。名を呼びかけたら消えうせた。後に死亡の煙草入れを下げて現われた。名を呼びかけたら消えうせた。後に死亡の某氏は養子であったが山の炭焼小屋に泊っていた。そこへ実家の母が

て、一つ持って行った。(馬立)大きいトウナスが多かった。重なるものはもっていくも の で な いとっる。このとき提灯、ゴザ、妙糖、西瓜、ウドンなどを持ってくる。昔は新 盆 盆棚を作り、新らしいゴザを敷き、近親者 が 墓 詣 りにく

組合、親戚が寄り、坊さんが来ておがむ。(鍋口